

てゐます。

三 感情の種類 女性感情の特色を説くに當り、先づ感情の種類を明かにして置く必要がある。通例感情は、感應、情緒、情操の三種に區分されて居る。それで感應と云ふは、感覺につれて起る快又は不快の情である。詳はしく云ふと、吾々が種々なる刺戟を受ける時に、それが吾々の生活状態と一致するなら、快感を惹起し、一致しないなら不快の情を發生するようになつて居るので、つまり感應は、吾々の身體が種々なる刺戟を受納する時、その生活状態との關係如何によつて惹起さるゝ、簡單なる快又は不快の情であると云つてよろしい。それから情緒は事物の觀念に伴つて起るもので、詳はしく云ふと、外物の我に對する利害の關係から生ずる感情である。其故感應を感覺的感情と云ふなら、情緒は觀念的感情と云ふてもよろしいのであり、而して之を便宜上、一般的と特殊の二種に區分する。その一般的と云ふのは、情緒の中で最も單純なもので、未だ種々なる分化の出來てゐないもの、假令何でも自分に利益あれば喜び、之を失へば悲しむの類であり、又特殊のと云ふのは、色々なる經驗を積んで後に現はれる、種々と違つた特色を帯びたものであるが、

之を更に利己的と社會的の二種に區分する。で利己的と云ふのは、自分の利害、幸不幸に關係して起る恐怖、憤怒、羞恥、嫉妬の如きものであり、又社會的と云ふのは、他人の安寧幸福に關係して起るもので、愛情とか同情とか云はれるような情緒である。

次に情操と云ふは、主として思考作用即ち事物の間に關係を付ける働きに基いて起るものであり、隨て情緒の場合と異り、多くの觀念、豊富なる思想の含まるゝものである。それ故之を思想的感情、又は抽象的感情と云ふてもよいのである。而して之を知識的、審美的、倫理的、宗教的情操の四種類に區分して居る。さて之等種々なる感情の中で、感應に就ては特に女性の特色として擧ぐべき事實も研究もないから、茲には之を省き、情緒と情操の主なるものにつき、女性の心理を説明することにした。

第九章 情 緒

第一 羞 恥 心

一 羞恥心の説明 之は所謂恥かしい心、はにかむ心、内氣で、遠慮深くて、臆病で、他人の面前に出たり、特に談話などすることを恐れて、なるべく之を避けようとする感情で、つまり一種の恐怖心を指して云ふのである。而して其表出としては、顔を赤らめたり、又は身體の一部分なり全體を匿くして、他人から見られないようにするものである。何故そんな場合に赤面するかと云ふに、ダルヴィンは巧みなる説明を試みた。それは人若し他人が自分の顔を見て居ると思ふと、自ら自分の顔に注意を向けるようになるので、爲にその部分へ血液の流通は増進するようになるからだと云ふのである。併し今日では、モツソーなどの實驗的研究によつて、赤面するのは、感情によつて惹起されたる心臓の鼓動亢進に對する、血管運動神經の瞬間的弛緩に基くものであると信ぜら

れて居る。又何故身體の一部分なり、又はその全體を匿さうとするものであるかと云ふに、之はつまり恐怖心の場合と同じように、恐ろしいものに對する、防禦的、退縮的態度から出たものである。所で表出の説明は如何にあれ、這般の羞恥心は子供や女子、特に妙齡の娘たちに於て、多く見受けられることであるから、一般に婦人特に若い女子の性的特徴と見做してよろしいものである。然らば何故羞恥心は、女性に著しいものとなつたのであらうか、之を説明する爲には先づその起原なり性質に就て、攻究する必要がある。

二 スペンサーの説 スペンサーや、セルギーは羞恥心を以て單に衣服の結果と見做して居る。それはどう云ふ譯かと云ふに、野蠻人間で着服することは、粧飾や見えを張る爲に、特に男子の始めたものであり、隨て之は全く男子の特權であると迄に思はれたものである。所が一たび着服の習慣が成立すると、その後に至ては誰れしも裸體となることを恥かしく思ふようになるもので、つまり審美心が羞恥心を起し、審美心を缺く時は、羞恥心も起らないものである。斯様に着服の習慣は、男子から女子に及んだものであるから、羞恥心も亦男子から女子に傳はつたものであると説い

て居る。然るに此説は事實に背いて居るので、今日では採用することが出来なくなつた。例令ばソロモン島のニュー、ジョルジャ人は、陶器製造も機織も全く知らない程の野蠻人であつて、僅に腰に布を纏つて居るに過ぎない、裸體生活を營んで居る人種であるけれども、而かも文明人間に見る如き行儀正しいものがあると云ふことである。又印度洋中のニアス島の半裸體なる土人は、相互の裸體なることには、少しも注意を拂はないけれども、何か彼等の習慣に背いたことをすると、直にそれを讒謗する風がある。例令ば彼等若し沐浴しつゝある婦人の傍を通過しようとする時は、大きな聲を出して、その近づきつゝあることを、婦人に知らしめる習慣になつて居るので、如何に大膽なる青年男子でも、斯様な場合に婦人の答を待たないでは、之に近づくことが出来ないことになつて居る。それで若し此風習に違背した行爲でもしようものなら、酋長から酷しく罰せられるさうである。さうして見ると、裸體生活をして居る野蠻人間でも、羞恥心の大に發達して居ることが見受けられるので、隨て羞恥心は審美心即ち着服の習慣から起つたと云ふ説は誤つて居るやうに思はれる次第である。そののみならず、野蠻人間でも、羞恥心は女子に強い。曾て以國の有名

なる心理學者マンテガツアは、ラブランドの婦人に百五十法を提供して裸體のまま撮影したいと申込んだ時に拒絶せられたけれども、男子は遂に少額の報酬で之を承諾したと云ふ話もある。さう云ふ譯であるから、羞恥心は男子から女子に及んだのではなく、女子から男子に及んだと見る方が、事實に近いと思はれるのである。尤も這般の審美的羞恥心も無根のことではないが、之よりも一層早く現はれ、一層根本的のものがあるやうに思はれるのである。

三 ゼームスの説 我國でも能く知られて居る、米國屈指の心理學者、故ゼームス教授は、その大著「心理學原理」中に羞恥心を解して、人が或る身體的活動を制止したり、又は身體の或部分を匿くすことであるとし、さうして其の起原に就て、前人未言の説を立てられた。曰く「之等の動作はどうして起るか」と云ふに、最初他人の所業に就て加はへた判断を、後に至り自己に適用する所からして起るものである。如何に裸體生活を營んで居る野蠻人間とは云へ、餘りに猥褻であつたり、不作法な所業を取れば、他人は多少之を嫌忌し、輕蔑の眼を以て、之を見ないことはあるまい。そこで人々は、そのような所業をば、自分達もなすまい、そのような人になりたくないと云ふやう

な決心が、彼等の社會的自覺心から呼び起さるゝに至るものである。斯様にして自分は何も他人から嫉妬されたり、非難されたりするようなものではないけれども、決心の結果として、さう云ふことがあつてはと心配して、羞恥心を惹起するようになるものである」と。之は即ち嫉妬説と云ふべきもので、つまり吾々は他人の或る所業に就て、往々嫉妬の情を起すこともあるので、他人も亦吾々自身の或る所業に對して、嫉妬の心を起しはすまいかと掛念する所からして、羞恥心は起るものであると説明するのである。ペインも羞恥心を解して、他人に依りて非難されたり、悪しく思はれることを恐れるものであると云ふて居るが、ゼームス教授の説明に據れば、更にその起原を明確になし得ることである。

四 エリスの説 エリスは其著「性の心理學」中に、羞恥心の成立を説くや、極めて詳細に亘つて居るが、今其の要點を擧げて参考とする。エリスの説く所に據れば、羞恥心には四つの要素がある。その(第一)は性的要素で、その最も單純で、又最も原始的のものである。即ち下等動物に於ても見受けられることで、例せば交尾期でない時に、若し牝狗が牡狗の尾を振つて、なれ／＼しく近

づいて來るのを見ると、牝狗は前足と後足を一所に集め、さうして屈み付くものである。之は恰もビーナスが尻骨盤を後に引き、片手を以て陰部を蔽ひ、片手を以て胸を押へてゐる態度に相當し、全く同一の現象を呈するものである。つまり犬にもせよ、人間にもせよ、斯様な態度を現はすのは、女性が自分の意志に適はない、男性の掛想と云ふか、言ひ寄りと云ふか、戀愛の申込に抵抗し、爲に生殖に關する部分を防禦しようとする目的に基いて起たものである。所が斯様な態度を反復してゐると、後にはそれが習慣となり、又遺傳となつて、女性は何も男性から避け、その襲撃を防禦しなければならぬ必要を感じず、又さうにする意志の存しない時でも、自然に男の前に出ると常に畏縮的態度、遠慮勝ちな様子を呈することになるものである。斯様に女性が異性に對して、防禦的動作を示めすことは、即ち羞恥心の一原因と認められるのである。併し之れだけでは、羞恥心と粧飾や、衣服との關係、特に男性の羞恥心に就て、何等の説明をも與へることが出來ないから、更に(第二)の原因として、エリスは社會的要素を擧げて居る。之はゼームス教授の嫉妬説に相當するものであるが、エリスは、他人の惡むべき所業に對する嫉妬の情を以て、人類の社會的生活に

於ける特性の一として挙げ、さうして之は極く／＼野蠻な原始的の人類社會に於ても、既に見受けらるゝことゝして居る。尤も嫌忌の情を起すだけならば、下等動物の間に於ても見受けられるが、人類に至ては、それが自分自身の所業にも反響し、それに就ても同じような感情を伴ふことゝなるので、之によつて自己の行爲を指導し、他人をして悪感情を起させまいと努むるようになるものである。それであるから、明かに社會的の性質を帯び、社會的の意義を有するものとなつて居るのである。然らば如何なる行爲を嫌忌するかと云ふに、之は人種により、生活の事情なり習慣を異にしてゐるから、一樣な譯にはゆかぬが、嫌忌の情に對する反響は、何所でも同じように見受けられるものである。佛國のリセーと云ふ生理學者は、嫌忌の事實に就て詳はしい研究を遂げた人であるが、この人の説では、野蠻人間で一般に嫌忌せられて居る事柄は、危険でさうして無用なる行爲であるとのことである。それで大小便や、生殖器の分泌物は無用なものであるばかりでなく、甚だ有害なものと、彼等は考へて居るので、大に之を嫌忌するようになり、隨て陰部なり、尻は野蠻人間で嫌忌の中心となつて居ることである。それであるから、彼等は大小便を通ずる時には、

常に女子のみならず、男子も亦同様に羞恥心を惹起し、隨て他人の眼を避け、他人から隔離しようとするさうである。其故着服の起原をば、粧飾のため、換言すれば、所謂虚勢を張り、見えを造り以て他人の注意を惹かんがためとする人もあるけれども、どうもそれだけでは充分な説明にならぬ、必らずや身體の一部なり、全部を匿くすためであつたと信ぜられるのである。尙ほ野蠻人間では、公けの場所で食事することを嫌ふもので、さような時には退いて私かにすると云ふことである。ダヒチー人の間では、禮儀だとか、作法だとか云ふことは、少しも知られてゐないけれども、彼等は他人と食事を共にすることをしない。兄弟や姉妹同志でも、別々に食物を入れて置く籠を持ってゐて、さうして數間離れ、互に背を向けて食事する習慣があるさうだが、つまり食事することを他人から見られるのを嫌忌するものである。又中央アフリカの、ワルア人は、何か飲物を饗せられた時には、布を以て顔を蔽ひ、さうして之を飲むと云ふことである。之も要するに、飲食する時に、之を他人から見られるのを嫌忌する一例である。さう云ふ風習のある爲に、男女共に各自に料理し、且つ炊事する必要があると云ふことである。又中央ブラジルのバカイリ人は、裸體となることを恥

としないけれども、公衆の場所で食事することを恥ぢ、食事をする時には、誰も居ない所へ退くと云ふことである。それで或る時歐羅巴人が、公衆の中で何の遠慮もなく食事をしたのを見て驚き、自分達が恥づかしくなつて、困却した様子であつたが、遂に手を以て顔を蔽ふたと云ふことである。實例は此位にして、然らば何故に野蠻人間では、斯く迄食事を公にすることを嫌ふのであるかと云ふに、之には大なる理由がある。それは野蠻人間では、往々食物に缺乏を來たし、生活に困難することの起るものであるが、斯様な場合に、若し同じ仲間のものが、何不足なく豊かに食事してゐるのを目撃したならば、何人も皆憤怒と嫌忌の情を起さないものはないであらう。そこで斯くも人をして嫌忌せしむるような所業であるからして、爲に自ら恥ぢて、敢て之を公にしないことになつたのである。然るに女子は斯様な場合に、他人の憤怒なり嫌忌の情を防ぎ拒むだけの力がないので、特に食事は内所にし、他人の注目を避けるようにするのである。要するに、社會的感情が發達してくると、世人をして不快の情を起さしめるようなとはなすまい、他人からして嫌忌せられるようなことは避けたい、さうして一層安全に生活したいと云ふ希望が盛んになつて來るので、食

事の如き生活上最も必要なことですら、私かに内所で隠れてするようになったものである。所で文明人間では、勿論往來で立喰ひもすれば、人前を恥かしく思ふこともあらうけれども、さもなければ野蠻人間に於けるようなことはなく、殊更嫌忌する事柄とはなつてゐない。併し身體を他人の面前に露はすことは、特に若し汚穢に染みた、不潔極るものであつたならば、一層之を嫌忌し、恥かしく思ふようになつて居る。特に女子は男子よりも一層之を嫌忌し、恥かしく思ふのは、云ふを須たないことである。ロンドンの貧民窟で、多くの妊婦を診察した醫師の話によると、之等妊婦の抱きし羞恥心は、主として他人から嫌忌されようかと云ふ掛念から起るものであつて、彼等は少しでも醫師の眼中に嫌忌の様子の現はれはすまいかと云ふ、心配と不安の念が、明かにその容貌に現はれて居ると云ふことである。それで若し妊婦が、醫師の方で毫も嫌忌の情を起してゐないと推測し得るなら、それで以て安心して、羞恥の徴候は消失して了ふが、若し少しでも醫師の方で、妊婦の不潔に注意するようだと、心配して羞恥心を起すことである。尙ほ一般に婦人は男子と異り、その容貌に注意し、少しでも他人から嫌忌の情を起されないようにと、心掛けるものである。尤も下

等動物でも、猫や鳥類は仲々おやつしをするようであるが、それから見ると、羞恥心の社会的要素も亦動物的基础を有するものであると云ふてよろしからう。又身體中特に陰部を露はすことは、一般に恥かしく思ふもので、之には他の理由もあらうけれども、嫌忌の情に基くこと大なるもので、要するに羞恥心に於ける社会的要素の影響は大きいものあり、随て嫌忌説は羞恥心の起原を説明する最も重要なものと云ふべきである。更にエリスは(第三)に、禮典的要素を擧げて居る。之はどんなものであるかと云ふに、前述の如く、嫌忌の情からして羞恥心を生じ、人々互に他人の嫌ふこと、不快に思ふようなことは制止して、實行すまいと努めるものであるが、之が後に至て一定の儀式となり、作法となり、所謂禮典となるようになる、それが羞恥心と互に同盟し相協力して働くようになるので、羞恥心の根拠をして一層確固たらしむるに至るものである。そこで禮典的要素と云ふものが、加はる次第であり、又さうなると云ふと、單純なる羞恥心に背くより禮典に反することは、一層重大なる事柄であると思惟するようになり、隨て一層有効に社会的道徳を保持することの出来るものである。這般の事實は舊約聖書中の利未記や、申命記などを見ると能く分

かることである。例令ば婦人の陰部を匿くすことは、特に八釜しい禮典となつて居る。未開時代では、月經を以て有毒なる液體の排出せらるゝものと信じ、陰部は其源泉であると云ふので、月經中は特に嚴しく陰蔽すべきものであるとした。又兄弟姉妹の相姦することは不道徳であると云ふことからして、互に陰部を露出することを禁じて居る。又回々教徒の覆面する風習なども、禮典に依たものである。亞刺比亞人は男でも美男子は、覆面して惡漢の襲撃を防ぐと云ふことであるが、遂に一個の禮典となつたのである。又衣服も最初は羞恥心から起つたものであるけれども、漸次禮典の定むる所となり、特別の場合には特別の衣服を用ゐることとなり、以てそれ／＼特別の意義を表はすものとなつたのである。さうなると、嫌やでも應でも、之に従はなければならぬと云ふことになるのである。又禮典と云ふ程でなくとも、流行も生じて來るので、之を追はなければ、實際も出來ないと云ふようになるから、餘儀なく流行に適つた著服を實行するようになったものである。斯く最初は單純に羞恥心から起つたものが、一定の禮典風習となつて來ると、一層強固なる根拠をもつようになるものである。今一つ(第四)の要素は、社会的經濟的要素と云はるゝもので

ある。之は男子が婦人を財産視する思想の起るにつれて現はるゝものである。即ち男子が婦人を自己獨占の財産であると思ふようになると、他の男子が自己の財産たる婦人に向つて、侵し來る攻撃に對して大なる注意を拂ひ、爲に婦人をして充分に自己を防禦せしめようと努めるものである。そこで男子は婦人に強ゆるに著服を以てすることゝなり、著服は他の男子の接近なり、侵襲から身を守り、操を全うすることの出來る保護手段、防禦手段として、最も必要なものと思惟せらるゝに至るものである。其故多くの野蠻人間では、既婚婦は衣服を著するも、未婚婦は成長の後に至るも、尙ほ著服しないと云ふ風習もあり、著服は未婚婦には自由であるが、既婚婦には必要のことゝ決定せられて居ると云ふことである。由是觀之ワイツヤルツールノーなどが、衣服の起原を夫の嫉妬心にあるとしたのも、確に理由のあることである。然るに父權が發達し、財産と云ふ觀念が一層強固になつてからは、娘の貞操をも尊ぶようになり爲に既婚未婚の差別なく、一樣に著服を餘儀なくせらるゝに至るものである。斯様に財産と云ふ經濟的觀念が伴ふて來ると、女子の羞恥心と云ふものに、更に新しい道德的の意味が附加せられ、以てその根據を一層強固ならしむるものであ

る。即ち男子から云へば、女子なり、その節操と云ふものは、自分の財産であるから、之を保護する爲に著服を強制するのであるが、女子から云へば、若し他の男子の爲に自分の節操を傷付けらるゝようなことがあると、それは元より夫の意志に反することであるし、且つどんな重い刑罰に處せらるゝやも知れないから、その危険を避けるために、なるべく他の男子の注目する所とならないように、又其の肉情を誘發せしめないように、努めて衣服を著用することになるのである。而して更に一步を進めると、女は結髪の仕方、櫛や笄の種類、眉毛の有無、指輪の如何に依りて、既婚者を未婚者から區別し、さうして特別な態度を示めすようになつて居る。

五 何故羞恥心は女性に強きや 羞恥心の起原に就ては既に諸學者の説明した所であり、特にエリスは女性の羞恥心にも論及して居るけれども、何故羞恥心は女性に強きやと云ふことに就ては、その説明未だ充分でないように思はれるので、私は今少しく詳細にその理由を説かうと思ふ。

(第一)女子は概して身體虛弱腕力に乏しい所からして、自然恐怖心に富んで居る。然るに男子は身體も強壯であり、腕力にも優れて居るし、又情慾も旺盛であるからして、屢々女子に對し攻撃

的の態度を以て、その節操を弄ばんとするものであるから、女子は男子に對して、一般に恐怖心を抱き、特に何等關係なき見ず知らずの男子に對しては、遠慮心深く、所謂おじけて、なるべく避け遠からんとするものである。加ふるに野蠻時代に於ては、男子は女子を財産と見做して貨物のよう
に取扱ひ、或は他種族中より掠奪捕獲することもあり、或は賣買したり、交換したりなどして隨分
之を虐待したこともあるので、それが遺傳的に女子の腦裡にしみ込んで居ると見へ、今日に至て
も、尙ほ女子は男子に對して、一種の恐怖心即ち羞恥心を抱くようになって居るものである。フイ
ンクは其著「浪漫的愛と容貌美」と題する書物の中に「捕獲の反應」として、次のようなことを云ふ
て居る。曰く「何故に近世の市民は、野遊びを好むものであらうかと云ふに、スペンサーは、之を以
て吾々の祖先が常に蹲着たる樹蔭で、青々とした芝生の上で、食事などした時に、楽しく思つた快
情の漠然たる記憶であるとして居るが、之と同じように、近代婦人の内氣なること、恥しがること
の原因も亦此の如く、野蠻時代に於ける經驗の反響又は記憶ではあるまいか、即ち彼等の原始的祖
先は、或は捕獲せられたり、或は買収せられて、一家内に圍まれ、且つ苛酷に取扱はれたことがあつ

たものだから、その當時の反響又は記憶として残つて居るのではあるまいか、之は長い年月の間
に、殆ど本能的衝動のようになり、爲に彼等は何時でも、男の前で畏縮し、戦々兢兢たる態度を示め
すようになつたものである」と。さう云ふ譯であるから、恐怖心は羞恥心の一大原因であると、私
は思ふのである。

(第二)羞恥心の主なる原因は、一般に嫌忌心に存すること、前述の通りであるが、其の嫌忌する
事柄が、男子よりも女子に一層多く存在する所からして、自然羞恥心は女子に多いことになつて居
るのである。男子では平氣で無頓着なことが、女子に在りては、著しく嫌忌の情を惹起することが澤
山にある。例令ば容貌なり、衣服なり、粧飾に就ては、女子の方遙かにより多く掛念し、苦心し、少
しでも他人から嫌忌せられはすまいかと、心配するものであるが、そのみならず、女子には月經
と云ふ特別な生理的條件もあつて、それがよし今日では有毒であり、有害であるとは見做されない
にしても、少くとも不潔である、不淨であるとして、一般に嫌忌されるものとなつて居るので、自然
女子には羞恥心を起す事情が多い譯である。

(第三)女子に貞操心多きこと。男女何れが餘計に道德心に富めりや、と云ふことに就ては議論もあらうが、兎に角節操を守ると云ふ心、所謂貞操心の女子に多いことは、争ふべからざる事實である。其故既婚の婦人は元より未婚の女子と雖も、異性に對しては、妄りに心を許さない、容易にその心に従はないものがあるので、自ら羞恥心も多い次第である。

(第四)女子は男子の心を引きつけ、さうして其の情を興奮せしめる手段として、所謂手練手くだを弄するようになって居る。でその最も單純な、至て無邪氣なものでは、可憐な露をも、厭ふと云ふ、如何にも恥かしさうな、而かも愛らしい風情を示めすものである。所が所謂凄腕など、云ふことになると、わざと男を嫌ふような風を示めし、而かも全然ふり棄てるでもなく、寄れば逃げ、遠ければ追ふと云ふ調子で漸次戀愛の深淵に陥れんとするものである。斯様な手段は下等動物にも見受けられることで、例令ば交尾期に於ける牝狗は牡狗の後を追ひかけながら、雄が自分の方に近くと却て逃げ廻はり、遂には防禦的態度を示めすこともあるようなもので、之はつまりそれに依て雄の心を誘發し、その慾情を亢進せしめんとする積極的手段となつて居るものである。其故人類

に於ける女性の手練手くだも、動物的基礎を有するものと考えられるのであるが、それは兎も角さう云ふ風にして、羞恥心が男の心を迷はし、之を自分の方へ故意に引きつける手段にもなる場合には、最早英語の所謂「モデスチー」ではなく、「コケツトリー」即ち嬌羞とでも譯すべきものとなつて居るのである。フイソクは「他人らしくする女の狡猾」と題して、次のようなことを云つて居る。曰く「獵師は家に飼てある鹿に目を留め、之を捕へようとはせぬ。漁夫は殊更池中に養てある魚を獲ようとはしない。彼等は必ずや山に登り、流れを侵して危険を顧みず、風雨を忍び饑餓に堪へ、骨を折て狩獵に従事せんとするものである。斯くして獲物のある時は、其の喜悅とする所大にして、その獲物や實に名譽の勝利を表はすものとなるのである。即ち獲物の價値は、之を獲得するに要する困難の度に正比例するものであるが、婦人には這般の本能的知識があつて、如何に男子が戀愛を以て、云ひ寄るも、容易に近付かしめない。思へらく彼等は力に於ては、到底男子には及ばぬけれども、而かも彼等には示めすべき美貌あり、以て男子の心を恍惚たらしむべく、又彼等には自ら羞恥心あり、以て男子をして戀愛は寧ろ之を追求するの愉快なるものなることを知らしめんと

す」と。斯様な次第で以て、羞恥心は女子に於て、より多く現はれるのである。

六 文明の進歩と羞恥心 さて男女を通じて、羞恥心は文明の進歩につれて、益々著しくなるものであるか、又は漸次減少するものであらうか。一方から考へて見ると、文明の進歩と共に教育は普及し、之に伴ふて科學的知識は増進するので、従來吾々の不愉快に思つたり、嫌忌したことが、左程に感ぜられなくなり、又は今迄大層なことに思つてゐたことが、格別意に留める程のことでもない、自然注意しないようになることもあるので、羞恥心は漸次減少するように考へられないでもない。併し又一方から考へて見ると、文化の進展と共に、禮儀作法等も益々上品になり、細かになるので、羞恥心の起るべき範圍は段々に擴張せられるようになるだらうと思はれるのである。例令ば吾々日常の言語動作に就ても、従來何とも意に介しなかつたことが、段々と不作法であり、無禮であり、紳士なり淑女たるには不適當なものであると認められるようになり、隨て一々之に向つて注意するようになり、出来るだけ謹慎なる態度を取ることになるだらうと思はれるので、よし一方で羞恥心は減少しても、一方では増加するので、その内容は變化するが、羞恥心そのものは何時

迄も存在し、つまり人類の社會的生活には、必要缺くべからざる、大切なものであると、私は信じてゐます。然るに男子は従來一般に粗暴で、木訥で、不謹慎で、少くとも單純で野人禮に倣はずと云ふ風もあるので、隨て禮儀作法を守るの心、換言すれば羞恥心を缺くことも少しとすまいし、又世人も之を餘り意に留めないような傾きもあらうが、之に反して、女子は元來羞恥心に富んで居るし、風習を守るの心も厚く、特に謹しみ深い性質のものであるから何處迄も禮儀作法の維持者となり、改善者となり、以て社會的生活をして、益々上品なもの、優美なものとする、一大天職をもつて居るものと考へられるのである。されば、羞恥心は女子に取て格別大切なもので、之を缺いたならば、前述のように、社會を美化し醇化すると云ふような、女子の天職はなくなり、又女らしい優佳な特質も見えないことになつて了ふものである。但し一つ問題となるのは、羞恥心の内容と態度の如何である。即ち女子は何を恥かしく思ふべきであるか、元より女のことであるから、男と同じようにと云ふのではないが、苟も今後教育ある女子としては、妄りに容貌を氣にしたり、衣服や裝飾に就て恥しがる必要はない。又徒に一家の生活状態なり、夫の社會的地位を彼是氣に惱む必要もな

い。蓋し女子は各々その與へられたる身分、地位、財産、才能は如何にあれ、それ相應に自己の本分を完うし、最善を盡すと共に、婦徳の涵養、人格の向上に志すべきものであるから、女子は特に此點に留意し、その成否如何を以て羞恥心の基礎となすべきである。又その發表に就ても、無暗に恐縮して、應對挨拶も出來ないと云ふのは餘りだと思ふが、さればとて妄りに嬌羞的態度を取るのも醜劣見るに堪へないので、女子には相當の愛嬌なり、上品なお世辭、人を外らさぬ交際ぶりの中にも、あまり出しやばらない、多少控目で、落付いた態度、あまり厚ケ間敷くしないで、何となく内氣で、しとやかな態度であつてほしい。要するに、羞恥心をば、物質的よりも道德的のものとし、之を以て謙遜の心と一致し、謹慎の態度と合體せしめたいものだと思ふ。

第二 嫉妬心

一 嫉妬心の説明 羞恥心に續いて幼時より現はれ、特に女性の特質なるかのように云はれて居るものは、即ち嫉妬心である。所で嫉妬心とは如何なる感情であるかと云ふに、リポーは其著

「關緒の心理」中に、デカートの下したる定義を掲げ「吾々が或る所有を保持したいと云ふ欲望に關する一種の恐怖心である」と説いて居るが、果して然るや、私は疑念を挾むものである。一體羞恥心の恐怖心に基いて居ることは明かであるけれども、嫉妬心は恐怖心から出たものでなく、寧ろ憤怒の一種類であるとするべきである。さればにや、ペインも其著「心理學」に於て、嫉妬心をば「優勢とか、勢力とか、又は指揮とか、長上とか云ふ、吾々の自覺を毀損せられた時に起る短氣、憤怒の情である」と云ふて居る。要するに、嫉妬心は利己心に基くものであるが、詳はしく云ふなら、若し他人が自分よりも、性質であれ、才能であれ、容貌であれ、財産であれ、地位であれ、苟も自分の價值を決定するものに就て、優つて居る勝れて居ると云ふことを認められた時、又はよしや他人が自分よりも何かに於て優越して居ると云ふのではないけれども、自分一個で専有して居るもの、又は専有したいと思つて居るものを、同じように他人も占有し又は占有せんとして居ることを發見した場合、例令ば自分が甲の人を愛して居るのに、乙が同じく甲を愛せんとするような時、之を不快に思ひ、苦痛を感じ、且つ恰も自己の價値利益を毀損せられたか、又は掠奪せられたかのように思惟し、爲に

憤怒の念を發して、復讐しなければならぬような氣持になり、隨て他人の有する價值利益を、自分と同等若しくは、より以下に引き下げるように、之を傷け害せんとするものである。然るに此感情も恥羞心と同じように、動物間にも現はれて居るもので、曾てダルヴィンの指摘したように、雙方の角が解かれない程、互に固着したまゝに、死んでゐた二匹の牡鹿が、能く發見されることを以て見ると、如何に彼等は嫉妬のために、激烈なる争闘を敢てするものであるかゞ分かるのである。其故此感情も動物として仲々根深いものであるが、人類にありても、幼い時早くから現はれ、二才にもなれば、他の子供が菓子などを持つてゐるのを見て、既に嫉妬心を起すものであり、進んで青年期になると、一方には競争心も強くなつて居る所へ、一方には戀愛の情も盛んに起るので、その爲に烈げしい嫉妬心を起し、甚だしきに至ては、犯罪の原因を醸すことにもなるものである。

然るに男女何れが、より多く嫉妬心に富むかと云ふに、それは明かに女子であつて、彼等は幼い時から殆ど本能的に之を感じるものゝようである。嫉の字は女の疾病を意味し、妬の字は女が石を以て他人を害せんとする心を示めしたものであるとのことであるが、嫉妬は女に附物、その特性

たることを表はしたものである。それは兎も角として、マリオンの引用して居る、ヂュパンルの經驗に依ると、女兒の方に嫉妬心は一層強く、且つ激げしく現はれるものであることを認めることが出来る。それで女兒は家庭に於ても、又朋友間に於ても、屢々より多く嫉妬心を起して居るもので、特に顯著なる一例は、十才になる少女が、自分の親しい友達を新參の小女に奪はれたと云ふので狂言じみてはゐたけれども、本當に怨めしく思ふて、「彼の女は憎い、彼の女は憎い、オー彼の女は憎い」と、母親に告げたと云ふことである。又ホール先生の引用して居られる、マルローの調査によれば、本能的嫉妬心は、青年男女を比較して見るに、男性の一と二分一に對する、女性の十七と云ふ割合になつて居る、即ち十倍以上女性に多いと云ふことになつて居る。斯くも嫉妬心は女子に強い所からして、特に若い女子には、容貌や、才能や、家計等に於て、他人の自分より優越して居ることを、默視するは容易のことでないらしい。斯くして烈げしく嫉妬心の起つた場合には、往々大膽な、思切り亂暴な、又頗る殘忍な所業を敢てすることも稀れでない。本妻が嫉妬の餘り妾婦を毒殺したなど云ふ話は、昔は能くあつたことである。それ程でなくとも、ホール先生の擧げて居

られる實例に依ると、何等精神に異状のない、普通の愛らしい少女ですら、自分の最も親しく交つて友達の亡くなつた時に、その新しい墓所の側で「うれしやく私の友達は亡くなつた、併し私は生き長へて居る」と、さも愉快さうに、歌ひつゝ踊つてゐたと云ふことであるが、可憐な少女の競争心なり嫉妬心は、よく自分自身を下したのではないにしても、友達の死をすら喜ばしむるに至るものである。ロングローゾも、曾て青年期に於ける二人の女性間に、永久の友情と云ふものは、嫉妬のために妨げられて、到底實現し得られるものでないと、云つたのも強ち極端な説とも思はれない。尤も此のように競争心や、嫉妬心の餘り、他人の不幸や、その死をすら、寧ろ喜悅の情を以て迎へると云ふは、單に女性にのみ限られたのではなく、男性中にも、特に學者とか人物とかとして、他人から尊敬せられるような、高尚なる性格を有する人達の間に於ても、往々見受けられることで、人は社會的動物なりと稱へられつゝも、同時に又利己心なり主我心の如何に強いものであるかを想像せしめられることである。別して世の政治家とか勢力家と云はるゝ人にして、その友人の不幸に際し、元より悲哀の感を起すには相違なきも、友人の亡くなつたと同時に、自己の勢力範圍は

擴張せられるので、其心の奥底に於て、私かに欣然たるものあるは、往々實際に見受けられることである。然らば何故人間には、斯くも淺ましい、卑劣な心が潜んで居るかと云ふに、之は根據のあることで、其起因する所仲々遠く且つ深いものである。ホール先生の説では、吾々の祖先は、過去の原始時代に於ては、極めて小さな社會的生活を營み、生活の方便も極めて少く、隨て屢々衣食の資に窮し、大に缺乏を感じたこともあつたのである。然るに斯様な時に當りて、その組合員の減少すると云ふことは、即ち供給増加を意味するものであつたからして、他に充分なる供給の途なき限り、他人の死亡を喜ばざるを得ない事情にあつたものである。此の如き原始時代の精神が、今尙ほ吾々の腦裡に潜在して、他人の不幸をも、吾々をして知らず識らず喜ばしむるようになって居るのであることである。斯様に嫉妬心の根源は、遠く動物間に存在し、又原始人の間にも見受けられるものであるが、それが今日の社會にありては、特に若い女性に著しく現はるゝものとなつて居るのである。所が嘗に若い間ばかりでなく、相當の年頃になつて、戀愛上の競争も起つたり、又は結婚して夫婦の關係も出來た場合にも、尙ほ女子は男子より一層強い嫉妬心を現はすものであ

るように、一般に信ぜられて居るが、之は果して事實であらうか。私は嫉妬の餘り、残忍極る所業を敢てする場合が、女性間にも少くないことを認めないではないが、併しそれは斯様に嫉妬心を起さざるを得ない機会が、女子に多くあるからのことで、若し男女其位置を轉換したならば、男子と雖も必ずや嫉妬の餘り、同じような所業に出づることであらうし、否さような境遇に立たないでも、世間には随分悋氣深い男子もあつて、他の男子と立話をしたとか、連れになつて歩いたとか、何でもない些細なことから、強い嫉妬心を起して、その妻を打擲するとか、虐待すると云ふようなことも、屢々新聞種になつて居ることである。其故斯様な場合になると、實際男女間に何等の差別なしと云はんか、否寧ろ男の方に餘計で且つ烈げしいのではないかと思はれるのである。併し斯様な場合を除き、一般から云へば、特に若い人達に就て、公平に觀察するに、どうも嫉妬心は女性の方に多いように思はれる次第である。

二 女性の嫉妬心に富める理由 嫉妬心の女性に多いのは、争ふべからざる事實であるが、それはどう云ふ譯であるか、その主なる原因理由を擧げて見よう。

(第一) 女子は虚榮心に富んで居る。虚榮心とは、文字通り空虚なる榮譽を求めめる心で、詳はし云はゞ、眞に尊重する價值のないもの、それで以て自己の資格を測定するには餘りに貧弱な事柄で以て、他人から稱讃せられ、持て囃されんことを希ふ心である。例令ば衣服とか粧飾品とか、又は容貌とか化粧など區々たる外形美を以て、人に誇らんとするが如きものであるが、それが何故女子に多いかと云ふに、一般に女子はその教育程度が低く、隨て理想も高くないし、且世人も亦強いて之を女子に求めず、婦人の人格尊重などは夢想だにせず、單に解語の花とか、生きた美術品位にしか思はなかつた時代もあるのて、女子自身も自然に其氣になり、つまらぬ些々たる事物を尊重するようになつたのであり、更に又女子は元來依他心即ち他人に依屬する精神の強いもので、自己の獨立した見識の少い所からして、何事も他人の意見に依て左右せられるものであり、爲に進んで他人の氣に入るように努め、その稱讃を博せんと骨折るものである。ロンブローゾ女史も、婦人の特色は外物中心又は他人中心であるため、絶えず他人に依屬して居るのも自然の數であると説き、更に「婦人は事物其自身よりも、より多く他人の意見に留意するものである。何となれば、他人の意見

は事物よりも、より多くの價値を有すればなり」と云ふて居るような譯で、要するに、婦人の依他心は殊ど本能的であり、隨て虚榮心も旺盛なる次第である。尤も男子とて虚榮心のない譯ではないけれども、男子は自分の力量、手腕を以て人に誇らんとし、又獨立心に富んで居るから、妄りに他人の稱讃を是れ求めんとすることなく、場合に依つては、世評を意に介せず、超然として自信の上に立つものであるから、自ら虚榮心も少いのである。それは兎に角女子は男子よりも、一層他人から褒められたい、愛せられたいと云ふ欲望の著しく旺盛である所からして、自ら競争心も熱烈を來たし、若し他の女子が自分より、容貌なり衣服なり、其他の點に於て優る所ありとせんか、それだけ自己の價値は低落するものと心得、仲々落付いてゐられない、黙視して居る譯にもゆかぬものである。併し競争には限りあり、又自分の希望通りに、自分は凡ての點に於て、優者たり得ないものであるから、嫉妬心はいよ／＼確實に惹起されるのである。それで甚だしいものになると、誰れか他の女子を褒めでもすると、直ぐ様それは自分を貶したものと、様に解し、又他の女子に少しでも、お世辭を云ふて居るのを耳にすると、それは即ち自分を輕侮したものであるかのように思ひ、さう

して常に對話の主人公に慊焉たるばかりでなく、何の罪もない相手の女子を惡み、その餘り往々之を傷け害せんとするに至るものである。斯くて如何にも親しく交つてゐる朋友に對しても、何か自分より優つて居るのを發見すると、心私かに仇敵の思ひをなし、隨て寧ろ友人の不幸を望むような惡意をさへ挾さんで居ることもあり得るものである。さう云ふ次第で以て、女子の虚榮心に強いのが、やがて嫉妬心に富む一原因となるものである。

(第二)女子の有つて居る自我の觀念と云ふものは、甚だ狹隘なものである。なぜかと云ふに、それは云ふ迄もなく、其日常生活が多く家庭に限られ、其交はる所甚だ狹少であるから、自分の家族否時としては、自分の夫、子以外には、餘り關係せず、隨て利害を感じず、興味を起さないの、自然社會的自我と稱すべき、包括的な擴大されたる、自我觀念の發達を見ることが出来ないからである。近來各女學校の同窓會も盛んに活躍するようになって居るから、婦人間にも、我が學校、我が同窓會と云ふ風に、その興味が家族以外にも及んで居るようであるけれども我が町村、我が國家と迄は進んでゐなく、さなくとも、其社會心は尙ほ幼稚であり、其團結的精神は實に薄弱と云はざる

を得ない状態にあるものである。之を以て甚だしきに至ては、家族同志でも、特に姉妹間では利害の衝突少なからず、互に敵視するようなこともあり、要するに、婦人の自我観念はまだ、家族と云ふ小社會の範圍にすら擴張されてゐないようなところがあるので、自然、彼等は自他の間に他人と云ふ差別心が強く、爲に競争心も強く、嫉妬心も起り易くなるのである。ロンブローゾ女史も云ふて居る。「婦人はどんなことに關しても、又どんな人にも、自分の知つて居る凡ての人に對し、又知らない多くの人に對しても嫉妬心を起すものである。往々にして母親は其子の爲に未だ選擇してゐない未來の妻をも嫉妬するものであり、又書中に記されたる女僕をも嫉妬するものである」と。又以て婦人は如何に、自我観念の狹隘にして、他人を敵視し易いものであるかを知るに足る。

(第三)女子は一般に論理的知能を缺いで居るので、思想の原理たる因果律などを無視する傾向を有することは、既に説明した所であるが、その爲に事物の間に存する、因果關係に就て正確なる判断を缺き、毫末も關係なきものにも、何等かの關係あるが如くに思惟する場合少なからぬものがある。他人の幸福利益を嫉妬するも、その一例である。蓋し彼等は他人の我に優り居ることを、自

己の劣り居ることの原因と見做し、又自己の劣りたることを、他人の優りたることの結果なるが如くに思惟し、彼我優劣の間に、判然たる因果的關係ある如くに思ひ込み、爲に他人は自己の所有權を侵害し、自己の所有物を掠奪したるが如くに感ずるので、こゝに猛烈なる嫉妬心も生じ來るのである。其愚や實に憐むべきものがある。マリオンが引用して居る、カントの言に「男は愛があるときに、愷氣するけれども、女は愛なくとも、愷氣し、凡て他の女に誘はるゝ男は、皆是れ自分を見棄てたものゝように思ふものである」とあり、又ワイニゲルも、次のようなことを云ふて居る。曰く「凡ての婦人は、明かに嫉妬心の深いものであるが、之は他人の權利を承認し難いから起ることであり、又正義觀念の缺乏に起因するものである」と。其故若し女子にして、眞に他人の權利を認め、少しでも之を侵害しないように努めたならば、如何に他人が自己に優つたり、自己の意に反する如き行爲ありとて、之を怨み妬むべき心の起る筈のものでない。併し彼等はどうも因果的關係を正當に了解し得ないものであるからして、斯くも卑劣な心を起し、自ら其徳を傷けるようなことを敢てして居る次第で、私は婦人達の爲に大にその反省を求めたいと思ふのであります。

(第四)更に女子をして、一層猛烈なる嫉妬心を起さしめ、且つ往々見るに忍びない程な残酷な所業にも及ばしめた原因は、女子の特性に基くと云ふよりも、寧ろ其経過したる特殊な境遇の然らしめたものであると思はるゝ所もある。それは即ち一夫多妻の風習であり、又一夫一婦にしても、男子の不品行なることである。公然にもせよ、内所にもせよ、夫が多くの妾婦に接することは、如何ばかり妻たるものゝ心を痛めしむることであるかは、野蠻人の間にありても、將又文明人の間にありても、社會の上下、身分の如何を問はず、等しく見受けらるゝことで、人情に變はりはない。尤も時に例外のないでもない、リードの云ふ所によれば、中央亞弗利加の或る部落では、妻は夫に向つて、更に他の妻を娶ることを勧誘し、若し應ぜざれば、夫を畜畜な奴と誘ると云ふことである。又リビングストンの實見談によると、マカロ、人の女が、英國では一人の男は一人の女より外には、妻としないと云ふことを聞いて、吾々はそんな國には住むたくないと叫んだとのことである。嘗に野蠻人間に於て然るのみならず、我國にありても、今尙ほ夫が他の女に接するのを男の譽れのように思つたり、妾狂ひは夫の特權であり、男の力量であるかのように考へ、さうして毫も嫉妬しな

い、少くともさう云ふ風に見える婦人もあるようである。之は元より道德思想の幼稚であつたり、従來の風習なり教育の然らしめたものであるけれども、經濟狀態も與つて力ありしことと思ふ。即ち多くの婦人は獨立の生活を営むことが出来ないで、男に依頼し、その保護の下に所謂寄生的生活を餘儀なくされて居るので、若し生活の安定があり、何不自由なく暮らすことが出来るなら、夫の不品行などは問題にならないで、自然嫉妬心も起さない場合も少なからぬように思はれる。斯様に例外はあるとしても、夫の不身持に對し妻が嫉妬しないと云ふのは人情に反すること、さような場合には嫉妬するのが當然であると、私は信じてゐます。それであるから、元より例外はないと云ふような實例は澤山にある。その最も滑稽なのを挙げると、フィジー島の女である。此島では多くの女が鼻を有たないので、或る歐羅巴人が其理由を尋ねたら、それは一夫多妻のためであり、嫉妬の餘り最も強い女が、他の女の鼻を切り取るか、又は喰ひ切るのだと答へたさうである。それであるからして、野蠻人間でも、多くは幾多の妻妾に別々の住居を與へたり、又は一 가족の中

から、多くの姉妹を妻に迎へなどして、妻妾間の不和争闘を避けんと企圖するものであるが、如何なる手段を講ずるも、嫉妬心は抑へ難く、隨て紛議は免れないものとなつて居る。斯く喧嘩も起り、騒動も生じ、一家の平和を破ぶるにも拘らず、何故野蠻時代に一夫多妻の風習は行はれたものであらうかと云ふに、ウエステルマルクの説では、人類は元來一夫一婦の制度の下にあつたものだが、少しく文明に進みて後、種々な事情の爲に、一夫多妻の風を生ずるようになったものである。で其主要なる理由は、(一)女子には毎月故障あるのみならず、又時として妊娠することもあるので、此間性慾を満足せしむる手段として、男は多くの妻を要するのである。特に野蠻人間では、妻が毎月の故障や、妊娠の際には、宗教上の迷信から妻を敬遠し、決して近寄らないようにしてゐるので、自然他の妻妾を要することゝなつて居る。(二)妻が年寄りになると、男は更に他の若い女を求めることになる。男は最初同じ年頃の女を娶るのであるけれども、女は特に勞働するものは、早く老衰するものであるから、元氣の旺盛なる男は、更に他の女を要するのである。(三)又男は變化を好み、新奇を望むもので、新しい女を求めるのである。さう云ふ心理状態からして、或る野蠻人

間では、暫時妻の交換を敢てすることもある。(四)子の出來ないためもあり。(五)又子は出來ても、妻の多いだけ、それだけ、子も多く出來る譯であり、妻子の多いと云ふは、即ち男の權力増加を來すことゝなり、勞力や、勞働の優勢を生じ、隨て他人より尊重せられ、畏敬せられことゝなるので、自然多妻に傾くものである。斯様な譯で、早くから一夫多妻の風習も行はれ、隨て女子の嫉妬心は著しいものとなつたのである。

(第五)尙ほ幼時に於て、女子に嫉妬心の多い一の理由として、母親の影響も挙げねばならぬ。即ち多くの女親は女兒を養育するに當り、常に他人の娘等と競争的態度を取り、爲に子供の前で他人の娘どもを酷評し、少しでも己が娘より卓越する所あらば、之を仇敵視し、特に學校の成績が良いとか、賞與でも貰つたと云ふように、名譽を博したとか、幸運に出逢つたと云ふようなことがあると、益々之を嫌忌し憎くて堪まらないようになり、爲に殆ど復讐的に先方の缺點過失を見出すことに汲々として、日も惟れ足らざる風を示めすので、自然娘等も母の感情なり、態度を學び、自分等も亦同じように嫉妬心を深ふようになるのである。

三 嫉妬心の道徳的本分 前述のような次第で、嫉妬心は殆ど女性の本能的特質であるかのようになり、見做さるゝに至つたものだが、その原因は如何にあれ、世の父兄なり、教育に従事するものは、女子の教育上、此點に就ては、幼時より特別な注意を拂ひ、如何にもして斯る非社會的感情を根絶するように努力せねばならぬと思ふ。併し夫婦の場合に於て、夫の不品行を咎めないで、獨り妻たるものゝ嫉妬心のみ責めるのは、甚だ其當を得ないものと、思はるゝのみならず、斯様な場合にありては、他の場合と異り、嫉妬すること却て當然のことで、之を責むるは、妻たるものゝ權利を無視する譯である。元より何等因果の關係もない他人の幸福に向つて嫉妬するの、無智不徳なるは云ふを須たないけれども、眞に妻としての權利を蹂躪せられ、其幸福を褫奪せらるゝ場合に於て、嫉妬心を起すは、即ち正當防衛であり、之に依りて自己の權利を主張し、自己の幸福を保護する所以のものであるから、私は寧ろ獎勵すべきことであり、古來東洋道徳で以て、之を婦徳に反するが如くに教へたのは大なる誤りであると思ふものである。オーガスチンは「嫉妬のないものは、愛情のないものだ」と云ふて居るが、實にその通りで、苟も夫に對し眞に愛情ある妻なれば、夫の不身

持に對し、嫉妬心の起るべき筈である。そこで斯様な場合に問題となるのは、嫉妬心の起る、起らぬではなく、其程度なり、表情の如何にあることと思ふ。いくら嫉妬心は正當防衛なりとて、妄りに夫の所行に疑心を挟み、所謂吝氣深いのは慎むべきことであり、又之を言語動作に表はして、何の憚る所もなく漫然と憤怒怨恨の情を漏らすが如きは、淑女として實に不謹慎なことである。さりながら夫の不品行、不身持な場合に、内心如何に嫉妬心の禁する能はざるものありとて、容易に之を外貌に表はさずして、靜に夫を諫め、諄々として其非を誠しむるが如き所業に出でんか、嫉妬心は實に淨化せられ、聖別せられたるものとなり、寧ろ婦徳の一に數へらるべきものとなるのである。フイソクが「嫉妬心は愛情の食鹽であり、胡椒である。之を少しく用ゆれば、ピリ／＼として風味を増すも、多きに過ぐれば、之を損ねるものである。それで嫉妬心の道徳的本分は、注意と恐怖とを以て、貞操と純潔とを保護監視し、さうして愛情の發展に資するものである」と云つて居るのは、味ふべき言であると思ふ。要するに、嫉妬心の道徳的本分、使命は、貞操純潔の監視者であり、保護者たるにあり。而して監視者としては、用意周到でなければならぬ、少しでも油斷があつ

てはならぬ、又保護者としては、温かい心をもち、忍耐強くあらねばならぬ。

第三 愛情及び同情

一 愛情及び同情の説明 兩者は、恐怖、憤怒、嫉妬などの如き利己的、主我的のものと異り、自分以外の物の安寧幸福を希望する利他的のものであるから、社會的情緒とも云はれるのである。それで愛情と云ふは、他人なり他物を好むことであり、詳言すれば吾々人類は天性として、利己心を有すると共に、孤立獨存を嫌ひ、他人と共同生活を営まうとするものであるからして、その互に相近づき、互に引合ひ仲間にならうとする性情を指して云ふのである。で之を廣義に解釋すれば、天地萬物、動植物に對する愛情、朋友間の愛情、親子間の愛情など、凡ての場合を包含するが、之を狭義に解する時は、單に男女間の愛情、即ち戀愛を意味することになつて居る。併し同じく戀愛にしても、リポールの説く所に據れば、之を三段に分けることが出来る。その第一は、本能的戀愛と云ふもので、動物間にも見受けられるように、男女は生理的に自ら相引き合ひ、さうして性慾を満足

せしめんとし、それ以上には何等高尙なる感情なり、思想を有たないものである。而して其第二は、情緒的戀愛と云ふもので、つまり本能的戀愛より更に一步を進めたもので、性慾的愛情に加ふるに、種々なる感情を以てするものである。スペンサーは、此種の戀愛を分解して、肉慾的愛情の外に、親愛の情、尊敬の情、同情の念などを包含するものとして居る。更に第三は、合理的戀愛と云ふものである。之は吾々の知能が、特殊の觀念から、抽象的なる概念を構成するように、吾々の戀愛も更に向上して、特殊の個人を戀愛すると云ふのではなくして、其理想を求めんとするものである。詳言すれば、具體的なる個人の裡に、抽象的、理想的なる戀愛を構成せんとするものである。つまり世の所謂「プラトニック、ラブ」と稱するもので、全然肉體的愛情から脱出したる、純潔なる友人間の愛情を指して云ふのである。

斯様に愛情は區別せられるものであるが、一體に愛情の起る時は、何人も莞爾として笑みを含み、又なるべく愛するものに接近し、或は接吻し、或は愛撫し、或は互に抱擁して、何時迄も共存同居しようと思ふものである。斯く愉快な感情であるからして、動作は自然に活潑になり、血行な

り、呼吸は旺盛となり、爲に内臓器官にも影響して、その作用を敏活ならしめるものであり、母親にありては、乳の分泌を増進せしむるものである。

それから同情と云ふのは、他人の心中に起る喜悅なり、悲哀の情をば、自分にも分配し、その人と同じように感じようとするものである。之を愛情と比較して見るに、愛情は時に幾分か利己的の分子を含んで居ることもあるが、同情は全然自己の利害を顧みないで感ずるものであるから、純然たる愛他的、社會的の感情と云はれるのである。尤も吾々の愛する人に對しては、無論同情も容易に起り得るものであるから、さう云ふ場合に、判然兩者を區別し難いこともあるけれども、吾々は全く見ず知らずの他人で、毫も愛着の念を有ないものに對しても、否更に進んでは、自己の敵手と認め、憎惡の念をさへ抱いてゐるものに對しても、屢々如何にも氣の毒だ、哀はれなことだと、同情に堪へないこともあり得るので、同情は愛情なくとも感ずることが出來、隨て同情は愛情より一層廣い範圍のものであり、更に進歩したものであると云はれることである。

然るにリボーに據れば、同情の進化に三段階を認めることが出来る。其第一は、生理的同情であ

る。之は同情の原始的状態にあるもので、他人の笑つたり、泣いたりするのが、自然に傳染するもので、全く反射的に、自發的に、無意識的に起る一種の模倣運動である。而して第二のものは、心理的同情である。之は純粹に自他情緒の一致であつて、他人の示めす感情の表出に基き、自己の心中に同じような感情を惹起するものである。又第三のものは、知識的同情である。之は他人の思想を了解し、之に依りて他人と同じような感情なり、行動を現はすに至るものを云ふのである。そこで最も進歩したる同情に於ては、(一)他人の抱いて居る感情の外的表出を目撃して幾許か感動すること、(二)依てそのような表出の意味を考へ、さうして其原因を探ぐることに、(三)斯くて他人の心中に抱いて居る觀念なり思想を了解して、之を自分の心中に想ひ起すこと、(四)その上で他人と同一の感情なり動作を惹起することとなるので、仲々複雑なものである。斯様にして一たび眞正なる同情の念を起すに至らんか、我々は其爲に進んで、他人の悲みを慰め、又は歡びを祝ふと云ふような行爲となり、隨て同情をして更に倫理的價值あらしむるに至るものである。

二 女性愛情の範圍 女子は云ふ迄もなく、一體に性質優さしく、且つ涙もろいものであるか

ら、男子よりは著しく愛情や同情に富んで居るのは、明かな事實であり随て其發露する事物の範圍は廣いようであるが、今その主なるものを列擧するなら、(一)自然に對する愛情は、どうであるかと云ふに、彼の山に遊び流れを楽しみ、自然を友として塵界を忘れるとでも云ふような、詩人墨客的の趣味、所謂美的情操は餘り發達してゐないようであるけれども、春の日に野原に出で、蝶々と戯れ、草花を摘んで楽しむと云ふような、優さしい情緒は、たしかに男子以上にあることゝ思はれる。(二)又小鳥を飼つたり、兎を養つたり、又は犬猫の如き家畜を愛撫する態を見るも、動物特に小動物に對する愛情は、女子に於て一層濃かなるものあるを認めざるを得ない。野蠻人間でも、男の生け捕つた野獸の子を飼ひ慣らし、之を撫育して遂に家畜たらしむるに至るは、全く女の任務であると云ふことである。(三)女子は幼い時から人形を好み、之を眞の子供のように愛撫し、又能く其弟妹の世話をなし、全く母親の代理を勤めて居るのを見ても、又その親に對する態度も、男兒より著しく優さしい様子を認めし、更に夫婦の間柄に就ても、如何に妻に於て情愛の深いかを知り得ることである。多くの妻は夫に滿腔の愛を献げ、専心夫の幸福を希ふものであるが、マリオ

ンの引用して居る、「目明きの若い女子にして、盲目の男子に嫁ぐ者はあるが、目明きの男が盲目の若い娘を娶る者は非常に稀なことである」と云ふ、オーソンヴィユ伯の言は、妻の犠牲的精神を表したもので、面白い觀察だと思ふ。(四)然るに、女同士の交際に於ける友愛の情に就ては議論があり、女は男に劣るとも云はれて居るが、併し其子女に對する母親の愛情は全く特別なもので、これあればこそ人をして女性をば、愛の權化たる如くに思はしめるものである。依て之等二つの場合は後に詳しく説明しよう。(五)尙ほ變態の愛情であるが、同性間の戀愛と云ふものは、從來男性間のみ限られ、女性間には見受けられないことのように信じられてゐたものであるが、其實決してそんなものではなく、至て古くからあり、又随分廣く行はれ、男性間よりも寧ろ多いと云はれる程である、これに關する細かい説明は省略するが、要するに、普通の場合なら大なる弊害もなからうが、極端な場合になると、共々に情死をさへ敢てするに至るものであるから、頗る注意を要することである。

三 子女に對する母親の愛情 凡そ母として其子に對する愛情ほど、私心なく、犠牲の念に富

み、純然たる利他的愛情の發露は、全く他に見受けられないものであり、隨て有らゆる愛情の中で、最も美はしく、又最も温かなもので、これこそ女性の本領であり、特徴であるのである。ハートレ
ーが、「吾人若し思ひを婦人の母性的本能に出づる情緒や行爲に及ぼさば、即ち眞の性的差別を見得ることである。……母性愛は婦人の特色中にて最も原始的であり、根本的、不變のものである。されば若し之を阻止せんとするものあらば、そは人類の進歩を妨害するものである。要するに、此世界は男女兩性によりて成立し、彼等は永久に區別せらるべきものである」と云つて居るのは、傾聴するに値する。然らば何故母として子に對する愛情は、斯くも熱烈、濃厚、純粹なものとなつたのであらうか、之は云ふ迄もなく本能であり、自然の賜物である。之は嘗に吾々人類のみならず、既に下等動物に於ても見られることで、其由來は遠く、其根底は實に深いもので、つまり自然は生物界に性の差別を設け、さうして女性に種の繁殖上特別な任務を與へたもので、それが人類に及んでは、益々發展して性的分業から、女性の一大天職となり、あらゆる愛情の根元、あらゆる犠牲的精神の源泉となつて居るのであるから、他にその理由などを考へる必要はないのである。併し又

この本能を助成し自然を輔佐した種々なる事情もあるので、それを擧げようと思ふが、フイックは、之に就て四つの事情を掲げて居る。(第一)子供は母の部分であり分派である。實にその肉、その血、その魂を分けたものである。其故子供を愛するは、即ち自己より派生せるものを愛するもので、つまり所、自愛と他愛と一致結合したものである。(第二)子供に依りて其父なる夫、特に其婚約當時の追想を深ふすからである。何れの部分が、夫なり自己に酷似せるやを見比べることは、母たるものに盡きざる興味を起すものであり、又若し母たるものにして、自己なり夫を愛するならば、兩人に酷似せる子供に對しては、二重の愛情を發することとなるものである。(第三)子供は母たるものゝ、結婚當時より死に至る迄、常に其喜悅なり、悲哀と分離すべからざる關係を有するからであり、(第四)子供の得たる社會上の位置なり、名譽は翻て母たるものに反響するからである。之等四原因の外に、私は母は子供に依屬する精神が強い。父は左迄その子にたよらうとは思はぬが、母は夫にたより、又その死後子にたよらうと言ふ考へが深いので、之が意識的又は無意識的に、母をして其の子に一層深く愛著せしむるものである。又最も大なる原因となるものは、母は父よ

りも、より多く子供に接すること、又直接に之を養育し、哺乳は元より、大小便の取扱ひに至る迄、全然其勞苦を取り、専心其成長を祈ること、一言にして云はゞ、生みの苦痛と育ての苦勞に存することと思ふのである。如何に女性は天性愛情に富むとするも、若し子を生み特に之を育つる経験のない場合に、子供に對する愛情の左迄起らぬことは屢々吾々の見受けることである。

四 女性間に於ける友愛の情

朋友間の愛情、即ち友愛の情も、亦一見女性に強いようである。例令ば友人が病氣に罹つた場合に、之を看護するとか、何か不幸に遭遇した時に、之を慰めるとか云ふような、同情的行爲は、男子以上で、吾々男子の眼から見たら、さほど迄にしくともよいと思はるゝ程、能く世話を焼くものである。併し之等はほんの一次的のことであるから、愛情が永續するとは限らない。元來朋友間に愛情の永續するのは、單に同性であるとか、同郷、同窓である位のことでは起るものではない、何か同一の目的なり、仕事なり、主義を有つてゐなければならぬ。然るに女性には、從來左様な場合が少なかつたのと、又一面嫉妬心にも富み、且つ感情の動搖も烈げしいので、どうも斷金の交はりと云ふような、強固で、さうして永續する愛情なり、進んでは「プラト

ーニツク、ラブ」と云ふような高尚な理想的の友情などは到底實現し難いものである。

五 女性愛情の特色 女性の有する種々なる愛情につき、大體説明を試みたので、更に概括的に、女性の愛情なり同情につき、その特色と思はるゝ點を擧げて見よう。

(第一) 女子愛情の特色は、其盲目的なるにあり、隨て姑息の愛に陥り易いものである。之れつまり女子に於ては、理性の發達充分ならず、理性の尊嚴を感ずることが少いからである。

(第二) 女子の愛情は、具體的であり、對個人的である。甲とか、乙とか言ふ人を愛することは深い、團體を愛するとか、人類を愛するとか云ふことになると、甚だ薄いものである。それ故博愛心など云ふものは、深く經驗され難いものであると言ふことは、一般の承認する所である。之れもつまり抽象的概念作用の發達しない爲である。又嘗に具體的對個人的であるのみならず、多少排他的の傾向もある。と言ふのは、汎く一般の人をば、一視同仁的に愛することが出來ないので、兎角一方に偏するものであるが、其の一方に偏する餘り、他方に對しては、嘗に冷淡と言ふに止らずして、之を嫌惡し排斥して止まないと云ふことすら敢てするものである。甲を愛する爲に乙を惡

み、乙を悪むことが甲を愛することの條件のようになり、又それが甲に對する愛情を増すと云ふようなことも屢々見受けられるので、「どうもそこに排他的の分子が含まつて居るように思はれるのである。」

(第三)女子の愛情、特に異性に對する戀愛の情は、從來一般に所動的で、能動的でないと言はれて居るが、之れは事實であらうか、エリスの説に據れば、女子の所動的と言ふのは、斯く見ゆると云ふばかりで、其實純然たる所動的のものでない。女子の羞恥心に富み、さうして内氣に見ゆるは、却て男子の心を引き付ける力を有つて居るものであつて、一見所動的のようではあるが、實は男子の心を動かし、之を刺戟する力のあるものである。マルローは、之を磁氣に譬へて居る。磁氣は外觀上無力、不活動のように見えるけれども、その實自分の方に鐵を引き付ける力を有つて居るのである。又ハートレーは、之を蛇に譬へて居る。蛇は身動きもしないで、獲物の來るのを待て居るが、一たび其近かづき來るや、直に之を呑み込むやうに、女子も表面無力のやうに見へて、其裏面に男を引き付ける大なる力を有つて居るものである。さすれば世人の女子に對する觀察は誤ては居

るが、併し兎に角外觀上なりとも、所動的の態度を採て居るものであることは、争はれない事實である。

(第四)一般に女子の愛情は變動し易いようである。勿論その何人かを愛するに當ては、萬事を忘れて愛着する程に、一心になり、熱烈にもなるが、些細のことで以て俄にその冷却を來たし、遂には見向きもしない、場合に依ては之を敵視すると言ふやうに、感情の變化する婦人も度々見受けられるが、特に老嬢の女教師で、「ヒステリー」的の人に多いようである。要するに、概して女子の感情は其浮沈甚だしく、平均して之を持続すると云ふようには出來ぬらしい。マリオンの擧げて居る、佛國の諺に、「女子の性質中には、不易コンスタントのものがない」とか、又は「風に翻る羽毛の如く、女は屢々變化す」と言ふのがあり、又獨逸の諺にも、「女の心と五月の空」と言ふのがあつたやうに覺へて居るが、何れにするもつまり、女性の愛情が變はり易くて、稍々輕佻浮薄なる性質を帶ぶることを暗示するものであると思ふ。然るにマリオンは、之が辯護を試みて、女子の心が變はり易いと云ふのは事實であるけれども、それはつまり嗜好グクであり、移り氣カプリスである、虚飾ウエイテであつて、何も愛情とか、

戀愛とか言はるゝものに就ては、私に嗜好とか、移り氣の變化し易いのみならず、夫婦間などの場合を除いては、愛情に於ても女子は變動し易いものであると信じて居る。併し一旦夫婦の契りを結ぶと云ふことになると、女子の夫に對する愛情は容易に變更しない、決して他心を起すものでない。この點では男子の方が明かに變動し易くて、所謂「男の心と秋の空」をして事實たらしめるものである。要するに、夫婦とか、親子とか云ふ特別な關係に於ける愛情は例外として、日常不斷に起ることで、確乎たる理性も伴はず、眞實なる判斷に基かない感情は、女子にありては常に動搖し、變化し易いものゝようである。

(第五)尙ほ他人より愛情を受くる場合に、女子の特色として二つのことが擧げられるようである。その一として、女子はその受くる愛情をば、自分一人で占有せんとする傾向を有つて居るように見へる。それであるから他人も亦自分と同じように愛せられんことを希望し、さうして之を樂しむと云ふような寛大なる態度は餘り見へないものである。之れ蓋しその嫉妬心に富むからであらう。又其二として、女子は他人に對し愛情の表出又は直接なる證明を要求するものである。誰

れしも他人より尊敬せられたり、又は愛撫せられることを好まぬものはないが、女子は單に其事實のみを以て満足しないで、態度なり、言辭を以て明かに之を表示せられざれば得心しないものである。甚だしきに至ては、他人に於て眞の愛情はなくても、虚偽でもよし愛情の表出さへあれば、換言すれば單に表面上、外觀上の世辭や、愛相で以て愛情のあるらしく、ちやほや持囃さるゝならば、それで満足するものである。「男と女及び情緒」と言ふ書物の著者なる、女流文學者のウキルコツクスは、次のようなことを云つて居る。曰く「人生に於て求めらるゝ凡ての愉快と安樂を婦人に與へよ、而かも婦人は愛情の表示を背景とせざれば、之をすら幸福と感ぜざるべし」と。又曰く「男子は、自分の嗜好品を用意したり、其意見に一致するように努めたり、又は其助言を求め來るような、隠れたる方法で、自分を愛する婦人を好むものであつて、さう云ふ風に取扱はれたら、決して婦人に愛情の存することを疑はないものである。然るに婦人は之に反して、どんなに男子が仕向けやうとも、如何に彼は自己を愛するかを言葉で以て告げ知らさなければ承知せぬものである」と。要するに女子は愛情が直接に證明せられることを希望するものである。

(第六)女子は元より同情に富んで居るけれども、同情としては最も初歩なる、生理的同情の多いものである。つまり女子は暗示され易く、模擬し易いものであるから、他人の感情表出を目撃しては、其理由其原因を明にする迄なくして、直に反射的に同じような表出をなすものである。又進んで心理的なり、知識的同情を抱くに至るも、親しい友人間などを除いては更に一步を進めて、積極的に他人を慰めたり、恵んだりする、慈善的行爲に出づる能はざるものである。私の観察する所をして誤りなからしめば、女子の意思は薄弱にして、勇氣に缺くる所ある故に、善と知りつゝ躊躇してなさないことの多いものである。其故多くの場合に於て、元より他人に對する同情心は盛んに起るとするも、特別な關係のない限り之をして積極的行爲たる迄に發展せしめ難いものである。さう云ふ譯であるから、女子の同情はどうも一時的の、淺薄なものたるに止り、充分に徹底したもののたらしめ難い缺點もある。

第十章 情 操

第一 知識的情操

一 知識的情操の説明 之は吾々が知識を求め、眞理を探らうとする知的活動に伴つて起るものである。一體吾々は自分の未だ知らないもの、又は理解の出来ない事柄に遭遇すると、どうしても其何物なるやを究め、又その理由を明かにしようとする、知識欲を生じ、爲に知的活動を惹起し、所謂心の推究的態度を採るようになるものであるが、此場合に生ずる一種の感情を知識的情操と稱へるのである。而して之を二種類に分けることが出来、その一は知的作用を興奮して、之を惹起さしめんとするもので、今一は單に知的作用に伴生するものである。

(第一)知的作用を惹起さしめようとする感情は、眞の意味に於ける情操ではなく、寧ろ情緒の部に屬すべきものであるけれども、併し又知的情操の端緒となり、基礎となるものであるから、之を

情操の一種として説くのである。所で通例此種の感情をば、驚愕の情、驚異の情及び好奇心の三種に區別して居る。(一)驚愕の情と云ふは、豫て吾々の知て居るものであつても、又は知つてゐないものであつても、知ると知らざるとに關係なく、何等豫期してゐない或る事物の不意に出現する所からして起るものである。斯様な場合には、豫め其方へ注意を差向けるような心の準備が出来てゐないので、爲に吾々の精神は動搖し攪亂せられ、自ら不安の状態に陥らざるを得ないようになるものである。之に依て吾々は明かに不快を感じ、暫く何物をも意識する能はざる、所謂「ビツクリ」したと云ふような状態に陥るものである。で其甚だしき場合には、眼や口を開き、眉は上り、心臓の鼓動や、呼吸作用は激げしくなるが、身體の運動は全然止まると云ふような、外的表出を惹起するものである。然るに吾々若し心を落付けて靜かに注意を向け、そは果して如何なるものであるかと穿鑿するようになると、漸次知覺は元より想像なり、思考なり種々なる知的作用が活動するようになり、遂には其何物なるやを認知し得るに至るものである。さうなると一時攪亂せられ、動搖して不安の状態にあつた所の精神は、自ら整頓せられて、靜穩なる状態に回復するようになり、

爲に「ヤレ〜」と休息を感じ、自ら快感を起すに至るものである。(二)又不意に現出すると、せざるとを問はず、若し奇異にして平素見慣れざる事物に遭遇するような場合には、所謂「ビツクリ」すると云ふのでなくして、之は不思議だ、如何にも妙だ、どうも合點がゆかぬ、さて怪しいものだと云ふような念ひを起すもので、左様な場合の感情を驚愕の情から區別して、驚異の情と稱へるのである。それでその非常な場合には、爲に何か危害の及ぶようなことはないかと恐怖の心を惹起し、さうして明かに不快を感じるものであるが、普通の場合では、所謂珍らしいものは見たいと云ふように、自ら注意の度を高め進んで其物を見究める様に知的活動を促がすものであり、爲に快感を感じるに至るものである。(三)そこで單に不思議に思ふとか、奇妙に感ずとか云ふのでなくして、進んで其何物なるやを攻究し、其真相を觀破しようと思ふことになると、吾々はそこに明かに知識欲を現はし、立派に推究的態度を執るようになったものであり、やがて科學的研究の因て起る土臺となるものであるから、特に之を好奇心と稱へるのである。斯様にして、程度の差こそあれ、驚愕も、驚異も、將又好奇心も共に知的作用を促進せしむる感情である。

(第二)知的活動其物に伴うて起る感情は、之を大別して動的と靜的の二種類とすることが出来る。(一)動的の知的情操と云ふは、科學的研究、即ち知識の獲得を以て目的とする知的活動に伴つて起るものである。そこで斯様な場合に、其研究を遂げ目的を果した時には、誰れでも愉快を覺えるが、之に反して失敗し徒勞に終らんとするような時には、不愉快を感ずるものである。それで若し成功が容易で勞力を費すこと少ければ、其爲に感ずる快情は純粹なもので、不快を交ゆることは少いけれども、若し容易に解決を告げず、はては疑惑に陥り、研究に多大の困難を覺ゆる場合には、愉快所が非常なる苦痛を感ずるものである。けれども若し一たび解答の曙光を認め、研究の手掛りを見出し、進んで其目的を達すると云ふような場合に立到らば、その爲に起る愉快の情なり、満足の念ひと云ふものは、實に非常なものである。斯くて段々に科學的研究の歩を進めるならば、種々なる方面に於て、統一的の知識を求め、凡ての現象を統括する所の確乎たる法則を發見せずんば止まないと云ふことになり、若し少しでも疑惑を挟むような點があつたり、聊にても矛盾したり衝突して居るような所を見出すならば、毫も安心することが出来なくなり、たゞ益々精勵して

初志を貫かんとするに至るものであるから、其得る所の快感も尋常ならざるものである。其故に若し不統一なる知識を以て満足したり、思想上の矛盾なり衝突を以て敢て意に介せないような人は、明かに科學的研究心を缺ぐ人であり、隨て高尚なる知的情操を味ふ資格のないものである。併し研究心が旺盛であり、進んで其極致に達する時には、研究其物が面白くなつて來て、敢て其結果を問はないようになり、全然實利的の目的を離れたものにもなるのである。さうなると、研究に志して何等かの結果を得ると云ふよりも、寧ろ之に到達する努力勉勵其物が大なる愉快を與へる源泉となるものである。レッスングの有名なる句に「既定の眞理を採るか、又は之を發見するの愉快を求むるか、選擇せなければならぬ場合に遭遇せば、自分は後者を選ぶべし」とあるは、這般の消息を述べたものである。(二)靜的の知的情操と云ふは、實際に活動して居る知的作用でなくして、其活動し得る知的作用又は既に蘊蓄せられたる知識に伴つて起るものである。即ち誰れでも他人に優りたる記憶又は推理力を有つて居るとか、或は何かの學科に精通して深遠なる知識を有する時は、それ丈自己の價値を感じ、以て自重自尊の念あらしめ、さうして何となく快情の禁する

能はざらしめるものであるが、若し知力も劣り、知識も淺薄で、何等他人に勝れたる所なき場合には、自ら不安の念に満ち、又恥辱の感も起り、不愉快極まるものである。尤も自己の價値を感じる餘り、妄りに高慢とか自負の念を起し、爲に他人に對し敢て尊大に構へ、傲慢なる態度を現はしたり、又之に反し自己の無價値を感じる餘り、卑屈卑怯の情を起し、爲に他人に對しても臆病で戰々兢兢たる態度を示めすような場合には、之を自我の情と稱へ、情緒の一種類と見做すものである。斯様な場合に、情操と情緒とを區別する境界を定めることは容易でないが、要するに、知力に勝れ知識に富む爲に、自ら安心あり確信あり、餘裕綽々として物に動ぜぬようであり、又其反對に常に不満不足不快を感じるような場合には、之を情操の部類に入れてよいと思ふ。

二 知識的情操に於ける女性の特色 知識的情操の各種につき、女性の特色を吟味して見よう。
(第一)驚愕の情に就て觀察するに、之は明かに女子の方が著しいようである。男子とて不意の出來事に接して驚かぬではないが、女子は一體に感動性に富んで居るし、又恐怖心なり羞恥心を起し易いものであるから、自然些細なことに對しても、驚愕心の禁する能はざるものあり、且つ烈げ

しい表出を呈するものである。或は驚愕の情其物に於ては、男女間に大なる差別なく、其異なる所は單に表出の多少のみに存するものであるかのように思はれる場合もないではないが、併し感情の表出は直に反動的に感情を刺戟し、一層之を強烈ならしめるものであるから、つまり女子の方が男子よりも、驚愕心は強いものであると斷言してよからうと思ふ。所が一般に女子が驚愕の情を起すような事物は、主として感覺的であり直觀的のことであつて、さ迄意味のあることではない。つまり不意に人が現はれたとか、雷鳴を耳にしたとか、毛蟲が頸筋を這つてゐたとか云ふような、至て簡単な場合のことであつて、豫期しなかつた彗星が出現したとか、患者の容體が急變したと云ふて、天文學者や醫者の驚愕するような場合とは、大に其性質を異にして居るのである。尤も斯様な科學的驚愕心とでも稱すべきものは、平素科學の研究に従事し、何等か専門の知識に通曉せる人に於て、初めて起り得べきことであるから、何も女子のみに起らぬと云ふのではない、男子とて無學の輩、無智の徒には當然起り得べくもない。併し一般に女子は教育程度低く且つ科學的研究に經驗の少いものであるから、自然這般の驚愕心を缺ぐことになつて居るのである。

(第二)驚異の情はどうであるかと云ふに、私は女子に於て其頗る乏しいことを認めるものである。「體女子は從來の境遇や教育の結果として、知的探究心と云ふか、又は知的本能とでも稱ふべきものが、充分に發達してゐないようであるから、概して彼等は新奇な事柄に接しても餘り驚きもせず、合點のゆかない道理に適はないことが起ても、餘り不思議にも思はないようである。凡て學問は驚異の心に基くとさへ云はれて居るが、女子には男子程科學者も哲學者も出てゐない所を以て見るも、元より先天的の特質と云ふべきではないが、境遇上自然に女子は驚異の念に乏しいものとなつて居ることが分かる。女子に於て、時に驚異の心を起すとしても、其範圍は狭く又進んで其解決を求め、其理由を探らんとする、所謂好奇心なり、研究心を起す迄には到らないものである。よしや又或る機會に於て、好奇心なり研究心を起すとしても、一般に彼女達は専心知的探究に従事する迫のないものであるから、其儘之を等閑に附し、遂に何等の結果をも見るに至らないで、徒に之を消失せしめることの多いものである。それであるから、折角驚異の情は起るとしても、彼等は之を培養して立派なる知的研究心と云ふ活動に迄發達せしめることの少ないものである。ロンプロ

1ゾ女史も女性は一般に懐疑心を缺いで居ると云ふて居るが、其理由として、女子の知識は直覺に依ること多く隨て彼等は自信に富み大膽であることを指摘して居るが、さう云ふことも事實であると思はれる。

(第三)然らば女子は全然好奇心を缺いで居るかと云ふに、さうではない。否場合によりては、仲強烈で男子以上に之を現はすともあるものである。それは知識篇でも述べて置た通り、女子は一般に精巧であり、その日常生活、特に人事上の出來事に對する注意と云ふものは、仲々男子の及ぶ所でなく、その興味を惹起することは著しいものである。其故その見聞する所に就て、根掘り葉掘り穿鑿して、その真相を極め且つ批評をすら加へんとするものである。近所の娘が結婚した時の服裝なり、化粧はどんなものであつたか、出入の車夫が夫婦喧嘩をした模様なり、其原因は如何、やれ隣家に新しく來た女中は何所のものだらう、その言葉遣ひはどうだのかうだのと、男子なら全然問題にならぬ、見向きもしないような事項に就て、非常なる好奇心を起し、之を穿鑿せねばやまぬと云ふような熱心を現はすものである。ロンプロ1ゾ女史は、女子の好奇心をば、その直覺心と

相並べて、その特色と認め、且つ好奇心の餘り彼等は多辯、おしやべりに陥る癖あることを説いて居る。マリオン教授も、女子は世間に吹聴せんが爲に、つまらない「ニュース」を知りたがったり、就中他人の隠さうとする些々たる秘密をば、恰も禁ぜられた果實の誘惑に於けるように、探知せんとする如き劣等なる好奇心をば最高度に有つて居ると云ふて居る。蓋し女子は概して家内に籠居して、めつたに外出もしないような境遇にあり、教育とて比較にならぬ程低いものであつたので、家事より外には關係しないし、周囲のつまらない出来事より外には見聞しないと云ふことになり、爲に其興味を惹く所、好奇心を誘發する範圍が、頗る小區域に限られるようになり、隨て好奇心を缺ぐのではない、之を高尙なる好奇心に迄發達せしめなかつたものである。ミーキンは、一般に女子は知識欲を缺くと云はれるのを嘆き、「何故エバは林檎の果實を摘み取りしか」と反問し、「凡そ婦人はその母たるエバから代々に互つて、求知心を遺傳してゐるではないか」と痛論して居るが、如何にも同感の至りである。然れども惜しい哉、その知識欲を充分に發達向上せしめなかつたことをと叫ばねばならぬ。其故私は、容貌なり衣服なり、諸般の風習、日常の出来事に對して興味を抱

くことに、異存を有たぬが、今少し女子の好奇心、研究心、知識欲をば、科學的方面に差向け、同じ家事に關することでも、例令ば臺所の「ガス」に就ても、その點火法なり、火力の強弱等に關し、又は食物の調理法、保存法等に關し、理化學的研究に注意するように教育したいものと思ふ。

(第四)更に知的活動其物に伴ふ高尙なる情操は如何にと云ふに、之は一層多く教育の程度、知識の深淺によることで、勿論男女に就て判然區別さるべきものではない。其故女子とても、専心數學なり、物理學化學なり、さては心理學哲學等の研究に従事する場合には、自ら此種の感情を惹起せざるを得ないし、又男子とても、若し無教育無知識の徒ならんには、如何で此の如き高尙なる情操を味ひ得べきやである。併し前述の通り、女性間では從來教育の程度も低く、又學者的生活を營んだものも甚だ少なかつたので、自然這般の情操を感じ得るものゝ、多くないのは已むを得ないことである。要するに、彼等は從來推理力の練磨とか、深遠なる思想養成の如き、知的陶冶を缺いてゐたので、研究を樂しむとか、思索に愉快を覺えると云ふようなことには、一般に無頓着である。隨て矛盾律や同一律を無視する傾向あり、爲に眞偽を區別するの念、統一的知識を求むるの心、眞理を

尊ぶの情は甚だ薄弱である。其故マリオンの指摘したように、女子は他人のつまらぬ秘密を探り出して、之を世間に吹聴することを楽しむような、何等の価値なき、云はゞ虚榮心は有つて居るかなれども、眞理を追求し、之を會得し、之を玩味するの愉快を知らないものであるから、知識的情操に於ては、動的方面も靜的方面も共に之を楽しむことの少ないものである。併し永久に然るべき筈のものではないから、吾々は徒に女子を酷評し罵倒するを以て能事了れりとなさず、一日も早く彼等に教育上の機會均等を與へ、彼等をして男子同様に思索し推究するの習慣を養成せしめ、以てその缺陷を矯正し健全なる發達を享受せしむるよう努力せねばならぬと思ふ。

三 女子と虚偽の言行 前述の如く、一般に女子は、思考の原理を無視し、眞理を尊重しない傾向のある所からして、往々前後矛盾したことを公言して憚らず、虚偽の言行即ち虚言とか、詐偽とか、瞞着を敢てして毫も異としないものである。之を以て女子に虚言や瞞着などの多いと云ふことは古今を通じて一般に承認せられて居ることで、マリオンも眞實の本能又は之を語る要求は、女子に於て甚だ微弱であると公言し、又極力女性の辯護を試みて居る、ミーキンすら、メーピウスが

「虚言は婦人の本能的武器であり、それなしに生活することは不可能であるから、それを婦人から取り上げようとするは馬鹿な話である」と云ふたのに對し、一言の辯駁もなく、直に獨逸の中流社會の婦人に關する限り、全然その通りであると、之を承認して居る。又佛蘭西の婦人に就ても、ミーキンは其友人が「私は未だ嘗て虚言を云はない佛蘭西の一婦人をも知らない、彼等は何か窮した場合とか、又は話相手を喜ばす爲に能く虚言をつく」と云ふた言葉をも掲げて、之を裏書して居る程であるから、シヨツペンハウエルや、ワイニンゲルが、頭から女子を虚言者と罵倒してゐるのも無理からぬことである。それにも拘らず、婦人の心理を綿密に解剖して居る、ロンブローゾ女史が、一言も此點に論及してゐないのは、私の實に怪訝に堪へない所であります。所で女子の虚言者であると云ふことは、今に始つたことでなく、マリオンの云ふ所に據ると、中世の頃から一般にさう云ふ風に見做され、遺言などの證人としては、一向信用されなかつたものであるが、それが今日尙ほ佛國の法律上に傳はり、女子は民法上證人としての資格なきものと見做されて居ることである。又クヌードゼンの云ふ所に據ると、之は單に中世以降のことではなく、古代に於ても同様で

あり、又單に佛國ばかりでなく、歐洲各國皆同様であつたとのことである。彼の云ふ所では、中世の法廷で男一人の證言に對して女二人の證言を必要とし、又古代に於ても、女の宣誓には深刻なる疑念を挾んだものであり、更に今日でも女子には偽誓多く、爲に法廷で往々誤りたる判決を下すこともあるが、之はつまり法官が過去に於ける事實を忘却したからであるとのことである。然らば何故女子には斯くも虚言多く又虚偽の行に富めるやと云ふに、之は元より教育の不充分なこと、隨て論理的頭腦の缺けて居ること、眞實に對する興味と云ふか、尊敬心の少いことに基くものであるけれども、又長い間の境遇なり事情に據ることも少くない。ロンブローゾとフェレローの調査に據ると之に就て七個の原因を擧げることが出来る。

(第一)女子の柔弱なること、一體狡猾とか詐偽とか云ふような行爲は柔弱なもの、厭制せられたものゝ執る手段で、決して強者、権力者のする所でない。強者なり権力ある者は何をすることも誰に憚る所もなく、公明正大なる所業に出で、狡猾とか詐偽とか云はれるような卑怯な眞似はしないものである。マリオンの引用して居る、コルネイユの言「偽計は小心者の業なり」と同じように、ルツ

ソーは「偽計は女子固有の天才であり、その力の微弱なることの補償である」と云ふて居る。又シヨツペンハウエルも、之に類することを云ふて居る。曰く「女性は力を當てにしないで、詭計を頼りとするものである。其故に狡猾は本能的の能力となり、虚言は治すべからざる傾向となつて居る。獅子は爪と齒を以て、象と野猪は牙を以て、牡牛は角を以て、烏賊は黒汁を以て備付けられて居るように、天然は女子に自分を防禦し保護する爲に虚偽の術計を附與し、男子には體力と理性とを以てした」。クヌードゼンも、次のようなことを云ふて居る。曰く「弱い男が強い男に對する場合のように、女は男に比べると、身體的にも精神的にも共に虚弱であるからして、之を補ふ爲に狡猾を以てして居る。抑も正直、公平、眞實、正義は通例強者の特權であり、男性の道德と呼ばれるものである。之に反し、狡猾、詐偽、不正直、不公平は、生存競争に於ける弱者の武器であり、婦人の特質である」と。

(第二)月經のあること、之は時と所の如何を問はず、多少の差こそあれ、等しく嫌忌の情を以て目せらるゝものであるから、婦人は皆之を隠匿しようとするものであるが、之は毎月起ること

あり、又少くとも四五日間は繼續するものであるから、虚偽隠蔽の手段を講ずるや頻繁ならざるを得ないものである。それで若し到底陰蔽し難い場合には何か病氣に罹つたように詐るものである。女子には絶えず斯様な習慣があるので、自然と虚偽を弄し、之を以て當然と心得、敢て意に介しないようになるものである。

(第三)羞恥心の強いこと、既に情緒の所で述べた通り、婦人はその特性として、内氣であり、臆病であり、何事にも恥かしがるものである。特に異性に對して戀愛の情を抱くような場合に、明らかに之を打明けることは勿論、之を外貌に表はすことすら敢てしないものである。そこで自然情を矯め、思を詐る習慣を生じ、虚偽の行爲を重ねることゝなるものである。又婦人は男子に比して、嫌忌すること多く、隨て禮儀正しく、細かに作法を守るものであるから、自ら虚偽の言行に出づることの多いものである。例令ば他人の前で便意を催ふすとせんか、そは如何に生理上必然のことなりとて、之を他人に告知したり、又は他人に氣付かれることすら無禮であると思ふ所からして、なるべく之を抑へ辛棒して隠蔽する風あり、而して萬止むを得ない場合には、何とか他事に託

けて之を果さうとするものである。其外多くの場合に於て、詐て事實を陰蔽する方却て作法に適つたことのように思ふ所からして、遂に虚偽の習慣を養成するに至るものである。

(第四)性的淘汰 女子は年頃になると、何れも都合よく結婚したいと云ふのが當然であり、その爲になるべく容貌を修飾し化粧三昧に日を送るようになるのが普通であるが、まして若しも生來色が黒いとか、髪が少いとか、何かの點で容貌が醜かつたり、多少なりとも缺點と思はれるような所があつたなら、其爲に縁が遠くなり、婚期が後れはすまいかと案じる所からして、殊更その點を隠蔽し、出来るだけ修飾して、少しでもより美しく見えるように努め、以て男子の甘心を得んとするものである。さなくば性的競争に脆くも敗惨の浮目を見、空しく家居せねばならぬ運命に陥るものである。かくて化粧や裝飾は女子の運命を決定する大切な鍵輪となるものであるから、自然虚偽の行ひを敢てして毫も怪しむ所なく、否女として當然のことゝ思ふようになるのである。

(第五)男の心を惹くこと、男をして殊更女子は力弱いものである、可憐なものであると思はしめ

るよう、なるべく温順に柔和に且つ優美にして、しとやかな風を装ひ、所謂嬌羞を以て男の心を惹き付け、其極手練手管を弄し、さうして男の愛情と保護を求めんとする所からして、自然虚偽の言行を敢てするに至るものである。ミーキンの引用して居る、佛國の文豪チュルジエオンの言に、「喜ばすことの技術は婦人の武器であり、それが統治の要件であり、それが権力の源泉である。男の心を惹付け、その注意を固定し、その念ひを引留めることは、女性の絶えざる仕事である」とあり、又ラ、ローシユフールに、「婦人はその嬌羞よりも、その激情に容易く打克ち得るものなり」とあるも、共に婦人は如何に男子に對し嬌羞を弄することの大なるものであるかを窺ふに足るところである。

(第六)被暗示性 女子は一般に暗示され易い性質のものであるから、他人の云ふことを直に眞實であると信じ易い傾向を有つて居るものである。又多くの場合、彼等自身にも確乎たる定見を有たないので、爲に眞も偽も混淆して區別する所なく、隨て虚偽の言を弄して何等意に留めないものである。

(第七)母の職分 婦人はその子供を育てる場合に、方便として巧に虚言を用ゆる必要がある。例せば子供の知つてならぬことや、知り難いことは、何とか便宜詐り置く必要がある。其故母たるもの、職務上自然に虚偽を弄することゝなつたものである。トーマスは動物界で、多くの雌は其子を保護する爲に瞞着手段を用ゐることを指摘し、雄の開放的で喧嘩好きなのに反し、雌は注意深く、狡猾で、詐偽的であることを説いて居るが、子供の養育上必要な手段たるに於て、人間と何等の差異なく已むを得ざるに出づるものと云ふべし。

以上七個の理由の中で、第一や第四の如きは、其主要なるものであらうと思ふが、尙ほ此外に、エリスは、慈悲の心、思ひやりの情を附加して居る。即ち女子は一般に他人に對して情け深い所からして、若し明らかさまに事實を有りの儘に話したなら、相手がさぞ驚くであらう、失望するかも知れぬと掛念の餘り事實を曲げ殊更虚言を用ゆるものである。私も斯様な實例を、女教員間にいくらかでも承知してゐるので、元より其人の性質にも依るが、多くの場合に於て、感情に訴へた婦人達の言行に對しては、餘り信用を置かぬことにして居る。それは兎に角之等の理由に基づき、婦人は虚偽

の言行に富むものとなつて居るが、之は女子として名譽のことではない、實に悲しむべきものであるから、吾々は極力之が矯正に努めねばならぬ。元より幼児教育上の必要から、又は社交上の作法として、又は他人に對する同情の餘り、多少の虚言を用ゆる如きは、さ迄咎むべきことではなく、否場合に依りては、萬已むなき當然の處置と思惟せらるゝものであらうけれども、何等正當なる理由なくして、妄りに虚言を弄する如き、特に自己の利益を圖るため、自己の過失辯護のため、又は他人を讒誣中傷せんがため、故意に虚偽の言行を敢てし、而かも恬然として介意する所なきが如きは、實に不徳極るものであり、それが心事の陋劣なる何人と雖も唾棄せずんば止まざるべし。されば吾等は子女の教育上特に此點に留意し、此の如き弊風を根絶せしめねばならぬ。佛國で有名なフェヌロンも、女子の虚言瞞着を以て、その大なる缺陷の一と認め、之が矯正に就て次のようなことを云ふて居るが、吾々の参考とすべきことである。曰く「實例を以て小女達に、詐偽を用ゆることなき、正當なる成功の途あることを教へよ。又最も大なる智慧は、多言せぬこと、虚言を用ひぬこと、策略を弄しないことにありと、彼等に告げよ」と。

第二 審美的情操

一 審美的情操の説明 之は天然の景色にしても、又は人工的なる繪畫、彫刻なり、或は詩歌、音樂にしても、所謂美なるものに就て感ずる一種の快情を指して云ふのであるが、どうして左様な特殊の感情を惹起するようになったかと云ふに、それは全く生活の餘裕に起因するものである。一體野蠻時代では生存競争に忙はしく、衣食住の生活問題に追はれて居るので、美を樂しむなど云ふ追のないものであるが、文化の進むにつれ、自然に生活に餘裕を生じ、日々の業務にも閑が出来、資産も幾分か貯蓄せられ、隨て左迄生活のために苦しめられないようになるので、今迄生存競争とか、自己保存の爲にのみ働いてゐた、精神活動に幾分か餘裕を生ずることになり、その爲に實際の生活問題と直接關係のない美的感情を惹起するようになったものである。其故吾々のもつて居る審美心は、つまり精神上の遊戯であると云はれてゐる次第である。それで今美的情操の特性を擧げて見るなら、(一)此種的情操では、事物の眞偽を究めたり、又はその實用如何を問ふものでなく、

單に美の爲に美を感じるに止り、他に何等目的とする所なく、而して其美を感じるや、全く其美に打たれて了つて、嗚呼美はしいと、其方に心を奪はれ、我を忘れるような状態に陥るものであるから、之を知識的情操の推究的態度に對して、恍惚的態度にあるものと云はれるのである。(二)さう云ふ譯であるからして、審美的情操にありては、之に依りて何か利益する所あらんとか、又は其樂しみを獨占して、自分一個の利益を圖るものでなく、否衆人と其樂しみを共にし、其愉快を同じうせんとするものであるから、大に社交的のものとなつて居る。(三)又吾々の美を感じるは、知識的情操の場合のように、大に努力し、奮發して勵まねばならぬと云ふ必要はなく、單に其事物に接し、美の顯現にさへ觸れなば、全く反動的に惹起し得るものであるから、之は多くの快感中にて特に純粹なるもの、即ち不愉快なる感情の伴はないものである。尤も種々なる美術品に對する美的趣味と云ふか、美的鑑賞と云ふものは、自然の儘では發達するものでない、どうしても其意味なり、各部ぬの關係を會得する特殊の知識を養成せねばならぬ。而して其ためには美術品に就て、分析なり比較なり、種々なる知的作用を働かさねばならぬし、又豊富なる想像作用を以て、之に向はねばならぬし、更に又美の原理に通じたる批評眼を以て、之に接せねばならぬから、本當に美術を味ふとするには、どうしても特に美の鑑賞力や判斷力を養つて置かねばならぬ。所が之は教育なり修養を待て出来ることで、自然の儘に放任し安閑として出来ることではない、其間元より努力勉勵を要するや云ふを俟たぬけれども、一たび這般の鑑賞力や批判力を養ひ得たらんには、美術を味ふ楽しみも一層の深きを加へることである。

更に吾々は如何なる事物に就て、美を感じるのか、換言すれば、美の要素となるものは何であるかと尋ねるに、吾々は、(一)實質的、(二)形式的、(三)觀念的の三要素を擧げることが出来る。而して其實質的要素と云ふは、美の實質となるもので、即ち眼と耳に依る感覺である。吾々は天然の景色を眺むるも、又は美術品なり音楽に對するも、若し之に依りて生ずる色彩や形状や音響などの感覺を意識しないならば、毫も美を感じることに出来ないものであるから、之等の感覺を美の一要素と認めるのである。併し更に必要なものは、美の形式的要素である。之は美の要素をなす感覺相互の關係や配合の如何を云ふので、建築や彫刻に於ける均齊又は音楽詩歌に於ける律動

などは、其主要なるものである。然るに之等の要素よりも一層有力なものは、即ち觀念的要素である。之は凡て美的創作に依て現はさるゝ暗示や、其爲に惹起さるゝ種々なる觀念の聯合や、又は想像の活動に依りて吾々の心中に想ひ出す思想であるが、吾々は之等の觀念に依りて、實質的や形式的の要素以上に奥妙なる美感を覺ゆるものである。

斯くて吾々は、吾々自身の容貌なり身體に就て美を求め、又は種々なる實用品に就て裝飾を試み、進んでは純然たる美術品の製作に従事し、或は詩歌音樂の創作實演に依りて美を現はし、且つ之を楽しむようになるものであるが、同じく美と稱するも、其中普通に云ふ優美又は快美の外、更に崇高美や滑稽美を區別するものである。崇高美と云ふは、物質的にもせよ、精神的にもせよ、偉大なる力の顯現に對して、何だか壓迫せられるような不快の感と共に、之に向つて昂上せんとし、嚴肅なる態度を以て仰ぎ見ると云ふような、一種の快感を伴ふものである。又滑稽美と云ふは、事物の矛盾又は不相應なことに對して起る、所謂可笑の情と共に、時として幾分か輕蔑の情をすら混じたものである。

二 女性の審美心 之に就て何等かの特色を見出し得るや否やと云ふに、之も性の問題でなく、主として教育や知識の程度如何に關することであるから、特筆する程のことはないが、二三の心付いた點を擧げよう。

(第一)女性の審美心は幼稚である 女子の心中には、恐らく男子よりも餘計に、美の觀念を以て満たされて居るであらう。彼等の多くは美を以て、權勢よりも富貴よりも、否凡てのものよりも、尊ぶべきもの望ましいものと思つて居るらしい。併し其有する美の觀念たるや、單に自己の容貌や衣服や裝飾品の範圍に止り、而かも如何にして其美を誇らんか、如何にして他人より稱讃せられんかと、之を實利實益の方面よりのみ見て苦心するものであるから、其有する審美心は實に幼稚であると共に野卑極るものである。マリオンも云ふて居る「婦人は疑ひもなく美的感情を有つて居り、さうして恐らく男子よりも一般に餘計に有ち、少くとも、彼等の心中には、それが多くの位地を占めて居るように見える。……兎に角彼等は自分を美しくせんがため一日の幾部分を費して居る」と。蓋し婦人の實際を指摘したものであるが、之には男子も責任がある。世間の男子は女性に

對し、一般に何等かの専門的知識を要求することの殆ど絶無なるは、多くの場合寧ろ當然であるとしても、常識に富んだ賢明なる婦人と云ふよりも、美しい裝飾品として之を重んじ、家政に巧みと云ふよりも、容貌の佳いのを好むと云ふ風であり、而して一方に女性は父權時代となつて以來、全く男子の依屬物、寄生物となつてゐるので、自然に男子の思ふままに動き、隨て概して容貌の修飾を是れ努むと云ふようになり、美形は女性の代名詞となり、彼の嚴格敬虔なる獨逸の哲人カントすら女性を美性と呼んだ程であるから、容貌美、形態美即ち女性の本領となつたのも無理からぬ次第である。それは兎も角婦人の美しいのは元より喜ばしいことであり、衣服なり態度の優美なのは、如何にも女性にふさはしいことであるけれども、其審美心が些々たる容貌や衣服以上に及ばぬと云ふは實に嘆はしいことである。

(第二)女性の審美心は低級である。彼等も時として、更に進歩した美的趣味を抱かないでもないが、それは至て淺はかな程度のもので、到底男子に及ぶべくもない。彼等とて山河の風色に接しては其美を賞し、繪畫なり彫刻なり特に音樂に對して、往々普通の男子以上に深い趣味を有つて居

るようであるけれども、悲しい哉、彼等は概して男子よりも教育の程度は低く、隨て又多方面に互つた知識の素養を缺いで居るので、其美感と云ふものが、實質的や形式的のものに止り、未だ觀念的の所に達してゐない。其故其美感たるや甚だ淺薄であり低級なものである。併し之は女子として無理からぬことで、その爲に女子に審美心の素質なしなど、斷言することは出来ない。なぜと云ふに、女子には從來藝術上の充分なる教育はないし、且つ一家の主婦にでもなつたら、朝から晩迄、事に逐はれ、隨てゆる／＼美感を味ふ餘裕がないからである。男子とても、若し日々生活のためには躍躍として奔走し、靜に美を楽しむ暇のない場合には、寔に殺風景なもので、到底美的趣味など養ひ得られるものではないから、況んや家内のみ蟄居して居る女子に於てをやだ。兎に角一般に女子には審美心が充分に發達してゐないから、多少の美感を有つとするも、至て幼稚であり低級であり、又往々實利の念を伴ふものであるから、純然たる高尚なる美的情操を味ふことの出来ないものである。

(第三)女子の審美心は崇高美を缺ぐ。女子の抱く美感は、主として優美又は快美と稱する部類

のもので、特に通俗の言葉を以て云ふなら、奇麗とか、愛らしいとか、優さしいと云ふような、規模の小さくて靜的な美を好むようである。さらばとて淡泊で而かも意味深いと云ふようなものを好まないで、艶美とか、嬌艶とか云ふべき、俗語でこつてりしたものを喜び、隨て所謂禪味などは、彼等の解し難い所である。それは兎も角として、彼等は進んで崇高美と云ふようなものは餘り感じないようである。蓋し彼等は崇高とか壯大とかを感じるには餘りに纖弱である、彼等は之を感じる前に既に恐怖の念に打たれ、若しくは悲哀の情に驅られて、之を楽しむ所か、寧ろ避け逃れんとするものである。尤も劇に就て女性の嗜好を見るに、多くは喜劇を好み、同時に或る程度の悲劇を喜ぶようである。之はその感情的で涙もろいからであるが、悲壯とか壯烈なものに至ては、目を蔽ふて見るに忍びないようである。然らば滑稽美に就ては、どうであるかと云ふに、婦人特に妙齡の女子にありては、箸の倒れたにも、豆のころんだにも、直に可笑味を感じ能く笑ふものであり、茶番喜劇には腹を抱へて笑ひくづれるものであるから、男子よりも一層多く之を経験するようであるけれども、多くの場合殆ど生理的發作で、一種の反射運動なるかのように思はれることもあり、隨

て靜に落付て、種々複雑なる人生の出來事に於て隠れたる所の矛盾を認め、さうして私かに高尚なる意味の滑稽を感じることは少いようである。

三 原始的文化に於ける女性の貢獻 前述の如く女性の美的感情は幼稚であり低級であり、又其範圍も狭く、到底之を男子に比すべくもないが、併し女性とて元來審美心を缺いで居る譯ではない、否原始時代に於ては却て男子を凌駕するものがあつたのである。抑も原始時代に於ける工藝は、殆ど凡て女性の手に占領せられてゐたものである。蓋し當時にありて、男子の職分は全然戦争と狩獵とに存し、爲に工藝などに従事する道になかつたものであるから、工藝品の製作は自然に女子の手に歸した次第である。試にメーソンの著はした、「原始的文化に於ける婦人の職分」と題する書物を披いて見ると、女子は工藝の開祖であり、美術の創造者となつてゐることが分かる。今彼の説いて居る所に據ると、多くの工藝品中でも、特に陶器の製造は、世界の何れの部分に於ても、最初女子の手になつたものであり、さうして種々と裝飾的の紋様を描き、以て美術の起原を開いたものである。で其其最も顯著なる技術は、(一)果物や動物などの自然形を模造すること。(二)織

物に於ける美術的意匠を陶器に刻み付けるか、又は繪具を以て描くかである。又織物に於て見らるゝ裝飾の全體も亦、女子の頭腦から考へ出されたことも確かであり、さうして美術品と認めらる織物に就ては、大體三様の仕事を包含して居る。(一)纖維性の材料を準備し、且つ染色を施し、その色合を選択すること。(二)絲、紐、撚絲、打紐等を造り、以て織物に用ゐられる幾多の材料を用意すること。(三)草蓑、造藍、造筵、網細工、「レース」を造り又機織、裁縫竝に縫箔に關する技術等である。斯くて原始社會の婦人も種々なる衣裳を以て身を飾り、白き粘土を水に溶かして之を顔に塗り、椰子の外殻に水を盛りて天然の鏡となし、以て之を化粧の用具に供し、或は花圈を造りて頭髮を飾り、其香りを以て身邊を満たすと云ふような工風も試みたものである。其外今日の野蠻人間にも行はれて居る種々奇態なる裝飾法もあるが、黠の風習はその著しいものである、之れ亦女子に依りて實行さるゝもので、ノゴア人やアイヌ人の婦人間に、今尙ほその風習の墨守されて居ることは、誰れしも熟知して居ることである。又女性は曾て樂器を造つたことはないさうであるけれども、早くから樂器を弄し唱歌に長じて居たもので、今日の野蠻人間にも屢々見受けらるゝこ

とである。其故女性も元來審美心に富み、工藝美術に於て夙に貢獻する所のあつたものであることは疑ふべからざる事實であるけれども、彼等は引續き専心斯道に従事することの出來なかつた爲に、遂に男子に壓倒せられ、建築なり彫刻は勿論のこと、繪畫音樂の如きものに於ても、獨り男子をして其名をなさしむるに至つたのである。それでショツペンハウエルをして、女性は非美術的のものであると迄絶叫せしむるに至り、エリスも亦之を肯定して居るようであるが、併し女子とて適當なる境遇と教育をさへ與へたならば、必ずや其審美心、美術的才能を發達せしめ得るや明かなることゝ私は確信するものである。然るに、ハートレーは、女子の美術心につき、次のように云ふて居る。「抑も動物界では、雌が雄を選択したので、その美的鑑賞力と云ふものは、今日吾々人類に於ても、婦人に潜在的素質となつて残つて居るから、之を發展せしめたなら、婦人も立派な美術家になり得るものである。元來美術家に要する性質は、迅速なる感受性や、鋭敏なる記憶にあるが、之等は云ふ迄もなく、婦人の有する特質であり、又所謂天才は辨別力、直覺力、感動性、激發性、適應性、變異性等を、その特質として居るが、之等のものは悉く皆婦人生來の素質であり、特に婦人は母と

しての職分、即ち出産と云ふ特殊の経験を有するが、之は婦人に大なる創作力を與へるものであるから、婦人こそ立派な美術家たり、天才たり得る素質をもつて居るものである。併し同時に婦人は精神の集注や、思想の統制や、自己制止等の力を欠き、且つ専心仕事に一生を獻げ難いことの爲に、天稟の特質潜在的才能を發揮する能はざるものである。所がその爲には長い間の訓練、修養と自由なる生活とを必要とするので、若し之等のものを與へたなら、婦人も亦立派な美術家となり、天才と仰がれ、毫も男子に劣る所なかるべし」と。女性の素質がハ氏の云ふ通り、美術家たるに最も適し、又天才のそれと一致するとは容易に首肯し難いけれども、訓練や修養や自由を女子に與へたなら、彼等もその美術心に於て一段の進歩を見るや明かなことである。尤もフェレローは、婦人が美術に於て餘り貢獻する所なく、又純粹なる審美心を缺く理由として、その性慾の比較的薄弱なることを擧げて居る。蓋し女性の性慾に關する部分は比較的に廣大であるから、其發現も餘り猛烈でないが、男子は之に反して、其性慾の本能旺盛なる爲に、其勢力は四方に溢れて活動の源泉となり、隨て文學なり美術に卓越した地位を占むることになつたものと思はれるのである。又エリス

は、男子は女子よりも一層變異性に富んでゐるから、多くの天才的美術家を出したのであると云ふて居る。之を要するに、シヨツペンハウエルや、ハートレーの説く所は各一方の極端に走つたもので、私は女子に於て幾分劣る所あるを免れまい位に思ふが、併し同時に不充分なる教育や不適當なる境遇の爲に、其發達を妨害せられたことも亦事實であるから、吾々は教育と境遇の革新によりて、女子固有の審美心を充分に發達せしめ、以て一層女性の優美性を顯著ならしめ、而して彼等をして眞に美の權化たり、眞髓たらしめ、斯くて人類社會を美化するの本分を完うせしめたいものと思ふ。

第三 倫理的情操

一 倫理的情操の説明 之は吾々の行爲に關する、善惡正邪の判斷から起るものである。然らば如何にして、善惡正邪の心、即ち道德心なるものは起つたのであるかと云ふに、之は全く人類生活の状態と云ふか、境遇と云ふか、其特別なる事情から起つたものである。蓋し人類の生活、詳は

しく云はゞ、其社會的生活を営むに當てや、互に勝手氣儘なことを敢行し得るものではなく、或る行爲はなすべく、又或る行爲は避くべきものであるから、自ら其中に一定の規律を生じ、臆げながら互に守るべき義務を認むることとなるので、茲に道徳心の端緒は存在するのである。然るに其規律たるや、最初は全く本能的、自發的、無意識的、無思慮的であつて、單に自然と風俗の裡に現はれ、習慣として存在するに止るものであるが、後に至ると、それが意識的、思慮的で、且つ複雑なものとなり、さうして或は制度なり、成文律なり、又は宗教的法典として現はれ、進んでは哲學者の抽象的な思索の問題ともなるに至るものである。そこで吾々の道徳心と云ふものは、自然に二要素から成立し、一は本能的で、主として感情であるが、一は思慮的で、知的判斷に基くものである。而して其本能的要素に富める人は、饑餓の食を求めしむる如く必然的、自發的に義務の實行に努むるものであるが、思慮的要素に富める人は、知的判斷を待て實行するので、修養なり努力を、必要とするものである。斯くて吾々個人の道徳心發達の順序を見るも、最初は本能的道徳であるが、後には一定の規律、法則又は外部の命令、權威に依て餘儀せらるゝ他律的道徳となり、最後には自己の判

斷に基き、理性の指示する所に依て行動する所の自律的道徳となるようになるものである。

更に倫理的情操の特性を考ふるに、(一)其因て起る所は、知識的情操や審美的情操の場合と異り、専ら吾々自身又は他人の意識的、有意的なる行爲にあるので、若し一たび自他の行爲に就て善惡の批判を下すようになると、必ずや善をなし惡を避けねばならぬように、實行に影響し之を左右するようになるものであるから、之を心の實踐的態度にあるものと云ふのである。(二)斯様に實踐的のものであるが、其善惡を區別した場合に、善と認めた所はなさねばならず、惡と知た所はしてはならぬと云ふように、何だか權威ある支配者の命令であるかのように感ぜられ、要求であるかのように思はれる所からして、特に規整的の感情であると云はれる。(三)更に其特色と認められる點は、其著しく社會的なることである。元より吾々の知識を求めたり、美感を味ふ場合にも、既に吾々は社會の一員たり、互に共同的生活を営んで居るものであることを示めして居るけれども、之等の場合では、未だ眞に吾々個人は社會と離るべからざる關係を有つて居るものであると云ふ、所謂社會的意識の存在を認めないけれども、倫理的情操になると、之が明瞭に現はれて居る。蓋し

吾々の行爲に關する善惡の觀念は何れも他人に對して起たものであり、且つ其善惡の判斷なるものは、元來他人が吾々の行爲に對する贊否の批評に基て起たものであるから、道徳心なるものは、社會を離れては到底發生し得ざるもので、隨て倫理的情操は特に社會的のものであると稱へられて居る次第である。

尙ほ倫理的情操は如何なる種類に分けることが出来るかと云ふに、普通に行爲の實行せらるゝ前後に依りて之を區別して居る。即ち(一)行爲の實行前にありては、今爲さんとする行爲に就て其善惡を判斷し、さうして若し善なれば之をなさねばならず、惡なれば之を止めねばならぬと云ふ、所謂義務心として現はるゝものである。そこで人によりて此義務心に強弱の差を生じ、或は死を以て義務を遂行せんとするものあり、或は何かの慾情に制せられたり、又は精神の動搖して確立しない爲に、無責任の態度を執り、爲に義務の實行を意としないものもある。(二)又行爲の實行後に至りて、若し義務心の指示する通りに實行した場合には、自ら心中に善いことをしたと云ふ賞讃の念を生じ、隨て満足を覚え、一種の快感を催ふすものである。然るに之に反して若し義務心の命

令に背いた行爲を敢てした場合には、自ら心中に譴責を受け、爲に不安の念を生じ、遂には悪いことをした、すまぬことをしたと云ふ後悔の情を惹起し、さうして非常なる不快の感を抱くようになるものであり、之等は普通に良心の稱讃及び譴責と稱するものである。

二 女性の倫理的情操 其特色を二三擧げて見よう。

(第一)女性の義務心は、概して薄弱であるように、思はれる。詳言すれば、女子の自ら省みて眞に其義務と信するものは、僅に節操を完ふする位のことにと止りはすまいか。又よし他に何か義務と感ずる所ありとするも、死を以て之を争ふと云ふか、守ると云ふか、さなくとも、少くとも自分の面目を全うすると云ふ意氣込で、その義務と思ふ所を尊重し、是非とも之を遂行せんとするの熱心があるか、どうかと云ふに、それは甚だ缺乏して居るようである。又義務と云ふ程のことではなくとも、女子は祕密の守れないものである。如何に口止めされてゐても、うか／＼と喋つてしまふ。マリオンも指摘して居るように、祕密を守ることが、女子には背負ひ切れぬ重荷であると思える。然らば、何故女子の義務心は斯くも薄弱であるかと云ふに、(一)一體義務心は、自分自ら何かの義

務を有するもの起ることであるが、之れ迄の婦人は多く従屬的の生活に慣れ、隨て何事も他人なり夫又は子に委任し、自分自ら進んで責任の地位に立つことをしなかつたから、自然多くの場合、義務を感じることに薄弱であり、隨て無責任になつて了うのである。尤も近來多くの婦人達も進んで公職に従事し、男子同様に責任の地位に立たれるようになっては居るが、多年の習慣で、責任は男子に譲り、自分は餘り義務を感じないような傾向も見えるのである。元より出しやばるの面白くない、男子に對し謙遜の態度を取り、萬事据え目にするのは、婦徳の一つであるか知れぬが、何等義務を感じない、無責任なのは不都合なことである。(二)女性はかねて智力に乏しい所からして、善惡の判断に暗く、是非の判別を明かにすることの出来ないものであり、而かも又之を以て餘り恥辱とも苦痛とも思はないものであるから、隨て義務を感じることも少く且つ弱くなるのである。(三)又女性は一體感情的のものであるから、事物に對する好惡愛憎の情を以て、善惡正邪の念と混同し、正しいからするのではなく、好きだから實行し、悪いからでなく嫌やだから實行しないと云ふ風であり、隨て確乎たる道理に基き、信念に動かされて去就を決すると云ふような義務心は

起らないものである。(四)又その感情的なる所からして、その心は常に動搖して一定しない。その思想はいつもぐらぐらして確定する所がない。只だ感情の動くまゝに行動し、隨て屢々行爲に矛盾もあり統一を缺いて居るけれども、平氣なもので少しも意に介する所もないので、自然義務心を感じることも少く、責任を思ふことも弱いものである。(五)さう云ふ譯であるから、心に緊りがなく、落付がない。それで思つたことを前後の辨へもなく能く喋りたがるものであり、女性の饒舌はその特色にも數へられる次第で、爲に人の祕密などは保てないのである。(六)斯くは云ふものゝ、女子の道徳心、特に同情や慈悲の心に至ては、實に美はしいものであり、自分の利害を省みず、その生命をも犠けて意としない愛他的の行爲に於ては、到底男子の及びも付かぬことで、只だ只だ立派な婦徳の發露と嘆賞の外なき次第である。併しながら翻て又考ふるに、之等の美しい性情、立派な行爲の多くは、所謂本能的、衝動的の發現であり、隨て自己の判断により、自己の信念、主義に基き、自己の努力奮闘に依て實行せられるものでないから、どうも義務心など云ふ意識は伴つてゐないようである。元より修養の結果斯様な境域に到達したのであるなら、それは實に敬歎

するに値するが、さうではないようである。それは兎も角として、よしや意識的、思慮的に起るものがあるとしても、多くの場合婦人の道徳は、外部の権力や命令に依て、壓制的に餘儀なくされて起つて居るので、未だ他律的の道徳たるを免れないものである。換言すれば自己の理性より割り出し、自分で自分を律し、外部の状態如何に拘らず、自ら進んで自己の行爲を左右せんとする、所謂自律的の道徳と云ふ所迄進んでゐないから、女性の義務心は、さ迄強固でないのも亦怪しむに足らぬことである。

(第二)行爲の決行後に於ける、良心の稱讃及び譴責に就て男女間に何等かの差異があるであらうかと云ふに、私は之に就て明確なる判断を下し得ないことを遺憾とするものであるが、大體男子は良心の稱讃を感ずること強く、女子は之に反して、譴責を感ずることの大なるものではないかと思ふて居る。若し此觀察にして誤りなしとせば、何故斯様な差別を呈するに至つたかを説明せねばならぬ。一體女子の道徳は前にも述べた通り、一面には本能的、衝動的の性質を帯び、奮闘努力の結果として起るものでなく、又一面には他律的で、他の束縛壓制に依て生じたものであるから、

その實行する所如何に尊重すべきものであつても、自分自身には左迄快感なり満足を感じない、隨て良心の稱讃を感ずることも少いのである。之に反して男子の道徳は、多くは克己の結果であり、努力の伴ふものであるから、之を實行した後には、大に満足を感じる次第である。又女子は概して臆病で恐怖心に富んで居るから、何か道に背いたことでも實行すると、其後に大に不安の思ひをなし、良心の苛責を感ずることも甚だしいのである。然るに男子は之に反して、大膽で犯罪などを左迄に苦にしないような所もあるので、爲に後悔することが、良心の苛責に堪へられないなど云ふことは、比較的に少いかのように思はれる次第である。

(第三)尙ほ道徳的情操より生ずる道徳心と云ふか、徳その物に就て、男女間に性的特色はないかと云ふに、茲にも著しい差異を見受けることになつて居る。(一)仁愛の徳に就て見るに、之は明かに女子に於て一層多く發達して居るようである。元より愛他心は、女子に於て本能的であり、獻身はその天性でもあらうが、段々に發達して婦徳の主要なるものとなつて居る。(二)眞實を尊ぶ心は、男子の方が大に優れて居る。前にも述べた通り、女子には虚偽多く、虚言を弄すること常習性

のようになつて居るので、眞實を尊ぶ心は非常に缺けて居るようである。(三)勇氣は云ふ迄もなく、男性的の徳であつて、女子には著しく缺損して居る。ミーキン女史は、モーピウスが勇氣は婦人にとりて、其子供を保護する場合を除き、不向な不要なものであると、云つたのに對し、従軍して野戦病院に働く看護婦に勇氣は不要か、婦人なりとて相當の勇氣ありと、反駁を試みて居るが、私は決してメ博士のように極端な偏見は抱いて居らぬ、ミ女史の云ふ所に共鳴するものである。けれども多くの場合、女子は勇氣を缺きその到底男子に及ばないのは、明かな事實である。併しながら女子は從來抑壓的生活に慣れた結果として、忍耐心には強く、隨て困難辛苦に耐へる消極的の勇氣には大に富んで居るようである。隨つて従順とか服従とか云ふものは、女子の方遙かに強く、世間も亦之を婦徳の一つに數へて居る。ミルが道徳心は、女子に於て優ると論じて居るのは、つまり此點から云つたものである。ミル思へらく、束縛とか壓制とか云ふものは、元より女子の品性を傷けたると夥しと雖も、此の如き暴力を敢行せし男子をして、不道徳に陥らしめたるの甚だしきものあるに比べたら、女子は寧ろ嘉みすべきものがある。蓋し暴力を弄するより、暴力を加へらるゝも

のに於て、道徳は健全なるものがあるからである。(四)次に貞操心は女子に於て、比較にならぬ程發達して居るのは、顯著なる事實である。尤も母權時代には必ずしもさうではない、寧ろ反對であつたらうし、又場合によりては一妻多夫の風習も存在したのであるが、父權時代となり、女子は全然男子に服従し、その財産と見做さるゝようになつてから、男子は女子の貞操を要求することとなり、男の權力で以て之を強制したので、遂に貞操は最も大切なる婦徳と思はるゝようになつたものである。それは兎も角、貞操は特に婦人間に發達したものであるから、世の妻たるものは、その尊い特色に依りて夫を感化し、之を以て夫婦相互の義務たらしむるは元より、一般の青年男子に純潔の固持せらるゝよう、性的道徳の矯正に努めなければならぬことである。(五)然るに、正義の觀念は、女子に於て著しく貧弱である。シヨツベンハウエルは、女子が正義觀念を缺けるは、その性格に於ける根本的瑕瑾であると迄極論して居るが、如何に公平に觀察するも、正義觀念は女子に於て充分に發達してゐないようである。一體正義觀念の因て起るには、何事に限らず、その正邪、是非を決定する主義と云ふか、原理原則を必要とするもので、例令ば他人から物を借りた場合に、

之を期日迄に返却すべしと云ふのが、その行爲に對する原理原則となるべきものである。其故若し之に違反した者があつたら、それは不正の行爲なりとして、之を譴責するのは當然であり、即ち正義である。然るに一般に婦人は這般の原理原則を理解するの能力を缺き、又よし理解するとも、愛情に富み憫み深い所からして、他人の罪過に對し、直に同情を寄せ氣の毒に思ふので、之を不問に附し何等譴責する所なきような傾きのものであるから、自然にその發達を阻害されたもので、又已むを得ない次第である。それで一體道徳心は男女何れに、より多く發達して居るか云ふに、從來一般に女子は男子に優る所ありとしたものであるが、果して然るにや。是れ或は男子が女子に對し服従や貞操を要求する爲に、心にもないお世辭を吐き、婦人達をおだてたものであるかのよう、ミッキン女史は論じて居るが、皮肉のようにも聞える。併し之と同時に道徳心の優秀なるは、知力の優秀に伴ふものであるが、女子の知力は男子に劣つて居るから、道徳心も亦男子に及ばないと云ふて居るのは公平な議論かと思ふ。

三 道徳律の發達に於ける男女兩性の關係 道徳心は前にも述べた通り、吾々の社會的生活を

營むに當り、其妨害となるような所業を抑へ之を規整する所からして起るものであるか、原始的社會に於て斯様な所業と云へば、主として腕力なり暴力に依りてなさるゝことで、之を離れては何も道徳と稱すべきものはなかつたのである。例令ば汝殺す勿れ、盜む勿れ、姦淫する勿れなど云ふ古い誠律は、凡て他人の幸福を傷け社會の安寧を害する所の暴力を抑制したものであるが、斯様な道徳律の起るに當り、比較的に一層動的なる男性と、一層靜的なる女性とは自ら異りたる關係を有つてゐたと云ふことは容易く想像せられ得ることである。

元來營養と生殖とは原始的人類の生存に關する二大要件であるが、其中でも營養即ち食物の收得と云ふことは、人類の生存競争に於て最も重要な事件であつた。爲に道徳も最初は生殖に關することよりも、食物に關することが大部分を占めて居たようである。それは兎に角男性は之等二様の活動に於て女性よりも一層旺盛であつた爲に、原始的の道徳に對しては、男性の活動が一層深き關係を有つてゐたものである。そこで充分なる供給を得、さうして自己及び其一種族の保存なり安全を確實にしようが爲には、勢ひ領土の擴張を圖らねばならぬこととなり、隨て他種族と戰爭

しなければならぬので、當時戦争に勇敢であると云ふことは最も名譽なことであり最も稱讃を博したことであり、爲に獨り男性をして其名を成さしめたものである。依て幼い男兒を教育するにも、斯様な動的道德の養成に努め、戦争なり狩獵は大いに奨励せられたものである。現に南亞弗利加のツールー人の間では、若し母親が之を折檻するようなことでもあれば、若い者は彼等の母親を打殺しても差支ないと云ふ法規もあると云ふ程である。それで多くの野蠻人間で男兒が一人前の若者と見做されたり、又は結婚を承認されるような場合には、幾許かの動物を狩したとか、戦利品を有つて居るとか、又は人頭を貯へて居ると云ふようなことが、その資格を認定する條件となつて居る。之を要するに原始時代に於て稱讃せられる行爲は、亂暴な併し其種族に取て有利なる行動であつた。隨て戦争の名譽程他に名譽となるものはなく、又戦争の光榮程他に光榮とすべきものはなかつたのであり、軍事上の才能程他に尊重せられたものはなかつたのである。其故男子は此の如き名譽なり稱讃の代表者であり、隨て當時の道德は主として男子に關係したものであつた。

所で斯く稱讃せられる行爲と云ふものは、如何にして表彰せられたかと云ふに、或は賞牌を受けるとか、或は昇進するとか云ふような一般的の性質を帯びたものであるが、之に反して他人の妨害となり、其感情を損ふが如き行爲は禁止せられ、若し其禁を犯す場合に之に對する罰則は種々と規程せられてゐたものである。即ち原始的生活に於ても、不徳の行爲を禁制する爲には比較的細かに規定する所のあつたものである。例令ば亞弗利加のカファイヤ人種の間では、盜賊には賠償と罰金、家畜の傷害者には死又は罰金、放火は罰金、偽證は重き罰金、他人を傷けたものには罰金、姦淫、強姦は罰金又は死、毒殺、謀反、脱走には死及び沒收、虐殺には死又は罰金を課するように規定してあるとのことである。つまり男子の勇敢にして攻撃的なる行爲は、若し種族の利益の爲になさるる時は、如何にも尊重せらるべきものとなるが、之に反して種族の幸福に反する所業となる場合には、特に有害なるものとなるので酷しく之を禁制して置く必要があるのである。さう云ふ譯であるからして、民法とか刑法とか契約と云ふものは、凡て男子の活動に關係して起つたものであり、要するに男子は英雄ともなり犯罪者ともなつた次第である。

更に生殖の方面に就て考察するに、之は主として女子の任務であるから、此方面の道徳は女性の特質に基いて發達すべき筈のものであるように思はれるが、事實は之に反し、やはり男子の特質に基いて起り、其立場から規定せられて居る。一體母權時代でこそ女子は權力を有ち、自己の身體に就て自由を有つてゐたけれども、一たび父權時代に移り凡て男子の支配を受けることになるに至りては、女子の身體は男子の所有物となり、財産として取扱はるゝようになつたので、全く自由の權利を失ひ男子の意の儘に服従するようになつて了つた。そこで女子は幼時より否時として生前より約婚して、早くから男子の意志に服従し其自由を束縛せらるゝ風習も屢々野蠻人間に見受けらるゝことであり、其離婚後と雖も依然として其自由を束縛する所もあり、或は亞弗利加や印度にある風習で誰でも熟知して居るように、夫の死後妻たるものは之れに殉死せなければならぬようになつて居ることもある位である。斯くして女子特有の貞操の徳は發達したものであるが、つまり男子の意志換言すれば其暴力に依て出來たものである。併し女子は自ら之を受納し忠實なる服従者となつた。蓋し男子の立場から出來た道徳ではあるが、之を守れば自然に種族の幸福を來たし隨

て番に男子のみならず、又女子の爲にも利益となつたからである。尤も女子の存在したことが男子の行爲にも影響し、さうして其の道徳に多少の變更を來たしたこともないではないが、女子の特性として女子自身に獨立した道徳律を作るには至らなかつたものである。

之を要するに、道徳の發達上にも亦男女の性的差異は明かに現はれて居ることを認めることが出来る。即ち男子にありては、著しく契約の性質を有し各自の行動をば社會的幸福の爲に適合せしめるようになつて居るが、女子にありては契約と云ふよりも寧ろ束縛で、自己の身體を男子の意志に適合せしめるようになつてゐるものである。

第四 宗教的情操

一 宗教的情操の説明 之は通例神佛と稱ふる人間以上の存在者、萬物を主宰し宇宙を統御して居る所の不可思議なる勢力の觀念に基て起る情であり、其起原に就ては宗教學上種々の意見も出て居るが、先づ人間以上の勢力又は實在に對する恐怖心や依頼の念に據て起つたものであると

云てよろしい。然るに人智の進歩につれて、人々の崇拜する神佛の觀念なり、又之に對する感情も漸次變遷し以て所謂宗教の進化を來たして居るから、等しく宗教的感情と云ふも文化の度に依て大なる差異の存することを忘れてはならぬ。今茲に雜とそが變遷の次第を述べるなら、大略之れを三期に別れることが出来る。即ち第一期に於ける宗教は、所謂拜物教とか生靈教とか言はれるもので、そが崇拜の對象となるものは、耳目に依りて知覺せらるゝ天然物其物か、若しくは之れを生物視したるものに止り、さうして之れに對する感情は、主として恐怖心や依頼の念である。而して第二期の宗教となると、普通に多神教と言はれるものである。それは第一期に於ける種々雜多なる神々に就て幾分か概括をなし、數限りなき神の中から山の神、水の神、火の神など、云ふような特別な神、又は或る村落とか部落とか又は種族に固有なる特別な神となし、さうして之を崇拜するようになって居るものである。斯くて之に對する感情も、單に恐怖するとか依頼するとか云ふのでなくして、之を畏敬し之に信賴すると云ふようになり、單に自分ばかりのことを祈願する利己的のものでなくして、同時に他人の安寧幸福を祈り、共同生活の利益を求むるようになり、大に社會的

のものとなり、爲に宗教心も著しく倫理的のものとなつて居る。又第三期に於ける宗教は所謂一神教とか又は汎神教と云はれるもので、第二期に於ける多神教や、民族教の神々を更に概括して一層統一的のものとなし、世界共通の神否宇宙の大實在者として之を崇拜するようになるものである。而して茲に至ると、單に恐怖心や依頼心に依れる迷信から造つた神でなく、深遠なる哲學思想や、高尚なる倫理的要求に基いたものとなり、隨て著しく合理的のものとなつて居る。斯くて之に對する感情も一層高尚なものとなり、畏敬とか信賴の念は勿論其外に親愛の情も加はり、欽仰の念なり憧憬の情も生じ、所謂向上的信念と云ふか又は敬虔の情となるものである。依て宗教的情操は心の敬虔的態度のものと云つてよろしい。

二 宗教心の性的比較 さて宗教心に就て、男女間に何等かの性的差異を見受けらるゝやと云ふに、之を實際に徴するも亦宗教學者の研究に據て見るも、容易に其差異を認めることが出来る。

(第一) 宗教心は女性に旺盛である。今之を原始時代の野蠻人に就て見るも、死人を取扱つたり葬式に關することや、又神靈に祈願するようなことは、主として女子の司る所であつた。彼の「ウ

イツチ」と稱するものも多くは女子であつた。古いことは分からぬが、十五世紀から十七世紀に互る約三百年間に歐羅巴で、基督教徒から異端として迫害せられ、さうして死刑に處せられた所の「ウイツチ」の数は實に莫大なものである。ゲージの「婦人、教會及び國家」と題する書物中に記して居る所を見ると、驚く勿れ九百萬人に達して居るが、其大部分は女子であつたと云ふことであるのを見ても、如何に多くの女子が迷信に捕はれて居たかと云ふことが分かる。メーソンも、婦人を以て原始社會に於ける宗教の恩人となし、之に就て次のように云つて居る。曰く「男女何れが、より多く神靈に浴し靈氣を感じてゐたかどうか、それを今日計算するの途はないが、婦人は常に確乎たる信念を有し、より多く忠實に儀式を守つてゐたと云ふことは明かなことである」と。然らば女子が宗教心に富んで居ると云ふことは、單に野蠻人間、原始社會にのみ限ることであるかと云ふに、仲々さうでない。現在の歐米文明國に於ても、亦同じような事實の存することを認めることが出来る。マツカービーの著はした、「婦人と宗教」と云ふ書物を読んで見るに、其中に數字を以て之を證明して居る。即ち今から二十五六年前の統計ではあるが、英國で倫敦の人口四百五十萬人中、

教會に出席するものは約一百万人で、其中男は約三十七萬二千人で、女は約六十萬七千人となつて居るから、殆ど倍數に垂んとして居る。又佛國の巴里では、千八百九十年の統計に據ると、二百萬の人口中復活祭に出席せしもの約十萬人あつたが、其中で女は男の約四倍あつた。又米國では千八百九十年の調査に依ると、米國諸教會の會員中女は全體の三分の二から四分の三に及んで居る。尙ほホール先生は、其著「青年期」中に、「政治の男子に於ける如く、宗教は女子の生活に於て常に顯著なる位地を占むべし」と云つて居られるが、要するに婦人の宗教心に厚いことは、時處の如何を問はず、等しく見受けらるゝことである。

然らば何故に女子は宗教心に富んで居るかと云ふに、(一)女子の感情的なることは其大なる原因となつて居るように思はれる。なぜかと云ふに、宗教上の「トグマ」こそ知力の産物であるけれども、實際の信念中には感情の分子多く、特に幼稚なる宗教は恐怖心に基くと云ふ程であるから、感情的なる女子に於て宗教心の旺盛なるは當然なることである。(二)又女子は想像心に富む故に、吾々の實際に見たり觸れたりすることの出来ない、神佛の實在をば容易に信仰し得るのである。

(三)女子は概して思考力・推理力に缺けて居るから、研究心や懷疑心は男子程に強くない、加ふるに被暗示性に富んで居るものであるから、一寸した動機からして直に信仰心を惹起し、理窟などは措て問はず深く推究する所なくして、容易に神佛を信仰するようになり、さうして一向疑惑の念も起らないものである。(四)女子には獨立心少く、依頼心の強いものであるから、夫なり子なり進んでは神佛に頼らんと念盛んなものである。宗教は依頼心に依て起つたと云はれる程であるから、女子には特に必要なものとなつて居るのである。(五)又女子は一體に保守的であり、隨て何事にも變化とか變更とか改革などを加ふることを好まない所からして、自然男子では大分信仰が薄らぎ、若くは變つてゐるにも拘らず、女子は依然として舊信仰を保持し容易に之を放棄しないものである。(六)又從來家庭で宗教は家事の一として、主婦の司る所となつてゐたから、習慣上自然に女子がより多く宗教心に厚いものとなつて居るのである。(七)更に最も大なる原因と思はるゝもので、而かも餘り世人の未だ注意しないことは、性慾に關することである。一體宗教心の盛んに起る時期、所謂發心の時期と云ふものは、男女を通じて普通に十二三歳から二十歳前後であるが、此

時期と云ふものは、即ち少年期から青年期に道入る時で、所謂春機發動期である。そこで宗教心の發生と春機發動と云ふことは、偶然時を同ふして起るのか、將又何か、關係のあるのであるかと云ふに、ホール先生が其著「青年期」の中で、發心の心理と云ふ章の所で詳はしく説明して居られるように、宗教心と性慾又は戀愛の情とは多くの點に於て共通の性質を有つて居るので、爲に互に相關聯し雙方の間に平行なり共變の存することは明白なる事實である。そこで若し肉慾を抑制し、合理的生活を送らうとすると、爲に宗教心の發生を助長することとなり、又宗教心の發生によりて、肉情も清められ、荒淫を免るゝことゝなるのである。それで眞正なる敬虔の念は超越的の愛情であり、聖者などゝ云はるゝものは聖化せられたる清き完き愛情を有するものであると迄、ホール先生は説いて居られる。又戀愛に失敗し失戀の悲境に遭遇した場合に、心機一轉して宗教に歸依せるものも少くないし、又全然性慾を絶ち肉情を禁止して尼僧的の生活を實行する場合に、熱心の餘り宗教狂に陥るものも往々見受けられる次第であつて、要するに肉慾を禁止し劣情を抑制せんとする努力は、やがて宗教的感情を發生せしめる原因となるのである。所で今女子の性慾はよし男

子程に強烈でないとするも、而かも青年期は元より場合によりては生涯其節操を固守し、隨て其肉情を抑制することの多いのは男子の比でない。加ふるにエリスも指摘して居るように、局部構造上の差異からして、女性の性慾は一層擴散せられ、一局部にのみ限定されてゐないから、容易に他の情緒を誘發し易いものとなつて居るので、自ら女子の宗教心は男子に比して熱烈であり旺盛である次第である。之に就てハートレーは自分の経験を有りの儘に述べて居るから、それを茲に擧げよう。「私は娘時代に仲々宗教に熱心であつた。それは一部分自分の受けた訓練や、示された實例にも依ることであるが、それ以上に私は自分の強き女性的感動性に依つたものと思つて居る。私の宗教心は非常に熱烈で、罪より救はれんが爲に神を求め之を慕ふの切なる、恰も戀に狂せる女子が其愛人を求むるが如くであつた。當時自分は丁度青年期に入らんとする時であつたが、始終古への聖者の如くに、神と昇天する基督を見んことを熱望し絶えず祈願したものである。此祈願は長い間效驗を見なかつたが、私は少しも失望せず、まだ自分はそれ程の價値なきものであると心得、一層罪を悔い行を清ふして更に祈願を續けたが、遂に或る夏の夕に窓より美しい空を眺めて居

た時に、確かに神を見ることが出来、長い間の祈禱が成就したので、非常にうれしくそれから云ふものは實に幸福なる念に満たされた。今から考へて見ると「ヒステリカル」であつたらうと思はれるが、見神の實驗を得て以來、新しい宗派を開かうと思ふ位であつた。併し日々の俗務の爲に妨げられて、之を實行するには至らなかつた、豫て健康體であつたので、それ以上何も病的と云ふには至らなかつた。そこで今日から之を考へて見ると、當時の宗教心と云ふものは、自分の性慾と密接なる關係のあつたことを認めざるを得ない。尤も自分の性慾は普通人より大分遅く發達し、又會て情人を有つたこともなかつたけれども、年頃にもなつたことであり自然に性慾も起りつゝあつたので、其爲に宗教心が刺戟されたものであつたことを否定する譯にはゆかぬ。それで私に於ては宗教的衝動と性慾的衝動とは同一であつたように思はれる次第であるが、要するに性慾的本能を抑制すると、それが宗教心に轉化するので、爲に一般に婦人は在らゆる宗教の主要なる保護者となるものであることは疑ふべからざる事實である」。

(第二)更に宗教心を惹起す勢力、換言すれば人をして發心せしむるに至る動機に就て、男女間に

何等かの差別はないかと云ふに、此種の問題に就て詳細なる研究の結果を公にした、スタールパツクの著「宗教の心理学」に據て見ると、次のような表に概括することが出来る。

發心の動機	百分比例	
	女	男
死又は地獄に就ての恐怖心	一四	一四
自己の幸福名譽等に關する希望	五	七
利他人	(六)	四
義務心又は克己心	一五	二〇
罪惡の悔改	一五	一八
教訓	(一一)	八
實例の模倣	(一四)	二
社會的壓迫又は強請	(二〇)	一七

之に據りて見ると、女子は利他心に富んで居ること、又男子よりも一層他人に依屬し、他人の意

志によりて支配さるゝことの多いことを認めることが出来る。又義務心や悔改心に乏しいことを確むることが出来る。尤も發心者の年齢なり、知識の程度なり、境遇の如何に依りて各其動機を異にするに違ひないけれども、右の表に據りて大體男女間の差別を見ることが出来るし、こゝにも亦男女の特性は明かに現はれて居ることを知るに足ると思ふ。

(第三)尙ほ發心後の信仰生活特に其理想とする所に就て、男女間に如何なる差別があるかと云ふに、之もス氏の調査した所に據ると、次のような表を示めることが出来る。

理想	百分比例	
	女	男
他人を救助すること	(六五)	五二
神と調和すること	二〇	一九
神を愛し奉仕すること	(一八)	九
基督	一四	一八

自己を完全にすること	三三二	(四二)
自己を發表すること	一〇	一一
眞理を攻究すること	(六)	(一六)
自利	(三)	一四
自己滅却又は犠牲	(二〇)	一三
種々なる克己的徳徳	三四	三〇

此表に據るも、女子の理想は愛人愛神にあり、自己を犠牲にしても他人の爲社會の爲に盡さんとする、利他的愛他的のものが多數を占めて居るが、同時に眞理を研究するが如き純知的のものは甚だ少いことを認めることが出来る。之に反して男子の理想は自己を中心とするもの、又は知識的のものが著しく多いことを示めて居る。之れ亦男女の特性を明かに表示して居るものと言つべきである。

(第四)更に宗教の成立に就て男女間に差別はないかと尋ぬるに、一般に宗教は男子に依りて建設せられ、女子に依りて維持せらるようである。即ち宗教の開祖と云ふような人は多く男子で、女子は男子に依りて開かれた宗教に信頼し之を保護するに止るようである。エリスの調査した所に依れば、六百の教派中僅に七教派のみ女子に依りて開かれ、其餘は悉く皆男子の建設したものである。で其七教派と云ふも、何れも近世に於て起つたもので、其教理も多少の差こそあれ皆基督教に類似したものであるから、全然新宗教を開いたとは云へないものらしい。我國でも婦人が新に一宗派を開いたと云ふのは、近くは天理教位なことであるが、之とて最初は頗る原始的のもので、之を公然一宗派に發達せしめたのは男子の力である。要するに茲にも男子は創作的で、女子は守成的であり、男子は組織的であり、知識的であるが、女子は之に反して實行的であり、感情的であることを認めることが出来、著しく其が特性の異なることを知るに足るものである。

(第五)同じく宗教を信仰するにしても、男子の宗教は概して世界的のものであり、女子の宗教は地方的のものであり、又其崇拜する神佛に就て云ふも、男子の信仰する所のもものは、餘程抽象的、概

括的のものであるが、女子の信仰する所のものは、大分具體的であり多種であるようである。又男子の信仰は合理的で、女子のは感情的で迷信に富んで居るようである。尤も之は教育の程度や知識の有無に依て起る差別で、何時迄も男女を區別することにはならないかも知れぬが、兎に角現在の所では實際の事實であり、又両性の特質を示めすものである。

三 女性宗教心の價値 以上四種の情操に就て、私は大略男女を比較し、さうして女性の特徴とする所を述べたのであるが、要するに、情操は概して男子に於て、より多く發達し、女子はまだ及ばぬ所が少くないようである。其故女性が一般に感情的であると云はれるのは、つまり情緒に就てのことで、情操に關係したことはない。之は女性の味方となり、如何に女子を辯護しようとしても、争ふべからざる事實であるから致方ない。然るに情操中で、比較的より多く女性に於て發達して居る宗教的感情も亦、近來漸次冷却しつゝあり、爲に其特質を失ひつゝあるようにも見えるが、どんなものだらうか。所が宗教心の減少し、信仰の冷淡になりつゝあるは世間一般の事實である。元より例外も少くないが、一般に知識階級のもので、寺院や教會に出入するものは段々に少く

なり、その信條や儀式を守る熱心は衰へ、牧師や僧侶の説教には餘り信頼しないようになりつゝあるように見える。之は蓋し教育の普及、科學的知識の増進、一般社會の進歩、齷齪たる生活難等に基づくことで、婦人達も亦この趨勢に押され、潮流に陥り、爲に其本質を傷け、特徴を失ひつゝあるのかとも思はれるのである。然らば宗教は遂に絶滅し、信念は全く消失するものであらうかと云ふに、元より宗教の信條や形式は變化もしようが、苟も人間が理想を追求し、實在を仰望する限り、物質生活に慊らずして心靈的生命を希求し、有爲轉變の世界から、永遠不滅の境地を憧憬する限り、吾々の宗教心は決して絶滅するものでなく、信念は消失するものでない、否何時迄も進化發達して、人間の向上發展に伴ひ、人格の完成、社會の進展には缺くべからざるものである。されば世の婦人たるものは、益々崇高なる宗教的情操、敬虔なる宗教的信念を涵養し、以て動もすれば、餘りに理知に傾かんとし、或は物慾に捕はれんとする男子を教化善導し、又動もすれば、罪惡の荍と化し、醜行見るに忍びざる社會の弊風を淨化矯正するの一大天職あることを忘れてはならぬと思ふ。
「一人出家すれば九族天に生る」とか云ふ諺もあるが、私は時に男子が墮落しても、又社會が往々に

して腐敗することあるも、婦人さへ宗教に目醒め、信念に富めるものあらば、如何なる墮落も如何なる腐敗も能く之を教化淨掃するの力あることを確信するので、婦人方に期待するの甚大なることを告白せざるを得ないものであります。

第二篇 意志 篇

第十一章 意志の概説

一 意志の發達 元來知識は客觀的と稱へられ、感情は主觀的と云はれて居るが、何れも外來の刺激に依て起るものであるから、等しく所動的の作用であると云はれるのである。之に反して意志の活動は、吾々自身より出て來るものであるから、能動的の作用と云はれて居る。即ち吾々に於て自ら進んで何か爲さう、自ら努力し奮發して活動しようとする作用であるから、意志は即ち活動の意識であると云ふても差支がないのである。併し活動の意識も精神發達の程度如何に依りて、或は至て簡単な場合もあり、或は大に複雑なものともなつて居るので、意志の作用を説くに當りては、それが發達の順序を明かにする必要があるのである。

吾々の營む活動の最も簡單なものは、所謂無意的運動として現はれる所の自發運動、反射運動、

本能運動である。之等の運動は何等外物に關する知識なくして起るものであるが、知覺作用に依りて外物を認識し、且つその吾々に對する利害の關係を知ることになると、吾々は自らその利あり快樂の源となるようなものを欲求し、その害あり苦痛の基となるようなものを嫌忌することになるものである。さうなると無意的運動の場合と異り、何の爲に活動するかと云ふ目的の觀念が明瞭に意識されて居るし、又經驗上如何にせば其目的物を獲得することが出来るかと云ふ、方法なり手段も確實に了解せられるようになるので、之に依て有意的に特更活動を惹起することになるが、吾々は斯の如き目的と方法とを意識してなす所の有意的活動をば、特に動作と名付け以て無意的活動と區別する次第である。其故に動作と云へば、何か追求する所の目的物がなければならぬ。そこで何かを追求し之れを獲得せんとする願望をば、普通に欲求又は欲望と稱へるので、動作は何等かの欲望に基いて起るものであると云つてよいのである。

今この欲望を分析して見るに、三つの要素から成立て居ることが分かる。(第一)欲望には知的要素がある、即ち吾々は欲望すと云へば、必ず何か其目的となるものを意識して居らねばならぬ。

目的物なしに欲望することは出来ない。特に其目的物に就て何等かの知識がなければならぬ、吾々に對して如何なる關係の存するものなるやを知らないでは、之を欲望する譯にゆかぬ。(第二)欲望には情的要素がある、即ち吾々の經驗したもの、認識した所のもの悉く皆欲望の目的物となるのではなく、其中單に如何様にか吾々の感情を誘發し、さうして快樂なり苦痛なり或は満足なり不満足の念ひあらしむるようなものに就てのみ、吾々は或は之を欲求し或は之れを嫌忌せんとする、所謂欲望を惹起するに至るのである。斯く吾々の欲望は苦樂とか利害の感想を離れては起り得ないものであるから、之を情的要素と稱へる次第である。(第三)尙ほ欲望には意的要素がある、即ち吾々は何かを欲求すと云へば、必ず其物の方に心を差向け其物に注意を集注して、之を取りたい之を獲たいと切望せしめるものである。斯様な場合に於て、吾々は其事物に就て缺乏を感ずれば感ずる程、之を獲取せんと欲求を強からしむるものである。斯の如き欲求的狀態は吾々を驅りて、有意的活動を惹起さしむるものである。

然るに吾々の動作は最初は至て簡單なる活動に止るものであるが、知識や感情の發達につれて

段々に複雑なるものになり、且つ思慮を伴ふようになると之を行爲と名付け、さうして簡單なる動作から區別する。然らば如何にして簡單なる動作が複雑なる行爲に發達するかと云ふに、一體吾々は何時迄も單一なる事物のみを欲求するのではなく、段々と知識の増し經驗の加はるにつれて、種々なる事物をば同じく目的物として欲求するようになり、又昔に目前の事物のみならず、遙に離れたる遠方の事物をも欲求し、又單に物質的のもののみならず、精神的のものをも欲求するようになり、又現に存在せる事物に止らずして、將來發見し得る事物をも欲望の目的物となし得ることになり、隨て其目的物を獲取し追求する方法手段も到底一樣なる譯にはゆかなくなるものである。それで若し單一なる欲望を満足せしめようとするのであれば、格別骨も折れず至て容易なことであるけれども、若し種々と性質や種類の異りたる欲望を満足せしめようとするになれば、從來自然に經驗した所の方法ばかりでは不充分であるから、更に色々と工風を凝らし思慮を廻らして、既に經驗したる多くの動作中より彼是取捨する所あり、さうして恰度都合よき適切なる方法を案出せなければならぬ必要が起つて來るので、つまり欲望の目的物と云ふ點から見ると、又之

を獲得する方法と云ふ點から見ると、共に動作をして一層複雑なるものたるに至らしむる次第である。尙ほ吾々は何時迄も單純なる快不快の情又は利害の念にのみ驅られて行動するものでなく、やがて感情の發達して高尚なる倫理的情操の現はれることになることと云ふと、更に善惡正邪などと云ふ觀念に基いて吾々の欲望を判別し、さうして善はなし惡は避けねばならぬと云ふようになり、且つ之を實行する手段に就ても、なるべく道徳に適つたものを選ぶことになるので、爲に吾々の動作は一層複雑なものにならざるを得ない譯のものである。要するに行爲は通例複雑なる動作と云はれるけれども、單に複雑と云ふことが其特色でなくして、之に伴ふ思慮即ち分別工風と云ふことが其特色となつて居るものである。

二 行爲に思慮の伴ふ事情 尙ほ行爲に就ては、如何にして思慮の伴ふようになるものであるかを少しく説明しようと思ふが、先づ(第一)に、その最も簡單なる場合に就て云ふと、吾々は其種種なる欲望を満足させようとするに當り、其果して満足せられ得るものであるか、どうかと云ふ點に就て疑惑を惹起すものである。一體吾々の幼稚なる時に在りては、何事も自力にてなし得られ

るように信じて居るので、如何なる場合にも其成功を疑はず、随てその爲さんとする行動に於ても毫も躊躇する所なく無鐵砲なやり方をするものであるが、段々と成長するにつれて種々なる事物に接し色々な場合を経験するようになるので、漸次世の中には我が意の如くにならないもの、到底自己の力量では如何ともする能はざるものが、少くないと云ふことを認めることになるものである。さうなると或る欲望の起つた時に、若し之は確かに自分の力で満足せしめらるゝものであり、成遂げらるゝものであるとの確信を起すことが出来ないならば、又は最初苦もなく出来ると思つたことも、實際に着手して見ると存外困難であつて、容易に思ふようにゆかないと感ぜらるゝことも往々起り来るので、左様な場合に吾々は、それは遂に満足せしめ得るものであるかどうか、成功し得ることであるかどうかと尋ね、随て自己の力量に就て疑惑を生ずるようになり、爲に暫く動作を中止せざるべからざるに至るものである。斯様な場合に一體に活動力の弱い人か又は欲望の左迄強くない場合には、欲望は全く消滅して遂に何等の動作ともならないで了るかも知れぬけれども、元來身體も健康であり氣力も盛んな人で、而かも制すべからざる程の欲望を有つて居る場合には、

どんなにかして之を満足せしめよう、苟も一たび志したことは何所迄もやり遂げようと、一層奮發努力して種々と其方法手段に就て思慮を運らすようになるものである。で若し適當なる方法が見出されたならば、初て動作となつて現はれ、爲に欲望は満足せしめらるゝに至るものであるが、要するに實行に就ての疑惑は思慮の一條件となるものである。(第二)又或る欲望の動機として起つた場合に、之を満足せしめ得ることに就ては何等の疑惑を抱かざるも、之を満足せしめるに就て何等か苦痛の伴ふ所からして、欲望は満足させたいけれども苦痛は避けたいと云ふので、直に之を動作として實行に現はさないで暫く躊躇し、さうして何とか都合よき方法はないものかと考へ、爲に思慮を運らすようになるものである。然るにその苦痛を感じるに就ても、二つの場合が區別せられる。(一)苦痛が動作それ自身にあり、手段其物に存する場合と(二)動作の結果に存する場合とである。例令ば虎子を獲るは大に希望する所であるけれども、虎穴に入るの危険を犯さなければならず、名譽ある賞與を得ようと思へば、大に勉勵努力する所がなければならぬように、その欲求する所は如何にも望ましいものであるけれども、之を獲得するに要する方法は容易なものでない、

仲々困難の伴ふものであるから、いざといふ場合には誰でも一思案せざるを得ざることゝなるものである。それで非常に無氣力なる人か又は怠惰なる人にありては到底其苦痛に耐へられないので、爲にその結果の如何に拘らず全く之を放擲して顧みないようになることもあるが、併し普通の人であれば誰でも暫く動作を中止して靜に思慮を運らし、さうしてなるべく苦痛を少くし容易に出来るような便利な方法を考へ、以て目的を貫かんとするものである。さればとて到底苦痛なり困難の避くべからざるものであれば、動作に伴ふ苦痛なり困難をば、其結果として生じ來る快樂なり成效と比較し、さうして若し果して勞苦に酬ゆるに足る效果の得られるものであることを確かめた場合には、一時の勞苦は忍耐しても初志を貫き最後の美果を收めんと努力するものである。又吾々は何でも吾々の嗜好品に對しては大に其欲望を満足させようとするものであるけれども、後に至て或は腸胃を害する恐ある故に、その手段の至て平易なるに拘らず、躊躇して實行を敢てしないと云ふようなこともあるものである。さう云ふ場合に、吾々は目前の快樂と將來の苦痛とを比較して、或は將來の苦痛を慮る所からして、目前の快樂を棄て、顧みないこともあり、或は幾分

か抑制して適度に其欲求する所を満足せしめようとすることもあり、或は又豫めなるべく將來の苦痛を少くするような方法を講ずることもあり、兎に角種々と思慮を運らすものである。(第三)尙ほ吾々は同時に幾多の事物を欲求し、それが一々動機となつて吾々の動作を促がすので、吾々はその取捨に苦しみ何れに従ひ何れに背くべきやと、思案せざるを得ざることゝなり、爲に其解決を得る迄暫く動作を中止するようになることも、吾々の屢々經驗する所である。尤も斯様な場合にあつても、(一)若し多くの動機が結局同一の目的に向つて吾々を導かうとするものである時には、例令ば食事を取らうとするのと、散歩を試みようとするのは、つまり生命の保存とか身體の健康と云ふような、共通の目的を有つて居るものであるから、決して根本的に相反するものではなく、隨てよしや一時之等の欲望が互に競争せんとするようなことがあつても、時機を待てば雙方共に満足せしめることも出来る所からして、爲に深く思慮を運らすには及ばないかも知れぬが、(二)若し幾多の動機が互に衝突して到底兩立することの出来ないような場合には、例令ば利己の心と正義の念とは全く反對に吾々を導くものであるから、若し利己の心に従へば是非共正義の念に背かね

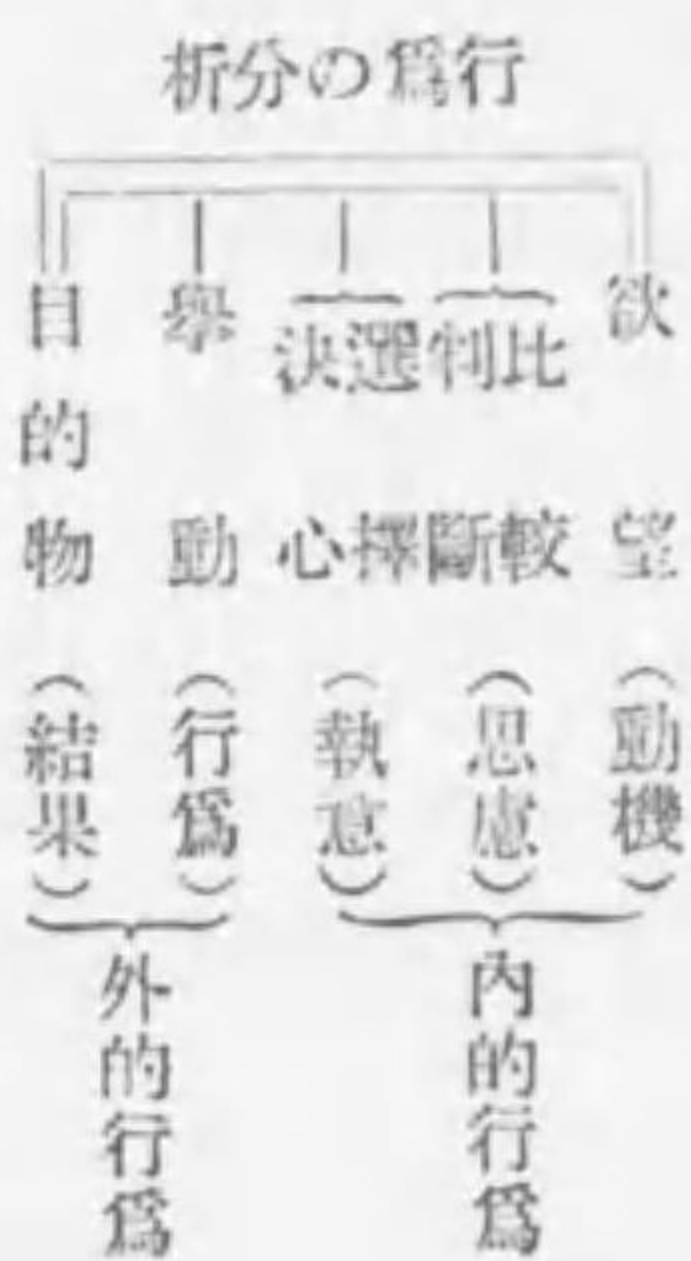
ばならず、正義の念に従はんとすれば、利己の心を棄てねばならず、孝ならんとすれば忠ならず、忠ならんとすれば孝ならず、嘆息したやうに、到底調和の出来ない幾多の動機の起つた時には、必ずや之等の動機は互にその優劣を争ふことになり、勝負を決しようとするに至るものである。さうなると吾々はその取捨に就て迷はざるを得ないこととなり、爲に大に思慮を要することとなるが、往々苦心焦慮の極耐へ難い煩悶を感ずるようにもなるものである。斯くて吾々の動作は一時中止せられ、彼是其取捨に悩み躊躇逡巡して何れにとも容易に決心し難いような状態に陥ることもあるが、斯様な場合に、或は吾々自身の自然的傾向からして、特別に何等か理由のあると云ふにあらずして、自然に一方が勝を占めて他を壓倒し、爲に禁止状態を破りて動作を促がすようになることもあり、或は又彼是互に衝突し未だ勝負を決するには到らないけれども、禁止の状態衝突の状態其自身が嫌やになり、遂に吾々は如何にも敢て意としない所謂無頓着の有様となり、爲に無意味に何れか一方に勝を譲り、さうして之を満足せしめようとするに至ることもあるが、若し幾多の動機に就て何所迄も其の是非善悪を判別し、さうして其取るべきを取り捨つべきを捨てよう

とする、思慮の周密なる人、若しくは道徳心の強固なる人にありては、決して事を有耶無耶の間に判決しようとしないうで、深く沈思熟考する所あつて如何なる煩悶にも打克ち、如何なる昏惑にも正確なる解答を與へようと努力して止まないものである。斯くて其正確なる解答判断を得るに至らんか、其正且つ善と信ずる方を選んで之を決行せんとするものである。斯様な場合に於て、行爲の特質は最も明瞭に現はれ、爲に思慮的動作とか撰擇的行動とか云はれる次第である。

三 行爲の分析 最後に前述の如き複雑なる行爲を分析して、其の要素を擧げて置かうと思ふ。(第一)行爲には之を惹起さしむる動機即ち欲望の存することは云ふ迄もないことである。(第二)更にその欲望に就て利害得失なり是非善悪を考慮し、且つ又之を獲得するに要する手段方法に就て、その適、不適、便、不便等を比較判断する所の思考作用が含つて居る。若し何等か欲望の起るに際し毫も思慮を遣らさず、直に之を満足せしめんとするが如きは、所謂衝動的意志と稱せられ大に卑しむべきものである。(第三)既に何等かの判断を得たならば、進んで現在自己の營まんとする動作に於ては、その何れを取り何れを捨つべきものであるかと選擇する所がなければならぬ。

若し單に何等かの判断を得たと云ふに止らば、全く自己の動作活動には關係なく、つまり純粹なる知的作用たるに止るものである。併し單に彼を取り是を捨てると云ふ選擇を行つたのみでは、やつと實行の端緒に就たと云ふばかりであつて、未だ行爲は成立してゐないのである。そこで或る動機に基いて行爲を成立せしめると云ふに就ては、愈々其選擇した所に據て活動の方向を定め、斷然之に向つて活動しようとする所謂決心が起らねばならぬ。其故一たび決心したと云ふならば、最早單に判断したとか、選擇を了したと云ふのとは大に異り、必ずや實行の伴ふことを示めしてゐるものである。それで一たび實行を決心したと云ふならば、即ち余は斯くなさん、否なすべしと思惟することになり、善にあれば惡にあれば、之は自分自身の所作である、動作であると云ふ意識を有し、隨て立派に自己の意志を現はすものである。依て之を執意と稱し、意志の頂點と見做すのである。而して茲に到ると、自ら之を外的舉動に現はすべき運動の觀念を心中に召び起し、之に依りて實際の行動たらしむるに至るものである。それで果斷決行人と云ふは、決心が早く且つ之を實行するに至る過程も短くて、毫も躊躇逡巡する所なく、直に其決心を貫かんとする人である。之に反し

て徒に思案にくれて容易に實行の出来ない人は、所謂遲疑する意志を有するものであり、又強固なる意志と云ふのは、元より果斷決行人をも意味するけれども、寧ろ其決心を持続せしめ、一たび決心したことは之を貫徹せしめなければ止まない、如何なる困難に遭遇するも決して途中で挫折しないといふ持続力或は意氣込みを云ふのである。(第四)そこで最後に、決心を實行する爲に外部に



現はれ来る外的舉動がある。斯くて既に一旦實行せんと心中に決したならば、最早意志は立派に成立して居るので、之を内的行爲と稱するが、若し進んで如何様にか之を外部に現はして外的舉動たらしめた時には、之を外的行爲と稱へて兩者を區別することが出来る。(第五)外的舉動の結果、目的物を獲得するに至らば、即ち吾々の行爲は其終はりを告げ所謂成效したものである。併し目的を遂ぐるの難易あり、手段の巧拙ありて必ず成效を期すべきではないから、時に失敗に終はり、努力の水泡に歸する場合もある譯である。

斯様にして行爲は以上五個の要素から成立するものであるが、併し其中最も大切なるものは、動機と思慮と執意であつて特に執意は意志の中堅である。依て吾々若し何事かをなさんと決心する所あらば、よしやその決心は外的舉動として手足の運動に現はれずとも、又隨て未だ何等の結果を見るに至らなくとも、既に心中立派に意志は成立し、以てその責任を問はれる譯のものである。其故に吾々は元より思慮の綿密判断の確實なるを要するけれども、その上では選擇、決心、所謂執意に就て深き注意を拂ひ、事毎に苟もせざる習慣を養ふの必要あるを認むるものである。要するに如何なる場合にも正確なる判断に基きて正當なる選擇をなし、而してその爲すべしと決心したる場合には、是非とも之を斷行するの勇氣を鼓舞し、爲すべからずと決心したる場合には、斷然之を抑制禁止するの克己心を振起せしめねばならぬ。茲に所謂意志の修養なるものを見る譯で、之に依りて吾々は能く吾々の意向を支配し、言行を統御し得る次第である。

第十二章 女性の意志

一 女性の意志は薄弱なり 一般に女性の意力は強固なるものでないと云はれて居るが、之は果して事實であらうか。この問題を解釋するに就ても、何等正確なる實驗的研究の根據とすべきものがないから、單に各自の觀察に基いて立説するより外仕方のないことを憾とすることである。然るに私の觀察に據るも、女性は知識に於て其の發達の充分でないように、意志に於ても同様なる事實の現はれて居るように思はれる。然らば如何なる點に於て女性の意志は薄弱であるか、又どう云ふ理由で以てさう云ふ風に云はれるのであらうか。

(第一)元來女性の體質は緒論にも述べて置た通り、男性の消費的、活動的なるに反し、貯蓄的、靜止的のものであるから、自ら骨格も靜座するに適し、運動するには不適當に出來てゐるので、精神に就て云ふも、其の活動的方面なる意志の發達には不適當なことになつて居るように思はれる。

(第二)意力の基礎は筋力にありと云はれる程、筋力の強弱なり、筋肉活動の巧拙は意力の發達に

大なる關係を有するものと見做されて居るが、女子の筋力は、餘り之を使用しない所からして甚だ孱弱で、到底之を男子に比すべくもないのみならず、之を使用するに就ても敏捷でない拙劣なるものがあるので、自ら意志の發達にも影響し、男子のように強固でない一つの理由になつて居ることと思ふ。

タムソン女史の試みた所の反應時間の實驗に依て見るに、女史は一定の裝置を以て被験者の耳と眼に刺戟を通じ、刺戟の來るや否や右手食指を以て測時器の一端を壓し以て反動を現はさしめ、同時に反應時間を検査したのであるが、男性の方女性よりも一層短い反應時間を有つて居ることを示めした。聽覺、視覺何れに於ても、男生の方では何れの女生よりも、短い反應時間を呈するもの數名あり、之と同時に女生中には、何れの男生よりも長い反應時間を呈したるもの數名あつて、つまるところ大體に於て男子の方反應時間短いことを證據立てた。又刺戟に對して反動する時に、其注意は何れに向いたかと云ふことを調査し、以て反應の型に就て取調べたが、聽覺、視覺何れに於ても、感覺型は女子に多く、運動型は男子に多數なることを確めた。タ氏は之を以て男生の運動好き

なること、豫て活潑なる生活をなしつゝあることに歸するよう説いて居るが、それは兎に角男子は筋肉使用に熟練して居る、隨て敏捷であることを示めす次第である。

更にタ氏は指尖運動の速度及び疲勞の割合に就ても比較研究を試みて居る。之にも特別な裝置を設けたのであるが、要するに一つの圓盤があつて、其上に右手を横へさうして食指の指尖にて圓盤の中心にある打標を軽く打つのである。さうすると圓盤の下に附設してある測度器で以て、何回打標を打つたかと云ふ度數が分かるようにしてあるのである。それで合圖が與へられると直に被験者は上述の如き指尖運動を始め、さうして如何に速かに、又如何程長く繼續し得るかを検査したのである。所で此實驗に依るも、男生は女生より著しく迅速に指尖を動かすことを發見した。男生は二十四秒間に於て平均十度多く打標を打ち得た。一體ピアノなどの樂器練習は、女生に於てより多く試みられて居る譯であるけれども、指尖運動の男生に劣る所を以て見ると、どうしても其活動的でないと思ふことが分かる。又此運動は一分間もすると皆痛みを覺へ、それ以上繼續することは困難であるから、一分間で中止したのであるが、それ迄繼續したものは男生に多數で

あつた。女生は四十秒にして既に疲労したのもあつた位である。

女生数	男生数	性	
		秒	分
一		四〇	
二		六〇	
三		八〇	
二	二	一〇〇	
一七	二三		一二〇

要するに、之等の實驗は單に指尖運動の比較研究に過ぎないものであるけれども、何れの部分の筋肉に就て云ふても同様であらうと思はれるので、女子は男子に比して、筋肉の活動に於て著しく劣るものであることを確め得る次第である。

(第三)更に吾々の行爲の動機となる所の欲望に就て比較して見るに、女子は概して欲求する所少く且つその強度も強くないように思はれる。

(一)生命の欲望はどうか。全體生きてゐる以上は、何人も生命を保護持續せんと欲望を有たないものがあるまい。之は人間にありても一つの本能的欲望である。其故男女に於て強弱の差異

はなささうなものだが、私の見る所では、女子の方割合に淡泊で、男子程に生に執着する所がないように思はれるが、如何なものであらう。些々たる原因で以て生命を絶ち、自殺を試みるようなこととはないか。尤も自殺者の統計に依ると、女子の方少数であるが、併しそれには理由のあることであるから、後に至て説明しようが、兎に角自殺でもしよう、いつそのこと死んだならと云ふ心は、女子に於てより多く起るように思ふ。それで若しさう云ふ場合に自殺を教唆し勸誘するものがあつたなら、容易に之を實行しさうして女子の自殺数を増すことであらう。要するに私の見る所では女子には親心を除いては義務心が薄弱であつたり、被暗示性に富んで居るから他人の誘惑に應じ易かつたり、又感情的であつたり、ヒステリーに罹り易いので、一時精神錯亂して前後を忘れるようなことも多からうし、且つ犠牲の精神に富んで居るので、他人の爲に己が生命を抛つことも少ないので、何所迄も生存し飽く迄活動しようと思ふ欲望は、比較的に少いように思はれる。

(二)生命の持續に必要な飲食物に對する欲望如何にと考ふるに、之れ亦女性に寡少なるは明かな事實である。女子は一般に身體も小さく、激げしい勞働もしないので、男程多量の食物を必要と

しない、又酒や煙草も概して用ゐない方であり、總じて女らしく上品にと云ふ趣旨で、小食であり節食であるから、男のように暴飲暴食を樂しむようなことは殆ど絶無である。強いて云へば、菓子や果物の如き間食を比較的旺んにやる位のこと、それも若い時のことであり、又男子に比べたら大したことでもない。其故女子にありては、食量も少なければ、それが欲望の程度も弱く、隨て意志の活動も、それだけ旺んでないと云はなければならぬ。

(三) 衣服裝飾品に對する欲望は、明かに女子に於て旺んである。四五歳の幼女から、二十歳前後の所謂年頃の娘は勿論、更に年増になつても、老婆となつても、衣服や裝飾の事になると、何を差置いても一番に欲求すると云ふ有様である。之は蓋し女性の本領、本能ともなつて居るのであるから、元より當然のことであらう。ロンブローゾ嬢も、その著書中に、婦人の裝飾欲に就て、詳細に論述し、就中衣服に對する憧憬の如何に大なるものあるかを説いて居る一節に「衣服の誘惑は、初心ノヴィスの尼達ニが、いよくク尼院ノイスマーに入らんとする時に受ける儀式に際し、最後の妨害である。曾て自分の着用した金銀を以て縫箔した美はしい晴着の記憶は、聖キャザリンが、尼院に入るに際し、彼

女の嚴肅なる誓約をなす前に苦んだ所の、最後の誘惑であつた」とあるが、之は吾々男子の夢想だに出来ない所である。何故婦人達は衣服や裝飾品を欲求するのであるか、それは元より自分を他人に、より美しく見せたいからであるが、口嬢の云ふ所に據ると「寶石や美衣は婦人に對し、男子の勳章に相當し、それで以て彼女の家族の社會的地位や格式を示めすもの」であるさうである。なる程そんなものかなと、吾々男子は轉々驚嘆するばかりである。フェヌロンも、小女の虛榮心を説めた言葉の中、次のようなことを云つて居る。曰く「男子をば權力と名譽に導く途は、女子に閉されて居るので、彼等は心身の魅力アグレマンを以て之を補はんとし、爲に彼等の會話は優佳にして愛嬌あり、又美貌や一切の外面的艶麗を渴望し、裝飾を凝らすことに熱中す。さればにや、頭の飾り、リボン、高低ある縮れ毛、色合の選擇等は、凡て皆彼等に取りて、重要な事柄である」と。如何に婦人達の裝飾欲は、強大なるかを察するに足るものである。

(四) 知識に對する欲望も、從來の教育なり、境遇の然らしめたものとは云へ、一般に甚だ薄弱である。尤も歐米の女子は、近來教育の進歩につれて、大に好學心も進み研究心も増して來たので、

我國現時の女子と同一には論ぜられないけれども、概してまだ男子に及ばざること遠しと云はざるを得ないことである。

(五)名譽の欲望は、女子に於て必ずしも薄弱でない。他人に褒められようと思ひ、隨てその批評に掛念するは、女子の方著しいようである。ロンブローゾ女史の云ふ所に據ると「たとへ婦人は仕事が好きで、何か働いてゐないと幸福に感じないものであるとは云へ、それでも彼等はその仕事を他人から承認せられんことを要求するものである。彼等はその仕事に對し、必ずしも金錢其他の報酬を得ようとは思はぬが、その功績を認め、さうして賞讃せられんことを要するものである」と。併しその名譽とする事柄が、概して卑近であり、多くは容貌の美とか、衣服の立派なことか、さなくば夫の地位が高いとか、子女の成績が良いとかであり、又自分自身の仕事としても、區々たる家事手藝の末技に止り、何か發明したとか、事業に成功したとか云ふような、社會的貢獻に關することではない。之は元より女子の社會的地位なり、職分の然らしめることで、又已むを得ざるものでもあるが、兎に角名譽心の範圍は至て狭少で、又卑近なものであるのは、争ふべからざる事實である。

又他人から賞讃されるにしても、眞に自己の功績に就き、嚴正なる批判の下に、慎重なる決定を見ようなど、云ふのでなく、お世辭でも何でもよし、容易く賞讃されるようにと云ふ、寔に子供らしい稚氣に満ちたものである。又大望とか野心と云はるゝものは、女性に缺けて居るように、一般には思はれ居るか知らぬが、仲々相當に有つて居る。尤も之はマリオンや、ミーキンの云ふて居るように、婦人自身に關係したものでなく、その夫の出世榮達などに關するもので、夫は妻の野心に唆され、その激勵に乗じ、柄にもない大望を起し、榮達所か大失敗を演ずることも往々見受けらるゝ次第である。婦人は自分自身に出來ないことを、夫なり他の男に實行せしめようとするもので、犯罪の裏面に婦人の存するものも、同一の事情に基づくものである。其故婦人の野心は、自分に直接のものでなく、間接のものであるが、將來婦人が社會的活動の増進と共に、それ自身に關する野心も現はれることであらう。

(六)權力の欲望は、どうであるかと云ふに、女子は幼時から嫉妬心も強く、特に同性間の競争心は仲々烈げしいようであるから、他人より優りたい、卓越した者となつて、大にその權力を振ひた

いなど、云ふ希望も存外強いらしい。或は婦人會の會長とか幹部になつて、多くの會員を指導したい、統御して見たいなど、云ふ感想は、特に勝氣の婦人には有り勝ちのようである。併し多くの場合、婦人は自分の手腕自分の力量で以て、他を支配統御しようとするのではなく、夫の地位や權勢を鼻にかけ、そのお蔭で以て、夫の部下の妻君達に對し、虎の威を借る狐的に威張り、それで以て漸く權勢欲を満足さして居るようである。之は蓋し弱者の虚勢と云ふか、空威張りと言ふか、その特徴であり、獨り女性にのみ存することではない、元より男子にも、特に小役員の間では能く見受けられることであるが、女子は心身共に孱弱なるを免れ難いものであるから、その間に一層多く行はれるのである。それで斯様な場合に、一方では上から威壓せられるので、その腹いせと言ふか、償ひと云ふか、埋め合はせのため、一方では抑壓を以て下に向ふと云ふような、心理作用も伴ふので、實に陋劣なる心事と云はねばならぬ。そは兎に角、婦人は、マリオンの指摘して居るように、その夫であり、主人である男子に對しては、服従の本能を現はして居りながら、眼下の者に對しては、之と反對に、支配と命令の本能を示めしてゐるものである。

(七)今一つ比較したいのは、男女性慾の強弱である。性慾は人類の保存なり繁殖の源泉たることは、云ふ迄もないことであるが、更に美術でも、道德でも、宗教でも、將又多くの社會的事件も亦此性慾に關係すること實に大なるものであるから、これに就て男女を比較するの必要を生ずる次第である。然るに古來性慾を以て或は男の方強しとするものあり、或は女の方強しとするものあり、或は兩者の間に差異なしとするものあり、學者の説く所一様でないから、確乎たる斷言は出来ないが、エリスは其著「性の心理學」に於て、種々なる方面より詳細なる研究を遂げ、結論として次のように言つて居る。曰く、「何れの説にも相當の根據あり、事實の以て證明すべきものがあるから、強ち何れを可とも否とも言へないけれども、大體に於て性慾は男女に於て明かに平均されて居るものであると言ひ得るようである。併し男女兩性の間に著しい特質の存することを認めざるを得ない。即ち(イ)男性の性慾は明かに能動的であるが、女性は少くとも外見上所動的の態度を取て居る。(ロ)男性の性慾は寧ろ簡單で容易く自發的に起り得るものであるが、女性のは複雑で容易に自發的に起り得るものでなく、爲に異性より興奮せらるることを一層多く必要とするもので

ある。(ハ)男性は一たび戀愛を遂げると、以前の欲情を減少するものであるが、女性では之に反して一層強烈なるものとなるのである。(ニ)女性に男性よりも過度に性慾を満足せしめ得るものがある。(ホ)局部構造上の差異よりして、女性の性慾は一層擴散せられ、他の情緒の源となつて居ることもある。(ヘ)女性の性慾には一層週期的の傾向があると。(ト)女性間には人により又時により、一層變化多きこと。エリスは以上六個の特質を擧げて居るので、之に依て見ると、よしや性慾の強度に就ては男女間に差異なしとするも、男子の性慾は屢々自發的に起り、且つ攻勢的と云ふか能動的と云ふか、一層強烈なる活動的の態度を以て發現するものゝようである。

要するに女子の欲望は概して強烈なるものなく、よし強烈であるとしても其範圍が狭く且つ能動的の態度に出でないものであるから、男子に比してどうしても活動的でない、隨て意志を練磨し以て強固なるものとなすの素地を缺いて居ると云ふて差支なからうと思ふ。

(第四)更に思慮に就て、女子は如何なる特質を現はして居るかと云ふに、私は女子の行爲に於て、思慮の分子は甚だ少いように思ふ。何故と云ふに、前にも述べた通り、元來女性の欲望は少く

且つ餘り強くないので、特更そが比較研究を必要とする場合が多くない、隨て左迄思慮を運らすには及ばぬものゝように思はれる。男子は之に反して、其關係する所大きく隨て活動の舞臺も廣いので、自然欲求も多くなり、願望も少くない所からして、其間に取捨の必要も起り熟慮を要することゝなるのであるけれども、女子にはそのような必要は餘り感ぜられないものである。尤も女子は概して氣兼ね多く心配性のものであるから、屢々些々たることに就て、心勞ひなり憂慮することの多いものであり、特に「ヒステリ」的の女子に於て、その甚だしきを見ることではあるが、之等はたゞ徒に心勞憂慮するに止り、深い意味のあるものではない。特に女子には正義とか義務の觀念と云ふものが缺損して居るから、之等の觀念に訴へて、己が行爲の是非善惡を熟慮すると云ふようなことの少いものである。其故女子は餘り煩悶とか苦心焦慮とでも云ふような、痛烈な深酷な不安を感じないもので、存外樂天的の所があるようである。又概して女子は思慮に必要な知識なり能力を缺いて居るから、沈思熟慮以て徐に判斷を期するようなことは不可能である。尙ほ知識篇に於て述べた通り、女子の判斷は感情的であつたり、直覺的であつたり又は依他的であるからし

て、自分自身に冷靜なる態度を以て、靜に考へ深く慮ると云ふようなことは出来ないものである。其故女子の行爲は慾望の起ると共に直に執意に移り、所謂衝動的意志に依て成立する場合の多いものであり、ロンブローゾ女史は、之を婦人の自發性スポンジイティに歸し、その爲婦人の決心は迅速であり、躊躇なく思想より行動に移るものであると説いて居るが、要するに婦人は輕學妄動の多いものであり、隨てその意志は幼稚であり、確固たるものではない。

(第五)尙ほ執意に就て考察するに、普通平常の場合では、前述の通り、女子の決心は迅速であり、その欲求するものに就て深く思慮を運らすことなく、直に之を實行せんとし、爲に欲望から容易に執意に移り、その経過は實に單純なものである。然るに何か面倒なことか、重大なことか、複雑なことに遭遇すると、多くは躊躇逡巡して容易に選擇決心の出来ない、隨て果斷決行を缺くことの著しいものである。其故マリオンも「婦人は或は果斷決行を缺き、或は果斷決行に過ぎると云はれるが、何れも意志薄弱の特徴である」と云ふて居る。ロンブローゾ女史も、這般の事實を認めては居るが、必ずしも重大な場合に限られたことではない、否眞につまらぬこと、假令ば衣服や家具の選

擇、來客の席次決定等の場合に、却て餘計に狐疑するものであると云ひ、且つその原因として二つのことを擧げて居る。その一は、婦人は一つの行爲で以て多くの必要を満たさうとするからだ、つまり一石二鳥ではない、一石數鳥を目論むからである。假令ば衣服を買はんとしても、なるべく地質の良い、而かも美しくて又安價なもので、家族を喜ばすようにしたいと、婦人は細かに考へるから不決定に陥るのである。又一つには、婦人は平素道理によらず、直覺に依て導かれて居るので、直覺の働く場合はよいが、さなき時には自信を失ひ、爲に決行を躊躇するものであると。元よりさう云ふことも云はれようが、私は其外色々の原因もあるように思ふので、その主なるものを擧げるなら、(一)女子は概して知識に乏しく、經驗の少いものであるから、何かの目的を遂げ、仕事を爲さうとするに當り、其爲に要する手段なり、方法の知識に於て甚だ貧弱であり、又それが實行上の技能に於ても頗る拙劣であり、熟練してゐない所からして、自然自信力を缺ぐことになり、爲に臆病になり、思ひ切つたことの出来なくなるからである。(二)女子は又依他心即ち他人に依頼する精神の強いものであるから、少しでも困難なこと、聊かでも面倒なことが起ると、何時でもその親に頼る

とか、その夫にすがる風であつて、獨力以て事に當り、自力で以て解決を告げようとする健げな獨立的精神を缺いで居るので、いよゝゝとなると、自分で出来るか出来ないか、他人に頼るべきか、どうかと懦弱な心を起すからである。(三)よしや自力で以て事に當らんとしても、どうも女子は一般に他人の批評を恐れ、世間の評判を気にするので、決心が鈍れ斷行を敢てしないと云ふ風に、躊躇するようにも思はれる。(四)又よしや世評の如何を意に介せず斷然決心したとしても、かねて女子は感情的であり、思想の動搖も甚だしいので、その決心が永續しない、始終グラ／＼變化して極りなく、爲に堅忍不拔と云ふような忍耐力、持続力に乏しいものとなり、要するに薄志弱行を免れない次第である。

之を要するに、行爲の要素たる欲望なり、思慮なり、執意なり、何れの點から觀察しても、女子の意志は、幼稚であり薄弱であり、まだ／＼男子に及ばざること遠しと云はなければならぬようである。

二 女性意力の發現 然らば女子は全然意力を缺いで居るか、如何なる場合にも、その意力の發

現を見ることの出来ないものであるかと云ふに、仲々さうでない。(一)女子と雖も、非常時に際したとか、又は他に頼る人もなく、執るべき方法もないと云ふような窮乏の極に陥ると、窮鼠却て猫をかむと云ふ調子で、猛然として立ち、奮然として事に當り、自力奮闘、堅忍不拔の勇氣を現出するものである。或は病める夫を看護しつ家業に勵むとか、或は夫を失ひ寡婦となるも固く節操を持ち、あらゆる艱難に堪へ、あらゆる誘惑に打克ち、以て夫の遺業を繼ぐとか、専心子女の教育に盡すとか、或は兩親を失ひ一家の窮乏に際し、婚期を失するも意とせず、否生涯を犠牲にしても、兩親に代はりそが弟妹の教育と、一家支持の任に當るが如き、奮闘的献身的行爲に至りては、仲々男子も及ばぬ強固なる決心、斷乎たる勇氣を現はすものである。それで世間には、夫をして内顧の憂ひなからしむる賢夫人も少くないが、一朝緩急あらば身を挺して其衝に當り、男子をして後に墜若たらしめる烈婦の、より多く見受けられるのも故なしとしない。其故に私は、何も女子が意力を缺いで居るのではなく、只だ長い間の慣習に捕はれ、境遇に餘儀なくせられ、加ふるに體力の關係もあつて、爲に女子は意力を發揮する場合なり、必要を與へられなかつたものであると確信してゐます。

それであるから、前にも述べた通り、病める夫を有つとか、寡婦となつて大なる責任を感じることに成り、而かも到底他人に頼る譯にもゆかない、そのまゝ安閑として居ることも出来ない場合には、奮然として立ち、猛然として進むと云ふようになるものである。されば平素にありても、責任を感じるような境遇と必要を與へたならば、必らずや女子も強固なる意志を有ち得るに相違ないのである。

(二)然るによしや斯の如く自分自身に獨立して、奮然事に當ると云ふに至らずとも、夫なり他の男子の心を動かす、或は鼓舞奨励するとか、教唆使喚すると云ふようなこともあつて、兎に角他人をして善かれ悪かれ、自己の意志を遂行せしむる原動力となり、「表面には顔を出さないうで、裏面では往々狡猾である陰險である」と見做さるゝこともあるのである。

(三)又よしや斯様に直接なり間接に、進んで自己の意志をなし遂げんとする、勇氣なり腕前を缺ぐとするも、退いて辛抱すると云ふ、所謂忍耐性は仲々強いもので、男子なら到底耐へ切れない、我慢の出来ないことでも、女子は能く辛抱して毫も不平の聲を漏らさないと云ふことは、何人も能く承知して居る顯著なる事實である。さればにや、男女同等を主張する、デンスモアも之を女性の特徴と認め、マリオンも同様に之を承認し、次のようなことを云ふて居る。曰く「婦人は人生の小さな災害よりも、大きな不幸に強く、小さな不運よりも、大きな不運に能く忍耐するものである」と。然らば之は如何なる理由に基づくかと尋ねるに、(イ)先づ生理的の根據を挙げたい。女子は元來生理的にも苦痛に耐へ得るようになつて居る、換言すれば、種々なる疾病や傷害に對する抵抗力の強いものであるから、それが自然に精神上にも影響して、忍耐強い性質を備ふるに至つたものである。尤もロンブローゾは、之を以て女性の鈍感性に基づくものであると云ふて居るが、女性は鈍感所か神経過敏の方であるから、ロ氏の云ふ所に誤りのあるのは明かであり、而してその抵抗性に富めるは、全く女性體質の特色なる「アナポリック」から起ることで、それが自然に精神的には克己心、忍耐心となつて現はれて居るのである。(ロ)又この抵抗性と聯關して考へられることは、女性の特色とする適應性のことである。適應性のことは後に詳説するつもりであるが、女性はその爲

に容易く生活上の變化に順應し、男子のように困難しないものである。それが精神上にも影響し、大概の艱難勞苦には辟易しないことになつて居るのである。(ハ)女子には豫て物事の斷行を躊躇する習慣があるので、些細なことに却て驚いたり、又氣短かで往々衝動的に腹も立てるが、少し面倒なことになると、大概の苦痛や不平に對しては、我慢して積極的態度を執らず、自然の成行に放任して、之を耐へ忍ぶものである。(ニ)又女子は、ロンブローゾ女史の云ふて居るように、先天的に他人中心であり、隨て犠牲的、献身的の精神に富んで居るものであるから、特にその愛する者のためなら、如何なる苦痛をも忍び、艱難にも耐へ得るのである。それで大抵のことは、容易く諦めるが、男子は主我心が強いので仲々諦めない、何所迄も不平不満を持續し、旺んに反撥心を惹起すものである。(ホ)更に又從來女子はその境遇上常に男子の壓迫なり束縛に慣れ、爲に忍耐は遺傳的本能なるかのようになつて居るからである。斯様な譯で以て、一般に女性は、よしや積極的意志を缺くとするも、消極的意志には頗る富んで居るものである。之は元より女性の短所であるが、又その長所ともなつて居るので、私は女子をして何時迄も這般の忍耐力を失はないで、而かも今少し

果斷決行の勇氣を養はしめたいものと思つてゐます。

三 女性意力の涵養 斯く女子は體力なり、筋力なり、又は欲望なり、更に進んでは思慮なり執意なり、何れの點より見ても、意力の強固ならざるものあるは明かなる事實である。併し女子なれば必ず意志の薄弱なるものと確定せられたものではないから、私は將來の女子教育に於ては、出来るだけ女子の意力を養成し勇氣を促進するような、方法なり手段を執りたいものであると思ふ。それに就て最も大切なることは、(第一)女子の體育を盛んにして、其健康を増進し、さうして體力なり筋力を強固ならしめたい。(第二)元來女は弱きものなりとの謬想を放擲し、女なりとて男子と同様に事をなし得るものであると、自任自重の精神を鼓舞したい。(第三)事情の許す限り、學校でも家庭でも、なるべく多くの作業勤務を與へて、其健康なり意力を増進するの機會を與へたい。女だと云ふので温室内の花を取扱ふようにしたなら、遂に意力を使用するの機會を失ひ、爲に萎縮して其用をなさないものとなるのは必然の結果である。(第四)作業を與ふると共に責任の感を養成したい。苟も自己の責任なり、本分なり、義務なりとの觀念を抱くに至らば、何事に限らず之を

成遂ぐるの勇氣を惹起すに違ひないと思ふ。(第五)更に女子をして依他的の奴隸根性を放擲し、さうして獨立自彊の精神を鼓吹せしめたい。學生々活に於て日々の課業に對する場合のみならず、嫁して夫に事ふる場合にも同じことで、徒に夫に頼り夫に縋がり、さうして夫の從屬者、附屬物を以て甘んぜず、自ら相當の見識なり才能を有つて、進んで夫を補佐し、誘導し、感化するの意氣を涵養せしめたい。さうして一朝夫に別るゝが如き不幸に遭遇するも、妄りに憫れみを他人に乞ふが如きことをなさず、獨力以て一家を經營し、子女を教育し得るの元氣と膽力を與へたい。私は先年米國女流飛行家のスチンソン嬢に出逢ひ、親しく彼女が飛行術を練習するに至つた動機なり精神を聞て、實に感服に堪へなかつたのであります。ス嬢は最初獨逸に留學して音樂の修業を志したのであるが、家貧にして學資を得るの途がなかつた爲に、遂に意を決して飛行家となり、其所得を以て學資に當てようとしたのださうです。それで最初は女子が飛行術を學ぶと云ふて、大に嘲笑せられたものださうですが、ス嬢は女子なりとて同じく人間なれば、同じ人間なる男子のすること出來ないことはないと確信して、大勇猛心を起し以て短時日の間に、飛行術に熟達し其技男子を

凌駕するに至つたものださうです。女子も同じく人間なりとの意氣を以て事に當らば、何事か成就せざるべき。かゝる自信力、自尊心あつて初めて女子の意力も涵養せらるゝことと思ふ。

第十三章 職業的才能に關する男女の差異

一 女事務員の才能 女子の體力なり意力の孱弱なること、隨て將來の教育に於ける注意は、雜と前章に述べた次第であるが、現在女子の體力なり意力の如何を實地に調査する便利な方法もないから、こゝに私は職業上女子は如何なる成績を表はして居るか、男子と比較して如何なる差異を示めして居るかと云ふことを取調べ、さうして女性的意志の特徴を知るの一端たらしめようと思ふ。然るに之とて未だ精細なる觀察なり統計と云ふものが出來てゐない、特に男女共に同一なる事情の下に、同一の仕事に従事してゐると云ふことも甚だ少いので、公平なる又確實なる比較を試みることは到底出來ることでない。併し種々なる方面に於て調査したる報告もあるから、之に據て大體の差異を擧げて見ようと思ふ。

佛國のヅローネーは、曾て多くの商人に就て、親しく其觀察して居る所を問合はしたことがあるが、其答は一般に、「女は男より一層勤勉であるが、併し知慧に乏し」と云ふ點に於て一致した。其

中で印刷業主の答へた所を擧げて見るなら、女は細かい所は綿密な注意を以て、又器械的には能く働くが、彼等は何をなしつゝあるやと云ふことを充分に了解して居らぬ。それで既に印刷してあるものを見て植字する場合には甚だ甘い、普通の手書から植字する場合には男に及ばないとのことである。又英國のシドニー、ウエツプが、或る生命保險會社の事務員に就て述べて居る所に依ると、其會社では常務を執る爲め女書記が二百人以上も雇はれて居るが、此女書記達の勤務振りは仲々甘い、男の書記よりも仕事が寧ろ上手で且つ迅速であることは疑ひない。併しながら彼等は病氣而かも何でもない微恙の爲に缺勤することが多く、男書記の約二倍以上にも及ぶとのことである。且つ又常務以上の事務になると、之を女書記に一任する譯にゆかぬ、つまり信用して執務せしめるだけの才能がないのである。其故之等の點からして云へば、女書記を使用することは、會社の不利益となる次第である。併し單に常務に就て云ふと、即ち餘り八釜しく急ぎ立てないで、徐々に繼續して仕事をやらせるなら、女は男に優れて居るらしいと云ふことである。

郵便局では何所でも男女の事務員を使つて居るから、郵便局に就て男女の職業的才能を比較し

たら面白からうと云ふので、エリスは英國の各地に於ける大郵便局へ問合はせたが、之に依りて實際の経験から出た信用せらるべき答を得た。それで或る郵便局長の言に據ると、計算掛とか又は爲替掛、貯金掛、電報の發受などの如き器械的の仕事や、又は野卑や亂暴な人達に接し、之を甘く取扱ふてゆくと云ふような働では、女書記は男書記より優つて居る。又女書記共は帳簿を整理し、金銭の取扱に注意深く、應待が上手で又能く忍耐すと云ふのが、一般に女書記の長所であるらしい。又英國西部の或る郵便局で、電信事務は全然女子の執る所となつてゐるさうであるが、其仕事振りは仲々巧みであると。又或る郵便局でも、女は男と同じような才智と精確とを以て電信事務に従事して居るが、筆跡が拙く男のように上手でないし、又女は男のように電信に關する専門の技術的知識を研究しようとする熱心を有たないとのことである。それから郵便事務はどうであるかと云ふに、之にも女は大なる成功を收めて居る。女の事務員の使はれて居る郵便局では、不注意だとか不親切だとか云ふて、公衆から非難せられることが少いとのことである。切手類を整理し、金銭上の取扱は確實であると云ふような次第で、之を要するに、女事務員は才智と精確とを以て其任務に従

事するが、普通の場合には男と同じように執務し得るけれども、困難な仕事特に腕力を要することになると、全然男の敵手でないといはれて居る。同じような意見が他の郵便局よりも來て居るが、尙ほ或る郵便局長の報告によれば、單に計算的の事務では、女子の電信技手も立派に其職務を果すけれども、非常な場合には到底男子の技手に及ばないで、過失の割合が一般に女子の方に餘計である。又配達人の管理や訓練も、男の方が能く出来る。更に又専門の電信技術に就て、かなり忙がしい時でも、女は男と同じように働き得るけれども、非常に忙がしい時になると女だけでは間に合はないから、一般に男の技手をして手傳はせる必要がある。特に新聞社の通信になると、餘りに忙がしくて女子には到底應じきれないさうである。蓋し女子の手頭は迅速に通信を筆記するだけの強さを缺いて居るのも、其一原因であり、加ふるに女は一般に知識の範圍は狭く、種々なる通信事項に關し一々興味を有つて居ると云ふ譯にゆかないから、自然技術の拙劣を來たし、男子に及ばぬようになる次第であると。又或る人の意見に依つて見ると、女は能く室内を歩き廻はり、長時間腰を掛けずに立ちづくめにするには困難であるから、監理者とか取締人として働くことにも適當

しないとのことである。

之等の報告は、何れも大體に於て一致し、同じような意見を發表したものであるが、之を要するに女は訓練上男子よりも一層教へ易く又導き易い。而して容易な仕事では男と同様に執務し得るのみならず、或る場合には一層確實である。併し彼等は屢々輕微なる不快の爲に缺勤し、少しく烈げしい務には速かに疲勞するのみならず、普通以上の知識になると往々之を缺き、又専門技術上の知識を得んとするの希望すら有たないようである。之は元より結婚と云ふ他に目的を抱いて居るからで、隨て止むないことではあるが、技手としては不適當なことである。

二 女事務員の俸給 尙ほ傭主の方から考へた時に、女の俸給は比較的安いから、假令ば英國の郵便局では、女の事務員の俸給は約二十五パーセント安いと云ふことであるから、此點からは女の事務員を採用した方が、經濟上得策であるけれども、併し又不都合なこともあるので、俸給が安いからとて必ずしも經濟にはならぬらしい。今英國の郵便局に於ける調査に依れば、(一)女の事務員は病氣の爲缺勤が多い。(二)夜間は女の執務を要求されない、而かも夜間の方が忙がしい。

(三)彼等には普通以上の餘計な仕事が出来ない。(四)晝間でも郵便局へ盜賊の襲來することもあるので、女の事務員を使つてゐる所では、盜難防禦の爲に別に男を傭はねばならぬ。(五)便所を特別に設置する必要あり、甚だ厄介であるので、地方の郵便局では女の事務員を採用せぬ所が多いと云ふことである。

管に會社なり郵便局に於ける事務のみならず、特に婦人の任務と見做されて居る、料理や裁縫の如き仕事でも、専門の職業としては、女子は到底男子に匹敵し得べくもあらず、男子の遙に卓越せる技能を有つて居ることは何人も首肯せざるを得ないことになつて居る。

斯う云ふ次第で、職業上でも女子の體力なり筋力の孱弱なことや、意力の薄弱なこと、さては才智なり技術の淺劣なことは、充分に表はれ疑惑の餘地はない。元より女子にも執務上多少の長所のないではないが、概觀すれば、男子の方が遙に優良なる性質を有つて居ることは明かな事實である。

三 職業婦人に對する注意 併し今日女子の意力なり實務的才能と云ふものが、大に男子に劣

る所ありとて、之を以て直に女子の價値を決定するは、大早計のことであると私は信するものである。一體女子は従來の慣習や境遇の男子と異なる爲に、自然體力は弱く經驗には乏しく、且つ才能の劣つたものとなつて居るにも拘はらず、直に體力も旺んであり經驗にも富み、特に才能の優れて居る男子と同様に取扱はれ、何等の斟酌もしないで比較せらるゝと云ふは、實に酷も亦甚だしいものであると云はなければならぬ。それであるから、私は女子をして實務に従事せしむるに當つては、女子には女子相當の取扱なり、監理なり保護を與ふべきものであると思ふ。然るを女子が實務に就たからとて、直に男子と同様に取扱はれ、特に男子が男子の爲に設けた所の事情の下に、同様に勤務せねばならぬと云ふは、而かも女子の男子に劣る所ありとて、種々に非難したり攻撃などするは、非常に間違つたことである。假令ば女教員にしても、教員だと云ふので直に男教員と同様に、否男子が男教員の爲に作つた服務規律の下に執務せしめ、さうして男子と同様の成績を挙げしめようとし、さうして聊でも缺點があつたり、男子に及ばぬ所があると、直に女教員無能論の聲が高くなり、さては女子師範廢止の議論さへ起るに至るは、實に其當を得ないことであり、女子に對し

て不公平な處置を取つてゐるものと思ふのである。又女子にしても單に劣等視せられ、無能者と見做さるばかりなら、左迄のこともなからうが、餘り過度の勤務労働に従事する所からして、不知不識健康を害し精神力を消耗するに至りつゝあるは、眞に憂慮に堪へないことであり、識者の等閑に附すべからざるものであらうと思ふ。近來歐羅巴に於ても、商工業の發達と共に神經衰弱とか精神病に罹るものが、段々に増加しつゝあるが、其増加の割合が女子に餘計になつて居るさうである。其故エリスも今日の勞働社會に於ける四大缺點を挙げ、長時間の勞働、寡少なる勞銀、それから、不規律と非衛生的境遇は、特に女性勞働者に危害を醸すことの甚だしいものであるから、どうしても女性勞働者に對しては、特別な注意と保護を與へなければならぬことを極論して居るが、是非共さうなければならぬことゝ私も思ふのである。

之を要するに、女子には女子相應の取扱なり、保護を與へたならば、彼等とても亦相當の成績を挙げ、妄に劣等視せられ無能視せらるゝこともなからうと思ふ。斯くて漸次體力を養成し、同時に業務にも慣れ經驗を積むに至らば、よしや男子と全然同じような状態に達せずとも、左迄劣らない

否殆ど相拮抗するに足るものとなり得ることは、毫も疑惑の餘地を存せざることである。現に米國の婦人は諸種の業務に従事して、立派に成功しつゝあることは、誰しも能く承知して居る所である。私の曾て彼地に留學中知合となつた婦人中にも、牧師あり、醫師あり、大學校長あり、教授あり、小學校の教師あり、圖書館の書記あり、商店の會計あり、而して何れも相應に其地位を保ち、有聲の男子と相拮抗して何等遜色なき有様であつた。又歐羅巴に於ても先年の大戦争は、婦人の活動をして益々旺盛ならしめ、爲に漸次従來男子の専有に歸したる諸種の職業に迄侵入し、而かも着々其功を奏し男子に比して毫も劣る所なきことを實際に證明したようである。思ふに將來の世界は何れの方面に於ても、益々婦人の活動を要するに至るべければ、隨て婦人の體力なり、意力なり、技倆も亦益々進歩して止まないことであらう。婦人に教育と境遇を與へよ。然らば彼等も凡ての點に於て、男子と大差なきに至るべしとは私の持論である。

第十四章 女性と犯罪

一 女性犯罪者の數 女性の有する意志の特質なり、職業上の實際的才能に就ては、大略説明した次第であるから、更に方面を變へて稍々變態心理に屬する、犯罪と自殺に就て男女を比較し、以て女性の有する意志の特質を穿鑿しようと思ふ。

先づ犯罪に就て、男女間の性的差異を調査しようとするに、之は仲々容易なことでない。何故と云ふに、法律は國々に依りて異り、又其法律を勵行する寛嚴の度合も一樣でないのみならず、裁判官や警察官の處置も一々信用せられないようなこともあるので、彼等に依て與へらるゝ材料や事實に基いて、斷言を敢てすると云ふことは、餘程大膽な話であつて自然誤りの多いことと思ふからである。併しながら犯罪的又は非社會的意志と云ふものは、男性に於けるよりも女性に於て微弱であると云ふことは、殆ど何等の疑念をも挾むことの出来ない事實であるようである。ロンプローゾの著述にして、斯學の權威と認むべき「犯罪論」にも、次のようなことが言ふてある。曰く「凡

ての統計は女性犯罪者の男性犯罪者より著しく少数なることを示めて居る。若し殺兒罪をば普通の犯罪以外に置く時は、更に其事實の顯著なるを知るべし」と。今ロンブローゾの擧げて居る犯罪者の統計を參考するならば、

地名	男 (百分比例)	女 (百分比例)	女一人に對する男數
伊太利	八四、一	一五、九	五、二
英吉利	七九、〇	二一、〇	三、八
丁抹那	八〇、〇	二〇、〇	四、〇
和蘭	八一、〇	一九、〇	四、五
白耳義	八二、〇	一八、〇	四、五
佛蘭西	八三、〇	一七、〇	四、八
埃太利	八三、〇	一七、〇	四、八

地名	男 (百分比例)	女 (百分比例)	女一人に對する男數
バールデン	八四、〇	一六、〇	五、八
普魯西	八五、〇	一五、〇	五、七
露西亞	九一、〇	九、〇	一〇、一
ベイノス、エイルス	九六、四	三、六	二七、一
アルゼリア	九六、二	三、八	二五、〇
ヴァイクトリア	九一、七	八、三	一一、〇
ニユー、サウス、ウエールス	八五、五	一四、五	一五、八

即ち男性犯罪者の數は、最も少い所でも女性犯罪者の四倍弱に當り、最も多い所では二十七倍強にもなつて居る。又平均して見るに、女性犯罪者は犯罪者全數の百分中一四・一に當つて居るから、男性犯罪者の數は女性犯罪者の約六倍に當ることゝなつて居るので、要するに女の犯罪者は比較上著しく少數なることが分かる次第である。然るに近年歐米に於て非常に増加しつゝある、少

年犯罪者に就て男女の数を比較して見るも、やはり男児の方が多数を占めて居るようである。之に就ても種々なる統計が出来て居るが、今千八百九十年に於ける米國の調査を参考として擧げるならば、

犯罪の種類	總數	男	女	兒	女兒一人に對する男兒の數
殺人	二九〇	二二二	五八	四	
破廉恥	四〇六	二二二	一九三	一、一	
窃盜	四八四七	四一三六	七一一	五、八	
詐欺、浮浪	一五六五	一二六〇	三〇五	四、二	
兩親に不從順	一三三三	一〇五五	二七八	三、八	
其他	一四八	一三八	一一	一二、五	

之に由て見るも不良男兒の數は、不良女兒の五倍強になつて居るので、要するに犯罪者の數は年

齡の如何に拘はらず、男性に著しく多いことが證明せられる譯である。

然らば何故に犯罪は女子に於て少數であるかと云ふに、モリソンは其著「犯罪及び其原因」と題する書物の中に、之に就て次のような種々なる理由を擧げて居る。即ち(一)女子は男子よりも一層道徳心に富んで居る。特に母として子女を教養すると云ふことは、女の最も大切な義務となつて居るので、爲に子女をして絶えず愛他心を旺盛ならしめ、それが遺傳的に本能のようになつて居る所からして、自然に女子をして犯罪から遠からしめて居るものである。(二)女子は一般に腕力に乏しく體力の弱いものであるが、之も亦女子をして犯罪を減少せしむる原因となつて居る。なぜと云ふに犯罪の中でも他人を毆打することか、又は強盜に押入るなど云ふことは、仲々腕力なり暴力を必要とするものであるから、到底かよわい女子の敢てし得る所でない。それで女子の犯罪と云へば、腕力なり暴力を要しない、毒殺とか子殺しとか墮胎とか云ふような種類のものに於て多数を占めて居るのである。(三)女子は屢々犯罪の教唆者となり煽動者となり、元より犯罪に關係するが、單に蔭にゐて尻押をするに止り、實際に之を敢行しないことの多いものであるから、

自然所罰を免れて居る次第で、爲に犯罪の数も少くなつて居るのである。盜賊の仲間が協力して仕事をする場合に、女子も亦其準備的の行動に加はつたり、又は掠奪品を處分する場合には與て力あるものであるが、實際に盜賊の所業に加はらないので、獨り男子のみが所罰せられることになつて居る。又女子が餘りに虚榮心に驅かれ、美服を装ひ贅澤なる生活を憚られる所からして、其夫をして犯罪を敢てせしめるようなことにもなるので、犯罪の原因は女子にありながら、獨り男子のみをして刑罰に觸れしめることになつて居るのである。(四)女子の社會的狀態も亦與つて大に力あるものである。即ち從來女子は何れの國に於ても、主として家を治め子女を育てることを以て其任務としてゐたからして、家族以外に於て活動することの殆どなかつたもので、隨て女子をして犯罪を敢てするの機會に逢遇せしめなかつたものである。然るに近代歐羅巴の婦人は一般に經濟上の獨立を圖り、男子と同じように商工業に従事するものゝ益々増加する傾向を生じ、甚だしきに至つては政治運動にも關係するようになつて來たので、自然犯罪者の数は追々と増加する有様となつて居る。それで女性犯罪者の最も多いのは、工業の最も盛んな蘇格蘭で、其反對に最も少いのは、

工業の最も微々たる希臘である。其故女子の獨立的生活と犯罪者の數とは、全く正比例をして居る次第である。以上四個の理由で略ぼ盡きて居るように思ふけれども、尙ほ此外にエリスの擧げて居る理由をも加へるならば、(五)女子は母としての任務を有つて居る所からして、人生に一層親しい關係を有つて居るのみならず、元來感動性の強いものであるから、非社會的であり又尋常ならざる行爲を敢てすることは、女子に於て有機的に困難なことになつて居るのである。(六)又女子の臆病なることは、女子をして容易に犯罪を斷行せしめないものである。一體女子の臆病は生理的に、即ち神經—筋肉系統に基礎を有つて居るものであるが、其爲によし犯罪的衝動が起つたりしても、容易に之を實現するに至らしめない。特に犯罪的衝動の爲に惹起された、血管—運動系統の擾亂、動搖に依てすらも、之を實現するに困難ならしむるものである。要するに犯罪的衝動は、そが行爲となる前に情緒の中に消滅して了ふようになつて居るのである。(七)尙ほ犯罪でも敢てしようとする病的の婦人は、往々娼婦となつて居るものであるが、娼婦となることは必ずしも常に犯罪を伴ふと云ふ譯ではないから、自然女性の犯罪者をして少數ならしむるものである。娼婦に墮

落することは女に取て悲むべきことではあるが、それが併し犯罪に陥ることを防禦することゝなつて居る次第である。

二 女性犯罪の種類 女性犯罪者の数の比較的少数なる理由は、以上の説明に依て了解せられる譯であるが、更に進んで女性の犯罪は如何なる種類に於て、最も容易に起り易いものであるかと尋ねるに、ロンブローゾの掲げて居る、伊太利で調査したレンコロニーの統計は、明確に之に答ふるものである。

犯 罪	一年間平均数 男	同 上 女	男百人に對する女の數
國 事 犯	九、二	〇、六	六、五
偽書罪及ビ商業上の犯罪	三四五、八	二四、〇	六、九
浮 浪 罪	一一四、六	一、〇	〇、八
色 慾 罪	二五一、〇	一五、六	五、一六

墮胎、殺兒罪	殺人、謀殺罪	毒 殺 罪	毆打、脅迫罪	辻 強 盜 罪	竊 盜 罪	詐 僞 罪	盜 品 受 領 罪	放 火 罪
一〇、八	一四四、〇	四、四	八九九、二	四七三、二	九一〇、八	二二、八	九二、二	四二、二
(五一、六)	四九、二	(五、四)	三四、二	五、八	六〇、八	一、四	(一八、六)	(三、八)
(四七六、八)	三、四	(二二、七)	三、八	一、二	六、六	六、三	(二〇、二)	(八、六)

此表に據れば、女性犯罪の比較上最も多數なるは、墮胎や殺兒罪であり、之に次ぐものは毒殺や盜品受領罪、それから放火罪等である。依てロンブローゾも之等四種の犯罪をば、女子の性質に最

も關係あるものと認定して居る。之に反して、浮浪罪や辻強盜や殺人罪や毆打罪などは、女性犯罪の中で最も少數なるものであつて、女子の性質には到底適當しないものである。

女子は元來愛情に富み隨て子女を愛撫するは、其本能と迄云はれて居るのになぜ墮胎や殺兒罪が女子に多いのであらうか。一般から考へたならば、幼兒を殺すなど、云ふ残忍な所業は、到底女子に出來さうに思はれない次第である。併し子女を生み且つ之を養育する直接の責任は女子の側にあるから、女子は妊娠した場合又は出産した場合に、善かれ悪かれ自分自身何とか子供を處分せねばならぬようになつて居るものである。然るに若しも正當なる結婚に依らずして、私通野合の結果私生兒を妊娠したとか、出産したとか云ふような場合に、(一)多くの女子は羞恥の餘り如何にもして其非行を蔽はんと思ふ所からして、是非を顧るの邊なく遂に此種の犯罪を實行するに至るものである、(二)其外生活上の壓迫、子女養育の困難に加ふるに、(三)男子の無情にして何等の救助を與へないとか、又は男子に強迫せらるゝような場合に、特殊の境遇は遂に女子を驅りて之等の犯罪を敢てせしめることになるものである。

尙ほ毒殺も亦女性犯罪の最も顯著なるもので、昔に近世に於て然るのみならず、遠く希臘の時代から屢々女子の試みし所である。然らば何故に毒殺は女子に多いかと云ふに、一體女子は腕力を缺いで居るので、公然腕づくで争ふことの出來ない所からして、自然毒殺の如き陰險にして狡猾なる手段を取るに至るものであつて、明かに女性的特色を現はして居る次第である。又盜品を受領し之を賣買するのも、直接に自分自ら強盜は勿論竊盜の犯罪をも實行しないで、私かに男子の犯罪を補佐するようなもので、狡猾な仕打であつて、之れ亦女子の性質を現はして居るものである。更に放火の如きも、直接に又公然と怨を晴らす勇氣を缺く所からして、他に陰險なる手段を取るものであり、又毫も腕力なり努力を用ゐないで、非常なる結果を獲得せしめんとする狡猾な方法を求める所から起るものであつて、つまり女性の特色を發揮したものである。

三 犯罪者の年齢 更に犯罪者の年齢に就て男女を比較して見るに、女子は元來男子より早熟であつて、身體も精神も早く發達するものであるけれども、犯罪では例外となり男子よりも比較的に晩成である。男性犯罪の最も多いのは、通例二十歳から二十五歳位の時で、女性犯罪の最も多い

のは、三十歳から三十五歳の頃だと云はれて居る。千八百八十六年に以多利で調査せられた統計は能く此事實を證明するものである。

年	年齢	犯罪数の百分比例男	同上	女
一	四—以	一、二九		一、四一
一	四—一	六、〇四		六、〇二
一	八—二	一三、二九		一〇、〇五
二	一—三	四六、九一		三九、三八
三	五—五	二三、二九		三〇、九四
五	〇—七	八、四〇		一一、六三
七	〇—以	〇、六八		〇、五七
			上	下

女子に在りて最も犯罪の多いのは、三十歳から三十五歳の頃だとすると、之は比較上女性犯罪者

の既婚者に多いことを示めすものであると、認定するの充分なる證據になるのである。然らば何故に女子に在りては、未婚者よりも既婚者に、一層多くの犯罪者を出すようになって居るものであるかと云ふに、何も結婚が直接に犯罪の原因となつて居る譯ではないが、(一)女子は結婚して家庭を組織した場合に、夫婦間の衝突とか不和とか、種々事件を生じ易いので、自然さう云ふことになつて居るのではあるまいか。(二)一體従來の女子は多く家庭にのみ立籠つて、男子のように社会的活動を執らないものであるから、随て犯罪も主として家庭的のものとなり、爲に久しい前から、女子は家庭的犯罪者であると迄云はれて居る次第である。斯様に女子は家庭的犯罪者であるとすると、その既婚者に多いのも亦偶然のことでない。(三)尙ほ此外に女子の数は壯年期に於て最も多數を占むるから、自然犯罪者も多いのではないかと云はれて居る。

四 再犯の多少 再犯に就て男女を比較して見るに、之も著しく女子に少數である。之に關する佛國の統計を見るに、

年	齡	犯罪數の百分比例男	同上	女
一八五一—五	五	三六		一六
一八五六—六	〇	三〇		一六
一八六一—六	五	四二		一七
一八六六—七	〇	四五		一七
一八七一—七	六	五一		一九
一八七七—八	〇	五三		二一

再犯者の數は漸次増加して居る傾向を示して居るけれども、併し女子の再犯者は著しく少數である。然るに獨逸の統計を見るに、千八百六十九年に男の再犯者は、全犯罪者の百分の七一で、女の再犯者は百分の六五であつたものが、千八百七十五年には、男で百分の七九、女で百分の八四と云ふように、却て女に多數となり、爾來男女間に殆ど差別なきことになつて居る。之等の事實は如

何に説明すべきものであらうか、元來女子に犯罪の少い理由は、又再犯の少い説明にもなる譯だが、女子は一度所刑でもされると、大に後悔し改心して再び犯罪的行爲を敢てしないものであり、男子程惡事をなすに大膽でないことが其原因となつて居るように思はれる。然るに近來女子に在りても、再犯者の數を増すようになったのは、如何なる理由に基くかと云ふに、ケルと云ふ人の説に據ると之は飲酒の爲らしい。なぜと云ふに、女子は概して酒に弱いから酔ひ易ひ、又酔へば狂ひ易いので、亂酔とか酔狂とか云ふことでは、女子に再犯者を一層多く出す次第である。

五 女子の獨立的生活と犯罪との關係 元來女子に犯罪の少い一つの理由は、既にモリソンも擧げて居るように、概して家庭生活を営み經濟上の獨立を企てないことにあるのであるから、若し女子にして生活難や結婚難の爲に、會社とか工場に働き、さうして獨立的生活を計るようになれば、自然犯罪者の數を増加するようになるのは、當然なことで何も不思議とする所はない。同じ歐羅巴に在りても、蘇格蘭は最も多く女性の犯罪者を出して居るさうである。一體蘇國の人民は古風な堅實な眞面目な性質で、宗教心にも厚く風俗も至て純樸であつたものであるが、製造なり工業が

盛んになつて、女工が増加するようになり、而かも賃銀は安く又監督も行届かぬと云ふ有様であるから、特にグラスゴーなどでは、女性の犯罪者が多いとのことである。既に掲げた所の、ロンブローゾの統計に據れば、女性犯罪者の数は平均百分の一四強であるが、蘇國では千八百八十年に百分の二七で、千八百八十八年には百分の三七になり、實に異數とする所であり、又漸次増加しつゝある傾向を示めして居る。そこでモリソンも、女子は職業的生活に入れば入る程、益々犯罪者の數を増すものであると斷言して居る。斯くて蘇國に次では獨逸、英吉利、白耳義、和蘭、丁抹、那威、露西亞、西班牙と云ふ順序で、希臘では最も少數である。尙ほ北米合衆國でも同様の事實を認めることが出来る。米國で犯罪的統計の權威と稱せらるゝ、ワイン博士の調査に據ると、工業の盛んな大西洋沿岸の諸州では、他の諸州よりも著しく多數の女性犯罪者を出して居ることが分かる。即ち新英州なり紐育州等大西洋方面の十八州では、女性犯罪者の數が百分の十二であるが、他の三十五州では僅に百分の四に過ぎないことになつて居る。さう云ふ有様であるから、女性の體質なり精神的特質は、女子をして犯罪から遠からしめつゝあるにも拘らず、近代的生活の傾向は漸次女性犯罪

者の數を増加せしめつゝある譯で、又止むを得ぬことゝは云ひながら、實に寒心すべきことゝ思ふので、吾々は適當なる社會政策を講じ、大に救済の途を計らねばならぬことゝ思ふのである。

以上種々なる方面から女性的犯罪の特色を説明したが、多少重複の嫌はあるけれども、参考の爲
ロンブローゾの下せる結論を挙げようと思ふ。

(一)女性犯罪者の數は、男性犯罪者の四乃至五分一に當るが、若し單に重罪のみに就て云ふなら、僅に六分一にしか過ぎないものである。

(二)女性犯罪者の數は、壯年期に於て最多數を占めて居る。

(三)女性的犯罪は、餘り體力や知力を要しないものに多い。

(四)一體若い時には、男女共に不意に激發する憤怒の情から犯罪を敢てし、大人になつては、豫め熟考を要するような犯罪を行ふものであるが、女性に在りては大人になつても、謀殺や殺人及び放火を敢てするものである。

(五)犯罪の數は、何れの國に在りても男女共に、概して固定して居るものであるが、伊太利では

重罪は男性間に減少し、女性間に増加しつゝあり、又輕罪は男女何れの間にも増加しつゝあり。

(六)女性犯罪として顯著なる幼児殺や墮胎は、開けた國程、古い習慣に依ると云ふよりも、一層餘計に羞恥心から實行せられて居るようである。

(七)都會的生活が犯罪者を増加せしめて居ることは、女子に於て一層著しいことであるが、特に毆打・強盜・竊盜などが増加しつゝある。

(八)淫賣婦となることは女子に在りては犯罪の代はりとなるものであるから、自然女子の犯罪をして少數ならしむるものである。所で女子の老年になりても、比較的犯罪の多い譯は、最早淫賣婦となることが出来ないからである。

六 女性犯罪の原因 之れ亦能く女性の特色を現はして居る。今ロンブローソの著「女性の犯罪者」に據り、女性的犯罪の主なる原因を擧げて見ようと思ふ。

(一)女子は一般に虚榮心に富み、爲に衣服なり裝飾品を欲求すること甚だ熱烈である所からして、知らず識らず現品を盗むか、又は盜品を賣却して裝飾品を購入するの資とするに至るものであ

る一體女は男と異り、自己の粗服なり質素な身形りを恥づること著しく、隨て美服なり裝飾品に對して堪へ難い欲望を感じ、之が女に取て強大なる誘惑となるものらしい。加ふに女は比較的權利とか責任とか義務など、云ふ觀念に乏しいものであり、自然財産と云ふ觀念にも薄い所からして、拾取物を届出ないで、直に自己の所有とするはまだしも、屢々商店に出入して竊盜なり、所謂萬引を敢てするに至るものである。下婢が主家の物品を盗むもこの爲で、田舎から都會に出て得ると、見るもの觸れるものが、悉皆彼等の心を動かす誘惑となり、加ふるに給金も充分でないで、自力で以て其欲望を満足させる譯にゆかないから、遂に盜心を起すに至るものである。タルノースキーの調査によると、女性竊盜の八十三「パーセント」迄は、手癖の悪い下婢の犯罪であると。然るに此種の犯罪は單に無教育な賤しい身分の下婢にのみ限るものでない。佛國巴里で有名な百貨店「ボン、マルセ」での話では、此店で萬引する女性の二十五「パーセント」は常習的に盜癖あるもので、他の二十五「パーセント」は、貪乏から起る普通の竊盜であるが、残りの五十「パーセント」は立派な身分ある淑女の一時の出來心から起る犯罪であるとのことである。上流の淑女は何も金錢に

缺乏して居ると云ふ譯ではないが、美はしい裝飾品などを見ると目も眩するばかりで、爲に抑へ難い誘惑を感じ、遂に思はず犯罪者たるに至るものである。

(二)女性是被暗示性に富んで居る所からして、其情人なり時としては親兄弟から、強迫せられ使喚せられた場合に、嫌々ながら本心にないことを敢てするに至るものである。それで往々自分には何等必要もない物を情人の爲に盗み取るとか、又特に墮胎は其教唆に依て敢行せらるゝものである。ロンブローゾは、墮胎の多數は男の暗示に基くと云ひ、ジゲールは、墮胎は殆ど凡ての場合に於て、女のみ行爲でなく、男の之を強迫するに依ると云ふて居る程である。尙ほ情人の教唆によらずとも、女子にして其妊娠したることに氣付、而かも出産を避けたいと思ふような時に、其友人とか知合のものが、自己の経験から墮胎の實行を使喚し、其途に長けたる産婆を周旋すると云ふように、種々勸誘盡力するので、遂に心にもないことを敢てする場合も少くないとのことである。又以て女子の意志薄弱にして、著しく依他的なることを知るに足ることである。

(三)女性の感情的なることも其一原因である。(イ)殺兒罪は主として女子の羞恥心に基くこと

は、既に述べて置た通りであるが、之は私生兒に對する世人の態度に依て増減するようである。即ち田舎の一般に物堅い地方では、私生兒を輕蔑することの大なるものであるから、自然墮胎も多く、之に反して都會では左程に輕蔑もしないのみならず、田舎に於ける如く目立たないので、爲に墮胎も少いとのことである。ロンブローゾの擧げて居る統計に依ると、

國	年	犯罪者數田舎	同上都會
佛	一八五一—五	三二	三五
蘭	一八七五—八	二一	二二
西	〇		
同	一八八五	三四	一七
以	一八八六	四〇	一九
多	一八八七	三二	一八
利	一八八八	三七	二〇
同			

(ロ)嫉妬心の女子に強いこと、少くとも嫉妬心を惹起さざるを得ざる機會の女子に多いことは明かな事實であるが、その爲に女子をして、其夫とか又は夫の情婦を殺害せしむるに至ることも少くない。之に就てロンブローゾは次のようなことを言ふて居る。曰く「之等の犯罪者は元來善良な婦人であるけれども、自分の幸福は傷害せられ、其爲に得たる他人の幸福を見ると、憤怒の情に堪へないで、嫉妬心の烈げしい爆發を生じ、遂に犯罪を敢行するに至るものである」と。又餘りに虐待せられたり、過度に侮辱せられたような場合にも、平生のたしなみも打忘れ、一時に逆上して其夫を殺害するに至るのも、往々見受けらるゝことである。要するに女子に在りては、愛情——憤怒——怨恨——嫉妬の情は相連關して發生し、其極抑制し難い程の激情となり、遂に女に不似合な暴行を敢てするに至るものである。(ハ)又子女に對する母たるものゝ愛情も、往々婦人をして種々なる罪惡を犯すに至らしむるものである。或は家貧にして子女の學資を得る能はざる場合、又は充分なる食物を給與し難い場合に、全然子女の爲めに窃盜を犯すようなこともあり。或は夫の他に情婦ある爲に、自分に對する愛情も自然薄らぎ、將に棄てられんとするに際し、自分の不幸は

兎も角若し夫の情婦にして一たび公然後妻たるに至らば、其女子の悲境に陥るや明かなるを以て、寧ろ子女の幸福の爲に、其情婦を殺害するに至るが如きは、全く母たるものゝ愛情から起たものである。

(四)女子に「ヒステリー」多きこと。「ヒステリー」は從來女子に特有の疾患であるかのよう、云はれた程女子に多いのは、今更説明を要しないことである。で「ヒステリー」に罹つたり、又は「ヒステリカル」な婦人は、如何なる精神的徴候を示めすものであるかと云ふに、其最も著しい點を擧げるなら、彼等の受感性は鋭敏となり、爲に些細なことに依りて刺戟され、以て或は喜び或は悲しむと云ふようになり、或は一寸したことにも癩癩を起し、喧嘩争論を敢てし、或は暴行の制止すべからざるようにもなり、總じて禁止作用の缺乏を來たすものである。又注意の集注力を失ひ、爲に心の動搖を來し、特に氣分の變化すること迅速で、或る瞬間には何事にも不平を抱き怒り易いが、次の瞬間には莞爾として笑みを呈すると云ふ有様である。又被暗示性著しくなり、模倣的動作に富み、反射的に無意的行動を呈するに至るものである。婦人は往々斯様な疾患に罹るものであ

るから自然犯罪的行為に陥り易くなるものである。特に虚言を弄したり、偽證や窃盜や殺人等を敢てし、又は色情亢進の爲に姦通をも行ふに至るは、「ヒステリカル」な婦人に能く見受けられることである。要するに女子は一般に、「ヒステリー」に罹り易い所からして、それが種々なる犯罪の原因にもなるものである。尙ほ婦人は月經中に、往々「ヒステリカル」な精神的徴候を呈するものであるから、能く犯罪を敢てするものである。ロンブローゾは、曾て巡査に抵抗したり、又は毆打罪の爲に拘引せられたる、八十名の婦人中僅に九名を除き、他は悉皆月經期中にあつたことを發見したと云ふ位である。其故平素から「ヒステリカル」な婦人であると、月經期中には特に犯罪を敢てする傾向を有つて居るものである。ロンブローゾも斯様な場合に、窃盜や放火は最も普通に起る犯罪であると云つて居る。

第十五章 女性と自殺

一 自殺者の數 之は男女何れに多いかと云ふに、之れ亦犯罪者の場合と同じように、男の方に著しく多數である。之は佛國で有名な精神病學者なるエスキロルの夙に言明したことであるが、エリスは綿密なる統計を作つて、其事實なることを確めて居る。今参考の爲次にその統計表を掲げることにした。

地名	年	百人中		地名	年	百人中	
		男	同上女			男	同上女
佛國	一八二七—八〇	七七	二三	埃多利	一八七六—七七	八三	一七
同	一八八六	七九	二二	匈牙利	一八五一—五四	七二	二八
パリ	一八四九—五四	六八	三二	瑞西	一八七六—八三	八六	一四
ロンドン	一八五八—五九	六九	三一	白耳義	一八六五—八三	八四	一六

同	英吉蘭	同	愛爾蘭	蘇格蘭	北米合衆國	ニューヨーク	普魯西	同	同
一八九一	一八五八—五九	一八九一	一八七四—八三	一八七七一八一	一八六〇	一八七〇—七二	一八五〇—五二	一八七二	一八八九
七六	七三	七五	七三	七〇	七九	七八	八二	八〇	七九
二四	二七	二五	二七	三〇	二一	二二	一八	二〇	二一
和	丁	同	那	瑞	フィンランド	露西亞	伊太利	同	西班牙
蘭	抹		威	典		亞	利		
一八七五—七九	一八三五—五六	一八六一—八六	一八六六—七三	一八六五—八二	一八七八—八三	一八七〇—七四	一八六七	一六七四—八三	
七八	七五	七八	七六	七八	八一	八〇	八一	八〇	七一
二二	二五	二二	二四	二二	一九	二〇	一九	二〇	二九

之に據て見ると、男女の自殺者を比較して、男性自殺者の最も多いのは瑞西であつて、女性自殺者の六倍強に當つて居る。而して最も少いのは西班牙であるが、それでも二倍半に當つて居る。

で平均した所三乃至四倍になつて居る。何故に西班牙の女は他國の女に比較して、斯くも多數の自殺者を出して居るか云ふに、モルセリは其原因をば彼等の激情に歸して居る。そは兎に角女性自殺者の比較的少數なることは、世界各國何れに於ても同様である。

然るに少年自殺者の數は、少年犯罪者の場合と同じように、何れの國に於ても、近來漸次増加して居る傾向であるが、之もやはり男子の方に多數の自殺者を出して居る。今英國で千八百八十六年の頃に調査した、オーグルの統計表に據るならば、次のようになつて居る。

年	年齢	女	女百人ニ對シテ男	年	年齢	女	女百人ニ對シテ男
一〇—一五	一〇〇〇	一三三三	四五—五五	一〇〇〇	一六三三		
一五—二〇	一〇〇〇	(八七)	五五—六五	一〇〇〇	三三三三		
二〇—二五	一〇〇〇	一八二	六五—七五	一〇〇〇	三四九		
二五—三五	一〇〇〇	二三六	七五—八五	一〇〇〇	三六〇		

三五一四五

一〇〇

二八二八五

一〇〇

四九一

即ち十歳から十五歳の間には於ける、所謂少年期に於ても、其他の年齢に於けると同様に、男性自殺者は常に多數を占めて居るが、たゞ獨り十五歳から二十歳の頃では、却て女性自殺者の方多數を呈して居る。之は何れの國に於ても認めらるゝ事實であつて、つまり女子に於ける早熟の然らしむる所と見做されて居る。蓋し女子の成熟は男子より少しく早く、十五六歳の頃にもなると、急に著しい發達を遂げるので、自然自殺も早熟になるのである。特に此時期に於て、若氣の至りで不身持なことでもあつて、其結果妊娠などした場合に、之を恥ぢて自殺を敢てするような隠れた事情も、亦其原因となつてはゐないかと思はれるのである。それは兎も角此の時期は例外であつて、概観した時には、女性自殺者の數は男性自殺者に比し、著しく少數であることを認め得る次第である。

然らば何故に、女性間に自殺者の數は少いのであらうか。之にも犯罪者の場合と同じように、何等かの理由がなければならぬ。で今エリスの説いて居る所に據りて、其原因と思はるゝ事情を舉

げて見よう。

(一) 女は生存競争に於て男程に難儀しないと云ふこともあるし、又男よりも一層容易に如何なる生活状態にも適合し得る性質を有つて居る。加之女は男よりも一層犠牲の念に富み、且つ如何なる悲運にも諦め易い性質を有つて居るし、又宗教心にも厚く、世間の評判をも懸念するものであり、特に又飲酒の習癖も少い所からして、自然自殺でもしなければならぬような有様に陥らないものである。

(二) 然るに或は思へらく、なる程女性自殺者の數は少い、之を男性自殺者の數に比べると、著しい相違を現はして居るのは事實であるが、併し女の方が所謂氣が小さく量見が狭いので、些細なる出来事からして、いつそ自殺でもしたらと云ふ心を起し易いものであるから、さう云ふ者の數迄勘定に入れたならば、女性自殺者の數は大に増加することとなり、隨て自殺者の數は男女間に大した差異は起るまい。所が何故女子は自殺しようと思ひながら、之を斷行せぬかと云ふに、そこが女性の特徴で、つまり之を實行するだけの勇氣を有たないのである。爲に眞に自殺する者の數は少い

ことになつて居るのである。

(三)女は單に氣が小さいとか、量見が狭いとか云ふに止らずして、キャンベルの言ふ所に據れば、女は男よりも一層多く、輕症なる憂鬱病に罹り易いものであるから、自然往々自殺しようとする心を起し易いものであるさうだ。而かも何故實際に自殺を執行しないかと云ふに、キ氏の説では、女が勇氣を缺いて居ると云ふよりも、寧ろ女は諦めがよいのと、義務心が強いからと云ふことになつて居る。併し私は女の如何なる悲境にも諦め易いことや、子供を思ひ家事に焦慮する、母なり妻としての義務心の強いことも承認するが、同時に自殺の如き暴行を敢てする勇氣を缺いて居ることも、明かな事實であると思ふので、之等の事情は同じように、女性自殺者の數を減少せしめる原因となつて居るものと思ふ。

(四)更に又女も屢々自殺せんとの意志を生じた場合に、往々實際に之を執行せんと試みることであらうが、女は自殺の方法に就て充分なる知識なり技術を缺いて居るし、又一般に女の取る自殺の手段、例せば投水とか服毒の如きは、往々自殺をして不成功に了らしむるものであるから、自然

女の自殺は失敗に歸することの多いもので、爲に自殺者の數を減少せしめて居るのである。其故自殺心を起したものの數でなくとも、若し實際自殺を試み而かも失敗した者の數だけでも勘定に入れたら、女性自殺者の數は餘程増加するであらうとのことである。

然るに一體自殺は男女を通じて、田舎よりも都會に、又農業地よりも工業地に、一層多數であると云ふことであるが、商工業の盛んな都會では、段々に女工が殖え、爲に經濟的獨立を圖る婦人も増して來るので、恰んどさう云ふ場合に女性犯罪者の増加するように、女性自殺者の數も多くなつて居ることである。要するに之は女性が段々に男性化するからのことで、又止むを得ないことではあるが、併しなるべく之等の婦人に慰安を與へる方法を講ずるとか、又は飲酒の如き悪い習慣に染まぬよう注意して、女性自殺者の増加を防ぎたいものである。幸ひ歐羅巴では男性自殺者の増加する割合に、女性自殺者は増加して居らないとのことである。

二 自殺の原因 女性自殺者の比較的少數なること、及び其理由に就ては既に説明した所であるから、私は更に進んで自殺の原因なり動機に就て、男女を比較しさうして何等か女性の特色は見

られないものか、少しく穿鑿して見ようと思ふ。所で男女を通じて自殺の原因となる主なる事情は、肉體の苦痛、貧困、愛情、發狂、悔改等であらうと思はれるので、之等の事情に就て、男女の自殺數を比較して見やう。

(一)肉體の苦痛、即ち疾病とか負傷とか云ふような、肉體の痛苦に堪へられないで、其極自殺する者は男女何れに多いかと云ふに、モルセリは男女全體の自殺者各百人中に於ける割合を擧げて居るので、参考の爲之を次に掲げよう。

地	名	男	女
獨逸	逸(一八五二—一六一)	九、六一	八、〇八
白耳義	義	一、三四	〇、八四
佛蘭	西(一八七三—一七八)	一四、三八	一三、五六
マドリット	(一八八四)	三一、八一	三一、二五

普魯	西(一八六九—七七)	六、〇〇	七、〇〇
ザクセ	ン(一八七五—七八)	四、六一	六、二一
伊多	利(一八六六—七七)	六、七〇	八、五〇
ウキーン	(一八五一—五九)	九、二〇	一〇、〇四
同	(一八六九—七八)	七、七三	一〇、三七
巴里	(一八五一—五九)	一〇、二七	一一、二二

此表に據ると、獨逸や白耳義等では、男の方に割合が多くなつて居るけれども、普魯西や伊多利等では、女の方が割合が多くなつて居る。併し之は全體の自殺者百人中での割合であるから、例せば右の表にて、最も多く女の方に割合が多くなつて居る、ウキーンの男九、二〇に對する、女の一〇、〇四即ち男の一に對する女の一、三四と云ふ割合に就て云ふも、全體に於ける自殺者の數は、男の方非常に多くて、常に女の三乃至四倍に當つて居るのであるから、實際身體的痛苦から自殺す

る者は、ウキーンでも、男の方に著しく多数である譯である。まして女の方が割合に少なくなつて居る、獨逸や白耳義では、這般の自殺者が男の方に非常に多くなつて居ることは云ふを俟たないことである。

然らば何故に女性間には、身體的痛苦に基く自殺者の数が少いのであらうかと云ふに、之れは云ふ迄もなく、女の體質が疾病や負傷に對する抵抗性を餘計に有ち、隨て容易に忍耐し得るからである。

(二)貧苦、缺乏、生活難も亦屢々自殺の原因となるものであるが、之に就て男女を比較して見るに、やはり女の方遙かに少數である。私は既に緒論の所で、男女の有機的差異を證明する爲に、ロンプローゾの統計を擧げて置たが、あの表に據て見ても、何れの國でも、生活難から自殺する者は著しく男に多くて、女に少いことが分かる。然らば何故に這般の自殺者は女性間に少數なのであらうかと云ふに、つまる所女性性は、(イ)體質の關係で粗食に堪へ得られるし、貧乏生活に辛抱し易いからである。又女は豫て、(ロ)適應性に富んで居るので、若し一朝過つて窮乏の身となるも、能

く貧乏相應の生活をなし、そのような境遇に適合し易いものであるから、敢て自殺するに及ばないのである。ノルドーは次のようなことを云ふて居る。曰く「公爵夫人と洗濯婦との性質上の差異は、單に表面上のものに過ぎない。と云ふのは公爵婦人と雖も萬一破産窮乏の身とならんか、能く其境遇に自己を適應せしめ、さうして容易く洗濯婦になり變はることの出来るものであるからである」と。之は元より極端の言であらうけれども、一體に身分の良い夫人方でも、一朝夫の失敗によりて家計の傾いた場合に、隨分女中とか侍女の位置に落ちぶれても、敢て厭はない態の見へるものであるが、男は仲々さう云ふ風にゆかない。一度贅澤な貴族的の生活に慣れてゐたものなら、容易に貧乏生活に甘んずる能はざるものである。其故貧苦窮乏の餘り屢々男は自殺を敢てするに至るのである。(ハ)又事業に失敗して破産を來たと云ふような場合に、直接に責任を感じるものは、男であつて、女は左程に之を感じないから、男のように心痛しいものである。加之(ニ)女は子供のことを思ひ、その前途を氣遣ふものであるから、貧の苦しみにも耐へ、容易に自殺を決行せぬ次第である。之に反して男は家計上の責任を感じることは大いけれども、子供のことは餘り掛